

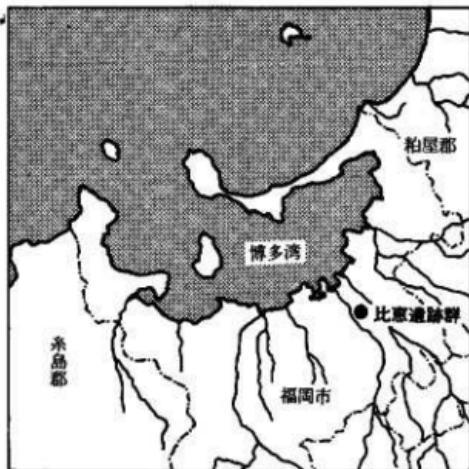
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第174集

比恵遺跡群(8)

1988

福岡市教育委員会

比恵遺跡群(8)



1988

福岡市教育委員会

序 文

九州の中核管理都市をめざす福岡市は、大陸文化享受の門戸として、先史時代から栄えてきました。そのため、市内には数多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用につとめていますが、市内の都市整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、現在、再開発が進みつつある博多区駅南地区に所在する比恵遺跡群の第12次・第14次・第16次地点遺跡の報告書です。

発掘調査の結果、第12次調査地点では、古墳時代から古代の集落、第14次調査地点では、弥生時代の井戸群、第16次調査地点では、弥生時代の変形墓・土塁墓からなる墓地群などが検出されました。比恵遺跡群における各時代の環境復元のため良好な資料を得ることができました。

溝上佐和子氏、松屋工業株式会社、近藤忠商事株式会社をはじめとする関係各位の協力に対し感謝の意を表するとともに、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が宅地造成等の開発事業の事前調査として1986年度に実施した比恵遺跡群の発掘調査のうち、第12・14・16次調査の報告書である。
2. 比恵遺跡群の発掘調査報告書はすでに数冊が発行されている。しかし、それらには遺跡名を始め報告書の表題等に統一がなく、本遺跡群に関する調査、報告が今後増加すると予測されるだけに混乱をまねくおそれが生じてきた。こうした理由により本報告書から比恵遺跡群の調査報告書については、表題を「比恵遺跡群」とし、発行順に数字で(1)、(2)、(3)…と付加して表記することとした。なお、既報告書を下記の通り番号で表すので本報告書は「比恵遺跡群」(8)となる。
 - (1) 吉岡完祐「瑞穂—福岡市比恵台地遺跡—」日本住宅公団 1980
 - (2) 横山邦維編「比恵遺跡—第6次調査・遺構編—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集 1983
 - (3) 柳沢一男「比恵遺跡—第8次調査概報—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集 1985
 - (4) 小林義彦「比恵遺跡—第7次調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第117集 1985
 - (5) 横山邦維編「比恵遺跡—第6次調査・遺物編—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集 1986
 - (6) 杉山富雄編「比恵遺跡—第9・10次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集 1986
 - (7) 山崎龍雄・米倉秀紀「比恵遺跡—第11次調査—」「中部地区埋蔵文化財調査報告Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 1987
3. 調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が実施した。
4. 本書の作成は山口譲治・吉留秀敏・城戸康利・李弘鑑の討議のもとに、第1・2・6章は山口譲治、第4章を城戸康利、第5章2-4)を太田睦・吉留秀敏が、その他を古留秀敏が分担執筆し、吉留秀敏が編集した。
5. 遺構実測は調査参加者全員がおこない、掲書は城戸康利・丰田裕二・山口朱美・尾崎君枝がおこなった。
6. 遺物実測は太田陸・城戸康利・丰田裕二・李弘鑑・吉留秀敏がおこない、掲書は城戸康利・吉留秀敏がおこなった。
7. 遺構の写真は山口譲治・野村俊之・上方高弘・吉留秀敏が撮影し、遺物の写真は上方高弘が撮影した。
8. 本書に使用した方位は磁北である。真北との偏差は西偏06°21'である。
9. 第12・14・16次調査地点出土遺物および調査記録等は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開して活用していく。

本文目次

第 1 章	序説	
1	はじめに	1
2	調査体制	2
第 2 章	遺跡の位置と歴史的環境	
1	遺跡の位置と立地	5
2	比恵遺跡群とその歴史的環境	5
第 3 章	第12次調査地点	
1	調査の概要	9
2	調査の記録	9
1)	出土層位	9
2)	検出遺構	11
3)	その他の遺構と遺物	15
3	小結	16
第 4 章	第14次調査地点	
1	調査の概要	17
2	調査の記録	18
1)	井戸址	18
2)	その他の遺構	37
3	小結	40
第 5 章	第16次調査地点	
1	調査の概要	41
2	調査の記録	43
1)	豪棺墓	43
2)	土塙墓	46
3)	竪穴式住居址 (SC-14)	52
4)	古墳周溝 (SD-10)	53
第 6 章	1986年・1987年度調査地点概要	
1	第13次調査地点	59
2	第15次調査地点	61
3	第17次調査地点	63
第 7 章	結語	65

挿 図 目 次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺の主な弥生時代遺跡 (縮尺1/50,000).....	3
Fig. 2	2・6・13・16・17地点図 (縮尺1/1,000).....	4
Fig. 3	比恵・那珂遺跡群位置図 (縮尺1/10,000)	6
Fig. 4	土層堆積模式図 (縮尺縦軸1/20)	9
Fig. 5	第12次調査地点遺構分布図 (縮尺1/200)	10
Fig. 6	第1号堅穴式住居址実測図 (縮尺1/60)	11
Fig. 7	第1号堅穴式住居址出土遺物 (縮尺1/4)	12
Fig. 8	第6号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)	13
Fig. 9	第7号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)	13
Fig. 10	その他の出土遺物 (縮尺1/4)	14
Fig. 11	前期(板付Ⅱa式)遺物と紡錘車 (縮尺1/2)	15
Fig. 12	土層堆積模式図 (縮尺1/80)	17
Fig. 13	第14次調査地点遺構分布図 (縮尺1/200)	18
Fig. 14	井戸址配置図および井戸址断面図 (縮尺1/200・1/40)	19
Fig. 15	第1号井戸実測図 (縮尺1/30)	20
Fig. 16	第1号井戸出土遺物(1) (縮尺1/4・1/2)	21
Fig. 17	第1号井戸出土遺物(2) (縮尺1/4)	22
Fig. 18	第2号井戸実測図 (縮尺1/30)	23
Fig. 19	第2号井戸出土遺物 (縮尺1/4)	24
Fig. 20	第3号井戸実測図 (縮尺1/30)	26
Fig. 21	第3号井戸出土遺物 (縮尺1/4・1/2)	27
Fig. 22	第4号井戸実測図 (縮尺1/30)	29
Fig. 23	第4号井戸出土遺物(1) (縮尺1/4)	29
Fig. 24	第4号井戸出土遺物(2) (縮尺1/4)	30
Fig. 25	第5号土塙実測図 (縮尺1/30)	32
Fig. 26	第5号土塙出土遺物 (縮尺1/4)	32
Fig. 27	第6号井戸実測図 (縮尺1/30)	34
Fig. 28	第6号井戸出土遺物 (縮尺1/4)	34
Fig. 29	第8号井戸実測図 (縮尺1/30)	35
Fig. 30	第8号井戸出土遺物 (縮尺1/4・1/2)	36
Fig. 31	第7号土塙実測図 (縮尺1/60)	37
Fig. 32	第7号土塙出土遺物 (縮尺1/4)	38
Fig. 33	第9号堅穴式住居址実測図 (縮尺1/60)	38
Fig. 34	ピット内出土遺物 (縮尺1/4)	39
Fig. 35	第16次調査地点遺構分布図 (縮尺1/200)	42
Fig. 36	甕棺墓出土状況実測図 (縮尺1/30)	44
Fig. 37	甕棺実測図(1) (縮尺1/12)	45
Fig. 38	甕棺実測図(2) (縮尺1/12)	46
Fig. 39	土塙墓実測図(1) (縮尺1/30)	47
Fig. 40	土塙墓実測図(2) (縮尺1/30)	48
Fig. 41	土塙墓内出土遺物(1) (縮尺1/4)	49
Fig. 42	土塙墓内出土遺物(2) (縮尺1/4)	50

Fig. 43	第14号竪穴式住居址実測図	(縮尺1/60)	51
Fig. 44	第14号竪穴式住居址出土遺物	(縮尺1/4)	52
Fig. 45	古墳周溝土層断面図	(縮尺1/40)	53
Fig. 46	古墳周溝内出土遺物(1)	(縮尺1/4・1/12)	54
Fig. 47	古墳周溝内出土遺物(2)	(縮尺1/8・1/4)	55
Fig. 48	古墳周溝内出土遺物(3)	(縮尺1/4・1/3・1/2)	56
Fig. 49	古墳周溝内出土遺物(4)	(縮尺1/2)	57
Fig. 50	ピット内出土遺物	(縮尺1/4)	58
Fig. 51	第13次調査地点遺構分布図	(縮尺1/200)	60
Fig. 52	第7・13次調査地点主要遺構分布図	(縮尺1/600)	61
Fig. 53	第15次調査地点遺構分布図	(縮尺1/200)	62
Fig. 54	第17次調査地点遺構分布図	(縮尺1/200)	64
Fig. 55	第2・6・16・17次調査地点における墳墓とその分布	(縮尺1/800)	66

付図 比恵遺跡群の旧地形復元および調査地点分布図 (縮尺1/4,000)

図版目次

- PL. 1 (1) 比恵12次調査区南半(北より)
 (2) 比恵12次調査区北半(南より)
- PL. 2 (1) 第1号竪穴式住居址(SC-01)(南より)
 (2) 第5号掘立柱建物(SB-05)(東より)
 (3) 第6号掘立柱建物(SB-06)(北東より)
 (4) 第7号掘立柱建物(SB-07)(北より)
 (5) 第8号溝(SD-08)(南より)
- PL. 3 (1) 比恵14次調査区全景(南西より)
 (2) 比恵14次調査区北東部全景(南西より)
- PL. 4 (1) 調査区内井戸分布状況(南西より)
 (2) 第1号井戸(SE-01)完掘状況(西より)
 (3) 第2号井戸(SE-02)遺物出土状況(西より)
 (4) 第2号井戸(SE-02)完掘状況(北東より)
- PL. 5 (1) 第3号井戸(SE-03)遺物出土状況(北より)
 (2) 第3号井戸(SE-03)完掘状況(北西より)
 (3) 第4号井戸(SE-04)遺物出土状況(南より)
 (4) 第4号井戸(SE-04)完掘状況(南西より)
- PL. 6 (1) 第6号井戸(SE-06)遺物出土状況(南西より)
 (2) 第6号井戸(SE-06)完掘状況(北東より)
 (3) 第8号井戸(SE-08)遺物出土状況(北より)
 (4) 第8号井戸(SE-08)完掘状況(北東より)
- PL. 7 (1) 第5号土塹(SK-05)遺物出土状況(北東より)
 (2) 第5号土塹(SK-05)完掘状況(北西より)
 (3) 第7号土塹(SK-07)完掘状況(南より)
 (4) 第9号竪穴式住居址(SC-09)完掘状況(北より)
- PL. 8 第2号井戸(SE-02)出土土器

- PL. 9 (1) 第3号井戸 (SE-03) 出土上器
(2) 第4号井戸 (SE-04) 出土土器 1
- PL. 10 第4号井戸 (SE-04) 出土土器 2
- PL. 11 (1) 第8号井戸 (SE-08) 出土土器
(2) 第5号土塚 (SK-05) 出土土器
(3) 第7号土塚 (SK-07) 出土土器
- PL. 12 (1) 第1号井戸 (SE-01) 出土遺物
(2) 第2号井戸 (SE-02) 出土遺物
(3) 第3号井戸 (SE-03) 出土遺物
(4) 第8号井戸 (SE-08) 出土遺物
- PL. 13 (1) 比恵16次調査区北東部 (南西より)
(2) 比恵16次調査区北東部 (北より)
- PL. 14 (1) 第1号壺棺墓 (SK-01) (北より)
(2) 第2号壺棺墓 (SK-02) (東より)
(3) 第3号壺棺墓 (SK-03) (西より)
(4) 第13号壺棺墓 (SK-13) (東より)
- PL. 15 (1) 第5号土塚墓 (SK-05) 完掘状況 (南西より)
(2) 第6号土塚墓 (SK-06) 完掘状況 (南西より)
(3) 第7号土塚墓 (SK-07) 完掘状況 (北より)
(4) 第8号土塚墓 (SK-08) 完掘状況 (西より)
- PL. 16 (1) 第11号土塚墓 (SK-11) 完掘状況 (北より)
(2) 第12号土塚墓 (SK-12) 完掘状況 (北より)
(3) 古墳周溝 (SD-10) 完掘状況 (南より)
- PL. 17 調査区西側・古墳周溝 (SD-10) 及び第14号竪穴式住居址 (SC-14) (南東より)
- PL. 18 (1) 第1号壺棺墓 (SK-01) 出土壺棺 (上壺)
(2) 第1号壺棺墓 (SK-01) 出土壺棺 (下壺)
(3) 第3号壺棺墓 (SK-03) 出土壺棺 (上壺)
(4) 第3号壺棺墓 (SK-03) 出土壺棺 (下壺)
- PL. 19 (1) 第2号壺棺墓 (SK-02) 出土壺棺
(2) 第13号壺棺墓 (SK-13) 出土壺棺 (下壺)
(3) 第5号土塚墓 (SK-05) 出土壺棺
(4) 第5号土塚墓 (SK-05) 出土壺棺
(5) 古墳周溝 (SD-10) 出土須恵器
- PL. 20 (1) 比恵13次調査区全景 (東半部) (南西より)
(2) 比恵13次調査区全景 (東部隅を除く) (南西より)
- PL. 21 (1) 比恵15次調査区全景 (北東より)
(2) 比恵15次調査区及び周辺景観 (北東より)
- PL. 22 (1) 比恵17次調査区・調査途中全景 (北東より)
(2) 比恵17次調査区・完掘後全景 (北東より)

第1章 序説

1. はじめに

比恵遺跡群が所在する博多区駅南地区は、住宅が密集し、建物は老朽化している。近年、山陽新幹線・地下鉄の開業に伴い、本地区の都市整備事業および再開発が盛んに行なわれるようになった。この地区では年間数十件の再開発が計画・実施されている。埋蔵文化財課では、再開発計画を受けて試掘調査を実施し、各地点の状況を把握し、遺跡保存のために地権者と協議を重ね、計画変更をお願いしてきている。しかし、止むをえないときは、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなど、地権者と協議を行ない、契約事項がととのい次第、記録保存のための調査を実施してきている。これまで11調査地点（文化課発足前の3調査地点を含む）の調査を実施し、多大な成果を得ている。

1986年の第12・14・16次の3調査地点、1987年の第17次調査地点の発掘調査は再開発の計画を受け、前述の行程を踏まえて、調査契約がととのい、実施したものである。

第12次調査地点

道 路 地 国 号	8816	道 路 番 号	HIE-12	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅西四丁目11-35				
面 積 有 価	439.00m ²	調 查 对 象 面 価	439.00m ²	調 查 実 施 面 価	286m ²
調 查 期 間	1986年7月12日～同年7月31日（延べ）20日				

第14次調査地点

道 路 地 国 号	8815	道 路 番 号	HIE-14	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅北六丁目9-1				
面 積 有 価	410m ²	調 查 对 象 面 価	410m ²	調 查 実 施 面 価	288m ²
調 查 期 間	1986年8月2日～同年8月26日（延べ）25日				

第16次調査地点

道 路 地 国 号	8817	道 路 番 号	HIE-16	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅南四丁目8-13				
面 積 有 価	306m ²	調 查 对 象 面 価	306m ²	調 查 実 施 面 価	122m ²
調 查 期 間	1986年9月16日～同年10月11日（延べ）26日				

第17次調査地点

道 路 地 国 号	8817	道 路 番 号	HIE-17	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅南四丁目17-3				
面 積 有 価	512m ²	調 查 对 象 面 価	512m ²	調 查 実 施 面 価	493m ²
調 查 期 間	1987年6月29日～同年7月31日（延べ）39日				

以上のはかに、個人住宅建設に伴う発掘調査を国庫補助を受け、1986年度に2ヶ所実施した。

第13次調査地点

道 路 地 国 号	8817	道 路 番 号	HIE-13	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅南四丁目15-3				
面 積 有 価	661m ²	調 查 对 象 面 価	661m ²	調 查 実 施 面 価	504m ²
調 查 期 間	1986年7月14日～同年9月17日（延べ）50日				

第15次調査地点

道 路 地 国 号	8836	道 路 番 号	HIE-15	分 布 地 国 号	032-A-1
調 查 地 価	博多区博多駅北六丁目9-6				
面 積 有 価	508m ²	調 查 对 象 面 価	508m ²	調 查 実 施 面 価	275m ²
調 查 期 間	1986年8月5日～同年9月27日（延べ）44日				

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできなかったが、調査委託者である溝上佐和子氏・松尾隆氏・田中康子氏・松屋工業株式会社・近藤忠商事株式会社・長崎観光物産株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行したことを明示して、協力に謝意を表する。なお、第13・15次調査の整理作業も、順調に進行していることを報告しておく。

第12～16次調査地点

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

教育長 佐藤善郎 文化部長 河野清一（前） 川崎賢治（現）

埋蔵文化財課長 梶田純孝 第1係長 折尾学 第2係長 飛高憲雄

調査指導 横山浩（九州大学教授）、森貞次郎（九州産業大学教授）、乙益重隆（國學院大学教授）、西谷正（九州大学教授）、渡辺正気（元九州歴史資料館）、山中誠史（国立奈良文化財研究所）、三島格（元福岡市歴史資料館長）、田村圓澄（九州歴史資料館館長）、坂上康俊（九州大学助教授）、小田富士雄（北九州市立考古館館長）、甲元真之（熊本大学助教授）、石松好雄（九州歴史資料館調査課長）、沢村仁（九州芸術工科大学教授）、服部英雄（文化省調査官）、宮下智宏・栗原和彦（福岡県教育庁文化課課長補佐）、下藤信行（愛媛大学助教授）、鬼田修一（岡山理科大学講師）

調査担当 山口謙治（第12～15次）、占留秀敏（第12～16次）

試掘調査担当 山崎純男（文化財主事）、杉山富雄（現第1係）、小林義彦

事務担当 松延好文

調査補助員 松田潤紀（現愛知県埋蔵文化財センター）、野村俊之（現筑紫野市教育委員会）、李弘鍾（九州大学院）、李永植（早稲田大学大学院）、太田陸（九州大学）、城戸康利、上方高弘、池ノ上宏・板坂和博・中村清治・安河内敏幸・岡元晃一・川野圭史（福岡大学）、三塙美由紀（西南学院大学）

第17次調査地点

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

教育長 佐藤善郎 文化部長 川崎賢治 埋蔵文化財課長 梶田純孝

第一係長 折尾学 第2係長 飛高憲雄

調査協力者 浜田昌治

調査担当 山口謙治、占留秀敏

試掘調査担当 下村智、大庭康時

事務担当 松延好文

調査補助員 李弘鍾（九州大学大学院）、城戸康利、上方高弘、浜田学（別府大学）、星山洋（日本大学）

調査体制

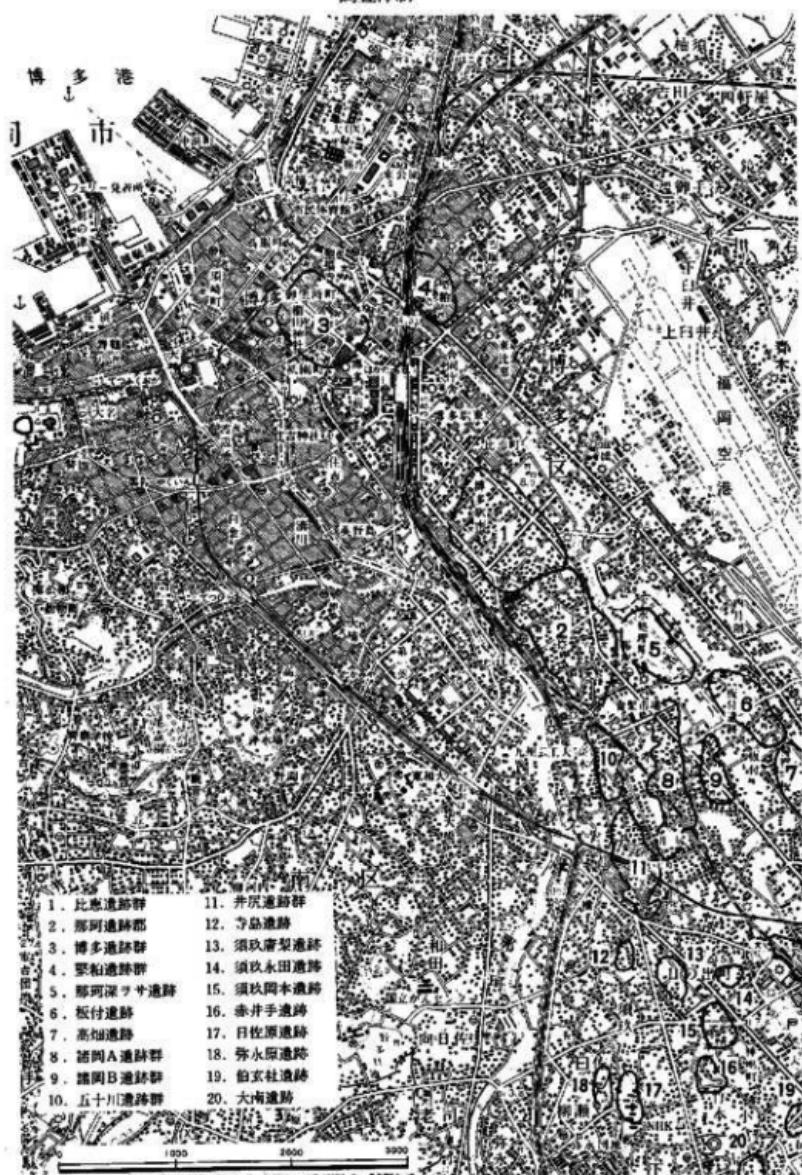


Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の主な弥生時代遺跡 (縮尺 1/50,000)

第1章 序説

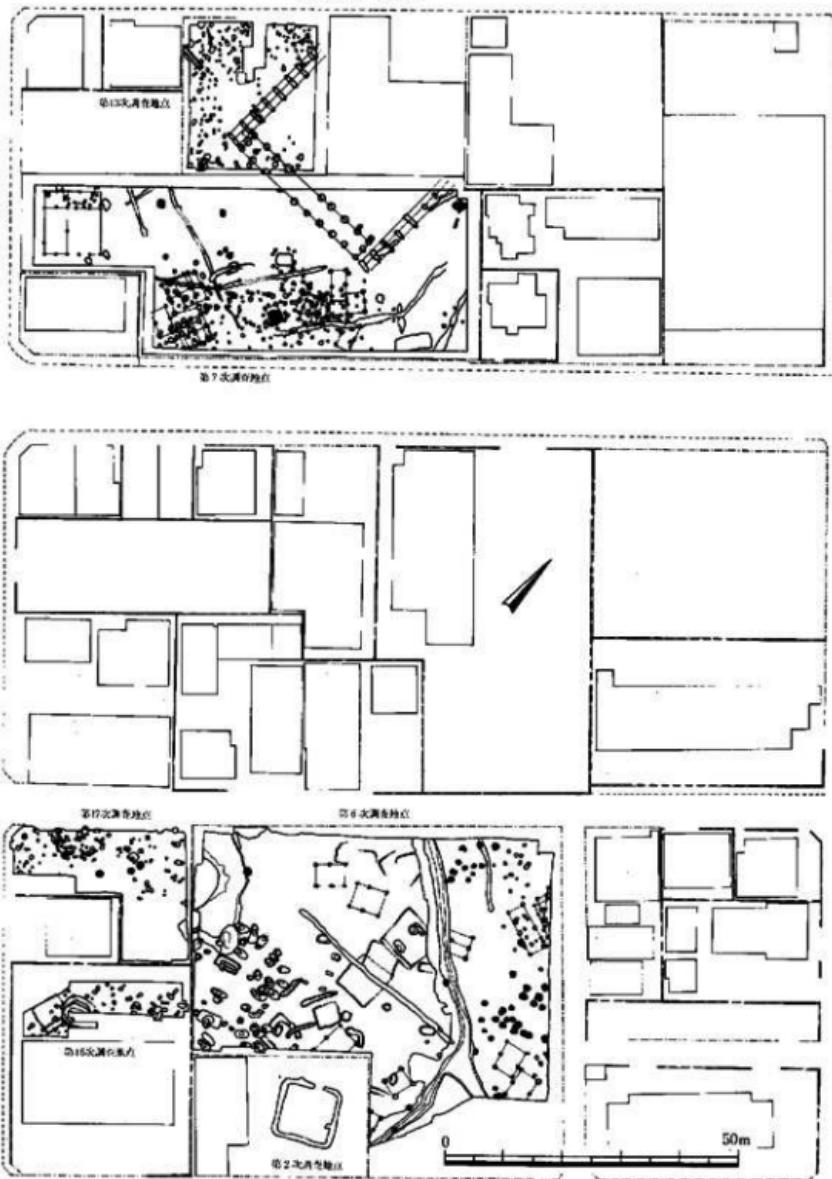


Fig. 2 2・6・13・16・17地点図 (縮尺 1/1,000)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川、平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。那珂川の下流域から中流域にかけての間には、洪積段丘が発達している。比恵遺跡群はこのような段丘の一つである那珂・比恵中位段丘上に位置している。

現在、この地域は市街化が進み、標高6.5m前後の平坦な地形となっている。これは1930年代後半に行なわれた区画整理によるものである。本来は多くの開析谷があり、複雑な景観をもっていたと考えられる。

第12・13次調査地点は、那珂・比恵台地の北部中央に位置している。第12次調査地点は、国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から19.6cm、東から12.8cmの位置、第13次調査地点は同じく北から19.7cm、東から12.6cmの位置にある。

第14・15次調査地点は、比恵台地の中央部に位置しているが、両調査地点間には浅い谷がある。なお、第15次調査地点は第9・10次調査地点の西側隣接地である。第14次調査地点は国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から20.4cm、東から12.1cmの位置、第15次調査地点は同じく北から20.2cm、東から12.1cmの位置にある。

第16・17次調査地点は、第6次調査地点の西側隣接地で、第13次調査地点と第9・10・14・15次調査地点の間、第5次調査地点の東側に位置している。第16次調査地点は国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から19.9cm、東から12.4cmの位置、第17次調査地点は同じく北から19.9cm、東から12.5cmの位置にある。

2. 比恵遺跡群とその歴史的環境

第12～17次調査地点については以下の章で述べるが、まず、これまで行われている第1次から第11次調査地点について概要をみていくことにする。

第1次調査地点 1933年頃から始められた本地区の土地区画整理事業に伴って、平坦面が造り出された。その際、森貞次郎氏が土取りの断面に堅穴式住居址を発見し、1938年から1939年にかけて鏡山猛・森氏によって、発掘調査が実施された。この調査地点は第9・10次調査地点と一部合致している。この調査においては環濠をもつ弥生時代から古墳時代の集落、弥生時代中期から後期の壺棺墓群などが検出された。（文献1、2）

第2次調査地点 1952年に小林町市営住宅建設に伴う発掘調査が、森貞次郎氏によって行なわれた。この調査においては、弥生時代の壺棺墓群、環濠遺構が検出されている。また、本調査

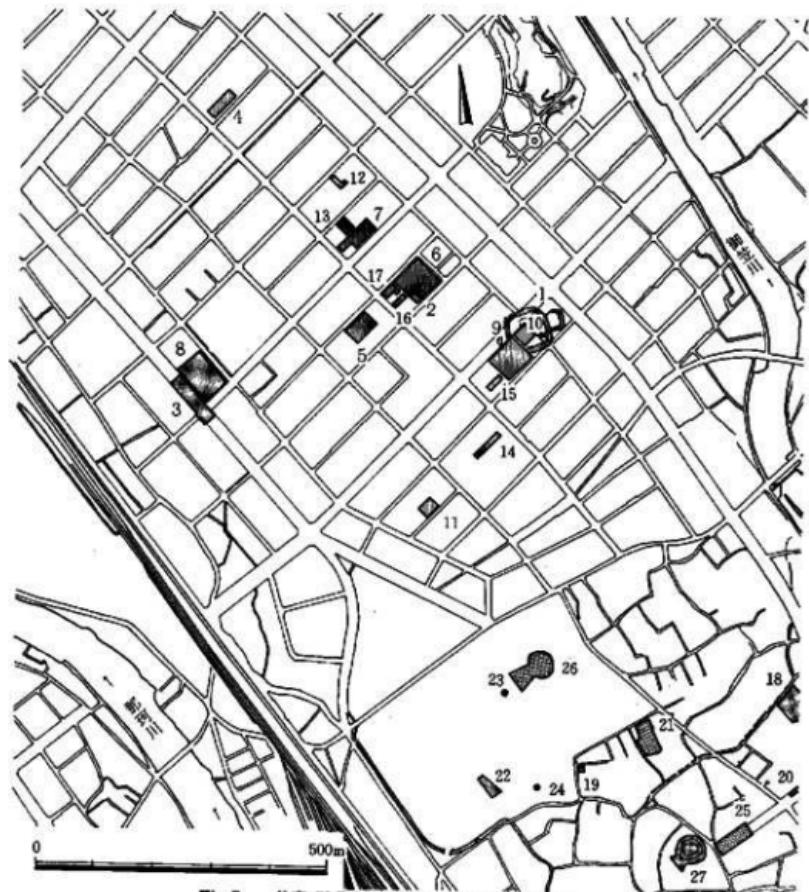


Fig. 3 比恵・那珂遺跡群位置図 (縮尺 1/10,000)

比恵遺跡群 1. 第1次調査地点 2. 第2次調査地点 3. 第3次調査地点 4. 第4次調査地点 5. 第5次調査地点 6. 第6次調査地点 7. 第7次調査地点 8. 第8次調査地点 9. 第9次調査地点 10. 第10次調査地点 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 13. 第13次調査地点 14. 第14次調査地点 15. 第15次調査地点 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点

那珂遺跡群 18. 第2次調査地点 19. 第3次調査地点 20. 第4次調査地点 21. 第8次調査地点 22. 第10次調査地点 23. 第11次調査地点 24. 第12次調査地点 25. 第13次調査地点 26. 剣塚古墳 27. 那珂八幡古墳

比恵遺跡群とその歴史的環境

地点は第6次調査地点と合致し、第16・17次調査地点の東側隣接地にあたる。なお、第2次調査の際、検出された環濠遺構は現在も当地に保存されている。

第3次調査地点 県道山田・中原・福岡線の道路工事に際して、縄文時代終末期から弥生時代前期にかけての袋状竪穴や弥生時代中期の壺棺墓群が、筑紫野古代史研究会によって調査された。この調査地点は比恵台地の北西部に位置し、第8次調査地点の西側隣接地にあたる。(文献3)

第4次調査地点 本調査地点は比恵台地の北端部に位置している。この地に日本住宅公團による公團住宅建設が計画された。1979年から1980年にかけて、堀塚遺跡調査団によって発掘調査が行われた。その結果、比恵台地北西端の台地際のラインが確認された。台地上には弥生時代前期から中期前半の袋状竪穴、中期の壺棺墓などが検出された。また、低地部では弥生時代から古墳時代にかけての水路および柵が検出され、堰などの杭列も確認されている。また、弥生時代前期後半の木製農耕具なども出土している。

第5次調査地点 本調査地点は、第16・17次調査地点の50m西側に位置している。本調査は、1981年の再開発に伴う事前調査として実施したものである。その結果、弥生時代から古墳時代の竪穴式住居址・掘立柱建物・柵列・井戸などが検出された。

第6次調査地点 本調査地点は、1952年に建設された小林町第1市営住宅が老朽化したため、再建に伴う事前調査として1982年に実施したものである。調査の結果、弥生時代中期後半から古墳時代にかけての多数の井戸や竪穴式住居址・掘立柱建物および弥生時代中期の壺棺墓群、古墳が検出された。壺棺墓のなかの1基は細形銅剣を副葬していた。

第7次調査地点 本調査地点は、比恵台地北半部の中央部に位置し、第13次調査地点の南側隣接地にあたる。本調査は1983年、小林町第2市営住宅の再建に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、弥生時代中期から古墳時代にかけての掘立柱建物・竪穴式住居址・井戸・溝状遺構および近世の建物が検出された。井戸のなかには鹿角製の戈や垂飾り状木製品や把手付き容器などが出土したものがある。また、本調査地点で検出した7世紀の大形掘立柱建物は官衙的な要素をもっており、後で述べる。(文献4)

第8次調査地点 本調査地点は比恵台地の北西部に位置し、第3次調査地点の東側隣接地にあたる。本調査は1984年、民間社宅建設に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、弥生時代前期から中期の袋状竪穴・壺棺墓群、古墳時代前期の竪穴式住居址、6世紀後半から7世紀の大規模な掘立柱建物・柵列が検出された。古墳時代後期の建物群は官衙的な要素をもっており、後で述べる。(文献4)

第9・10次調査地点 両調査地点は比恵台地の中央部に位置し、隣接し合っており、第1次調査地点と一部合致し、第15次調査地点は第9次調査地点の西側隣接地にあたる。本調査は1985

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

年、再開発に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、第9次調査地点からは弥生時代中期から古墳時代の井戸・掘立柱建物・竪穴式住居址・土塁などが検出された。本調査で検出した溝状遺構は、第1次調査で検出した環濠であり、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭のものであることが検証された。第10次調査地点では弥生時代後期前葉の井戸1基と平安時代末頃の井戸1基が検出された。

第11次調査地点 本調査地点は比恵台地中央部に位置している。本調査は1986年、工場建設に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の井戸・土塁・掘立柱建物および中世の井戸などが検出された。

以上、比恵遺跡群における各調査地点について概要を述べてきた。比恵遺跡群が所在する比恵台地は、那珂遺跡群が所在する那珂台地に連なっている。ここで、比恵・那珂遺跡群の歴史的環境についてみていくことにする。

本地域では、先十器時代ナイフ形石器文化期の遺物が那珂遺跡群第7～9次調査地点で出土しており、この時代から人の生活が営まれていたと考えられる。

弥生時代になると本地域は福岡平野部における拠点集落に成長したと考えられる。前期の段階は台地周縁部に遺構・遺物がみられ、中期段階に台地中央部に竪穴式住居址・井戸などが形成されるようになった。この頃、那珂遺跡群を中心として青銅武器の生産が行なわれたと考えられる。後期段階になると、環濠集落が形成される。

古墳時代になると、集落は台地全域に拡がる。福岡平野における最初の首長墓と考えられる那珂八幡古墳（4世紀初）と最後の首長墓；劍塚古墳（6世紀後半）の2基が本台地上に所在している。また、6世紀後半になると第7・8・13次調査地点で大規模な掘立柱建物群・柵列が造られている。これは規模・配置から官衙的な性格をもつと考えられ、「那津官家」の可能性が高いといえよう。

古代になると、本地区は那珂郡に属し、台地全域に遺構が分布している。郡衙は現在確認されていないが、那珂・比恵遺跡群内に所在していると考えられる。

文献

1. 銀山猛 1956～1959「環濠住居址小論（一～四）」「史源」67・68・74 1972「環濠住居址論攷」「九州考古学論叢」
2. 古野徹久編 1985「比恵遺跡—第1次調査・遺物編—」
3. 筑紫野古代史研究会 1967「見捨てられた春住遺跡—純文晩期終末へのアプローチー」筑紫野古代史研究会会報第2集
4. 柳沢一男 1987「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」「日本歴史」第465号

第3章 第12次調査地点

1. 調査の概要

調査区は既存の建物、埋設物等を避け、平面形をL字形に設けた。発掘調査は堆土の処理の都合上、二階段に分けて実施した。まず、南東側を調査し、堆土を北西側に置く。南東側の調査を終えると堆土を転回し、北西側の調査を実施した。

調査区全体には表土に混入して調査前の建物の基礎や廃材が散乱していた。表土を除去するとすぐに新期上部ローム層を検出面とする遺構面が現れた。調査区の北側は新期上部ローム層が削平され約30cmの段差が造られている。この低位面には溝、水田土壤が検出され、溝内の遺物から近世の水田面が埋没していることが判明した。なお、この水田の造成面は鳥柄ローム層中に達しているせいか水田面下の遺構の検出はなかった。調査区の南側は近年の建物基礎を始めとする搅乱が縦横に走り、保存状況はけっして良好ではなかった。しかし、ほぼ全面に方形プランを主とする柱穴が多数分布、検出された。柱穴には柱痕跡を残す例も多く、検討の結果3棟の掘立柱建物を確認した。また、調査区北隅で小規模な竪穴式住居址を検出した。深さ5~10cm程度が残存しており、比恵遺跡群では比較的保存状態の良好な例であった。

2. 調査の記録

1) 出土層位

現地表は5.9~6.0mを測る。近世の造成や搅乱のために保存状態は良好でない。第1層は表土層である。第2層は褐色土であり、北側の削平面に堆積している。近世の水田を造成によって埋没させた際の堆積物と考えられる。第3層は灰色砂質土である。近世の水田土壤である。上面に鉄の凹凸が認められる。第4層は水田土下の床土の累層である。3~4面の床面が確認される。鉄分、マンガンの沈着が著しい。第5層は茶褐色~暗褐色粘質土である。調査区の南側でわずかに観察された。ローム層上部の漸移的堆積物である。第6層は新期上部ローム層である。全体に削平が認められ、調査区内で30~40cm程が残存堆積している。第7層は鳥柄ローム層である。北側の水田造成による削平面下に認められた。灰褐色を呈しやや粘質がある。

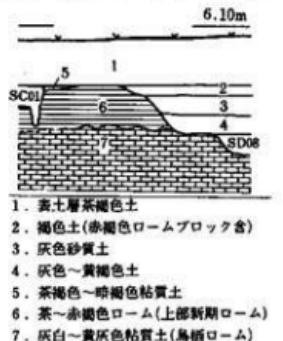


Fig.4 土層堆積模式図(縮尺縦1/20)

第3章 第12次調査地点

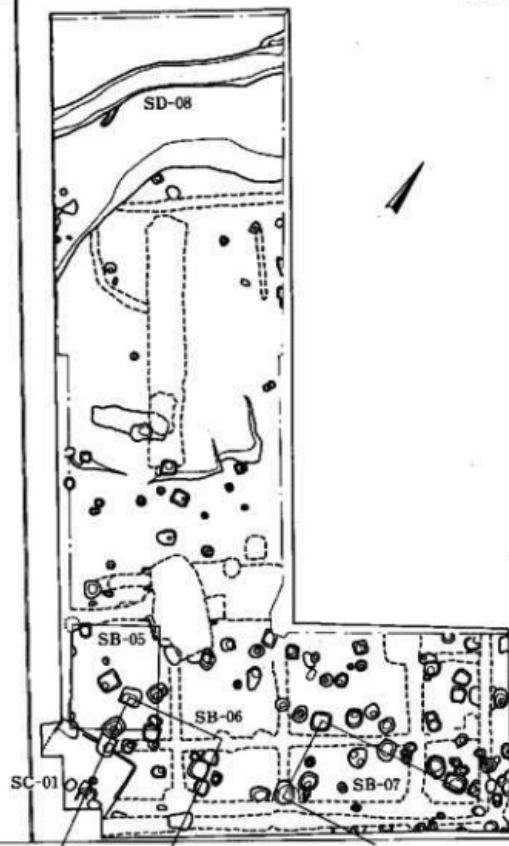


Fig.5 第12次調査地点遺構分布図 (縮尺 1/200)

調査の記録

2) 検出遺構

SC-01 本遺構は調査区北隅で検出した竪穴式住居址である。平面形は方形であり、北辺は3.1mを測り、南北は2.2m以上の規模である。住居址の北壁以外は東西壁を部分的に検出したのみである。住居址の軸はほぼ南北に一致しており、N-87°-Eを測る。壁はほぼ直線であり、80°前後で立上がる。壁高は5cm前後が残っている。壁に沿って壁溝があり、幅5~10cm、深さ10~13cmを測る。床面はほぼ平坦であり、中央部に不明確ながら厚さ1~3cm程度の張り床が認められた。実測図では張り床上面の状態は表現していない。床面中央には径80cm、床面よりの深さ18cmを測る焼土と炭化物を含む落ち込みがある。また、床面には2ヶ所に柱穴が検出されたが、このうち中央よりの柱穴が主柱穴と推定され、南北に棟を持つ2本柱構造と想定される。

住居址の床面および覆土中より少量の遺物が出土した。出土遺物はほとんどが土器片であり、小破片が多く復元実測が可能なものは少ない。このうち高杯1、壺8を図化した。1は高杯である。杯部のみが約1/6残存している。口径34cmを測り、杯部の深さ5cmを測る。杯部の2/3の位置で大きく外反し、やや厚い口唇端部に達する。調整は外面がハケ、内面がヘラミガキである。焼成は良好で黄褐色を呈する。2は壺の口唇部である。口径はおよそ22cmを測る。小破片である。3は壺の胴部下半であり、約1/4が残存している。最大径26cmを測り、長胴の下半に刻み目突帯がつく。底部は丸底と推定される。調整は外面が削り後ハケ、内面が荒いナデである。4は胴部中央付近の破片である。約1/6が残存している。最大径約30cmであり、中程上部に刻み目突帯が付く。内外面共にハケ調整である。3・4ともに色調は黄褐色を呈し、黒斑を有する。5は壺口縁の小破片である。以上の遺物は弥生時代後期末に比定される。

SC-02~04 調査区中央付近に黒褐色土の落ち込みがあり、一部に隅丸方形のプランが認められたことから3基の竪穴式住居址と判断して調査を進めた。しかし、わずか数cmの残存であり、床面、立ち上がり等は不明確で住居址であるかは断定できなかった。

覆土中から少量の土器片を出土した。6は壺の口縁部である。内外面に

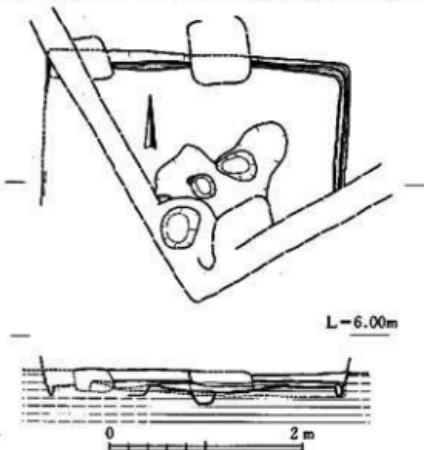


Fig. 6 第1号竪穴式住居址実測図 (縮尺1/60)

第3章 第12次調査地点

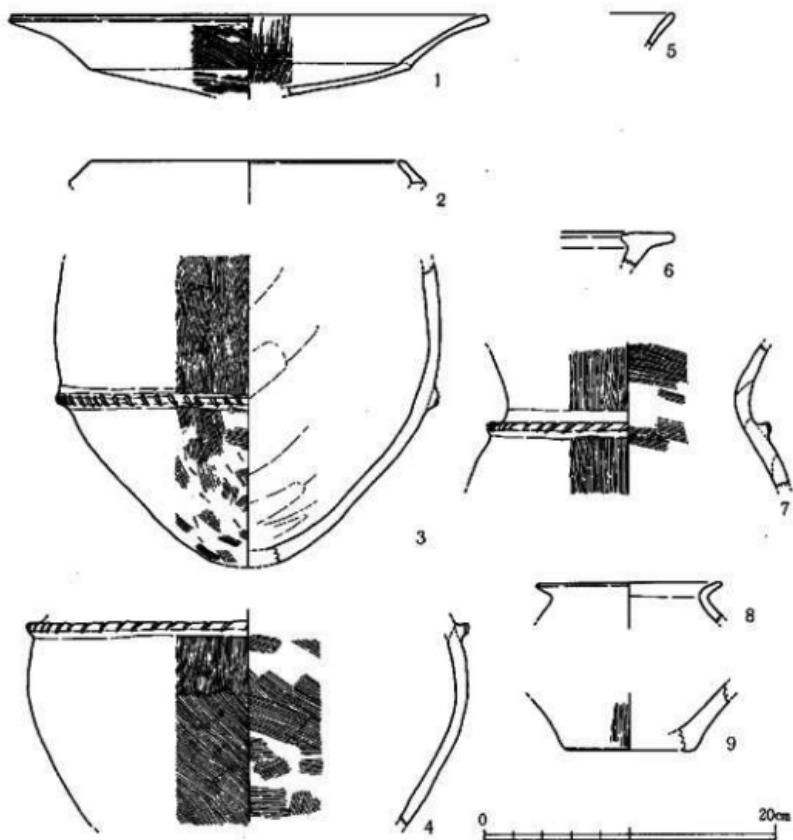
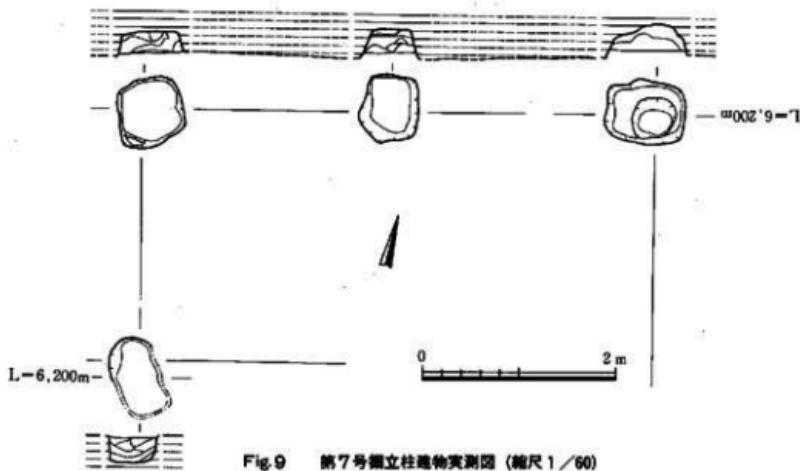
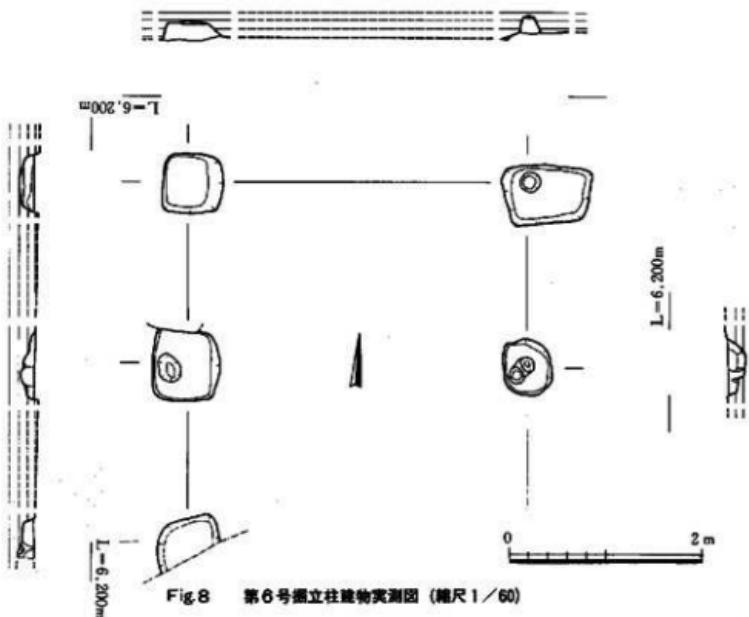


Fig. 7 第1号竪穴式住居址出土遺物 (縮尺1/4)

赤色顔料が残る。7は壺頸部である。1/7程が残存し、頸部推定径が約17cmを測る。頸部直下に刻み目突帯が付く。調整は内外面ともにハケである。8は壺口縁部であり約1/10が残る。推定口径13cmである。9は壺底部である。底径1/6が残り、底径9cmと推定される。外面にはハケ調整が残る。以上のうち、6・8・9は弥生時代中期後半に位置づけられる。7は弥生時代後期末に比定されよう。

SB-05 調査区の南東部にある。1×1間の南北棟であり、N-26°30'W、桁行約3.4m、梁行約3.2mを測る。各柱穴に同様な粗砂が堆積している。SC-01を切る。柱穴内から少量の

調査の記録



第3章 第12次調査地点

土器片が出土した。15は壺である。風化が進んでおり、1/8程度の小破片である。19は小形の壺底部である。全体の1/3程度が残在する。外面にミガキと赤色顔料が認められる。23は蓋である。つまみ部が1/4程度残っている。調整は外面ハケ、内面指押さえである。26は壺底部である。1/5程度の破片である。19・23・26は弥生時代中期、15は古式土師器と推定される。本建物は古墳時代初頭以降に位置づけられる。

SB-06 調査区の南東隅にあり、SC-01を切る。SB-05とも重複するが、前後関係は不明で

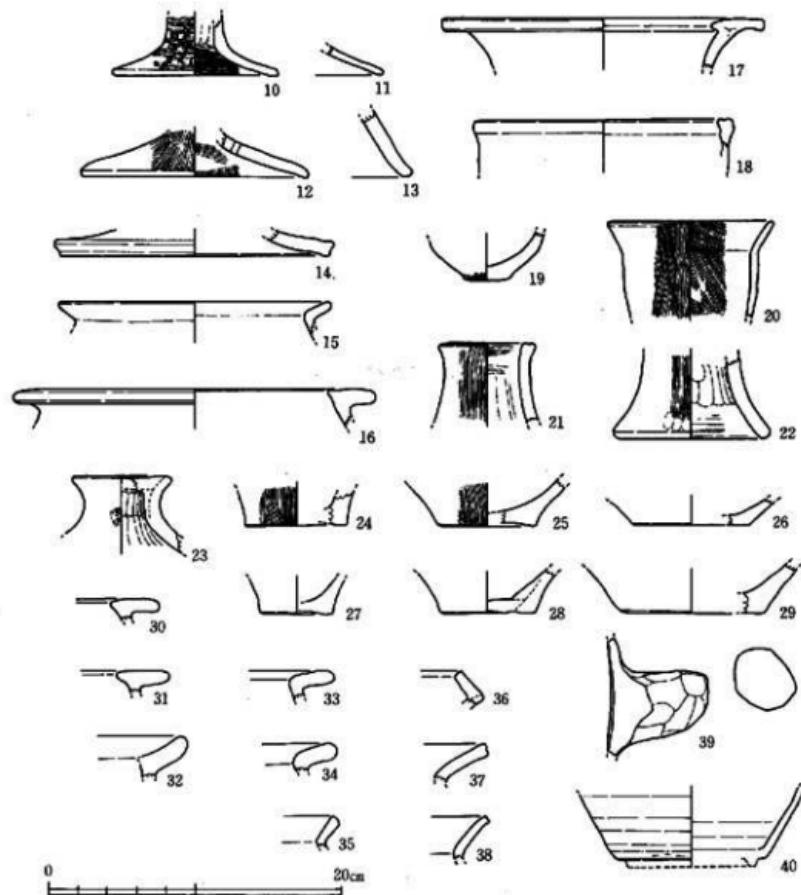


Fig.10 その他の出土遺物 (縮尺1/4)

調査の記録

ある。 2×1 間以上の南北棟であり、N-10°30'-W、桁行3.8m以上で柱間はおよそ1.9m、梁間は約3.5mを測る。柱穴掘り方は一辺50~70cmの略方形を呈する。柱穴内からは少量の土器片を出土した。38は壺口縁である。内外面ハケ調整である。弥生時代後期末に比定される。

SB-07 調査区の南東端にある。 1×2 間以上の東西棟である。N-80°-E、桁行5.3m以上で柱間はおよそ2.7m、梁間は2.6~2.7mを測る。柱穴掘り方は一辺60~70cmの略方形を呈する。柱穴内からは少量の土器片が出土した。33・37は壺口縁である。37は内外面ハケ調整である。33は弥生時代中期、37は弥生時代後期末に比定される。

SD-08 調査区の北側に検出された。水田造成に伴うと推定される段落ちの下場線に沿って南西から北東へ流走する幅約1.0m、深さ0.3mを測る溝である。埋土は水成堆積物であり、流水の痕跡が認められる。水田の灌漑用水路と考えられる。埋土内から少量の遺物が出土した。土器片、陶磁器片、黒曜石片などがある。39は壺か瓶の把手の破片である。荒い指押さえとナデで成形してある。溝内から出土した磁器片に国産の染付けの小破片が見られることから、この溝は近世以降に位置づけられる。

3) その他の遺構と遺物

調査区内からはこれらの他に100を越える柱穴を検出した。その中には方形の掘り方を呈し柱痕跡を残すものも多い。調査範囲が狭く、また搅乱により、構成する建物を検出することができなかった。柱穴内からは土器片の小破片や石器が出土した。特に時期別、器種別にまとまつた出土状態は示さず、調査区内から散漫に出土した。そのうちおもな遺物を紹介しておきたい。

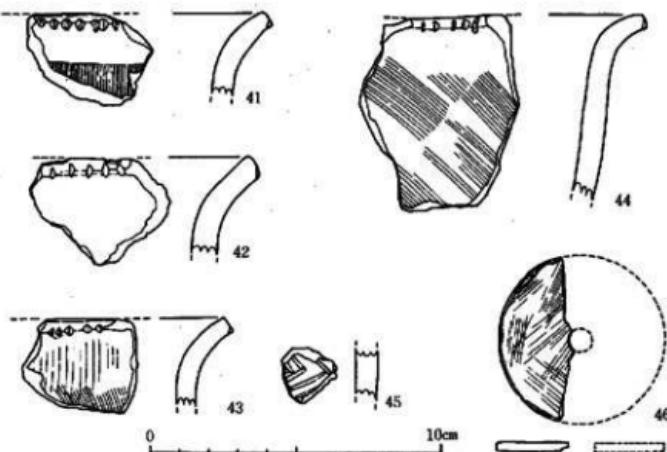


Fig.11 前期(板付I式)遺物と筋輪車 (縮尺1/2)

第3章 第12次調査地点

土器片の器種は10・14が高環、16・18・20・24・27・28・30・32・34・35・41・44が壺、17・29・36・45が壺、21・22が器台、40が环身である。時期は弥生時代前期前葉(41～45)、同中期中葉～後葉(14・16・17・18・24・25・27～32・34)、同後期前葉～中葉(13・21・22・35・36)、同後期末葉～古墳時代初頭(10～12・20)、古代(40)の五時期に大別できる。これらのうち弥生時代前期前葉の遺物はまれな遺物であるので以下に詳述する。41～43は壺口縁の小破片である。いずれも同様の特徴を有し、胴部から直線状に立ち上がる口縁部が如意状に外反する。口唇部は横ナデを施し、端面を平坦に仕上げている。口唇端下部に浅い刻み目を施している。器面調整は外面が縱～斜めハケ、内面が横ハケ後ナデである。胎土には石英を主とする砂粒を多く含んでいる。色調は41・44は灰褐色、42・43が黄灰色を呈する。45は一辺2cmに満たない小破片であるが、壺の胴部破片である。ヘラ描き沈線による鋸歯文が施される。調整は外面ヘラミガキ、内面ナデである。これらは板付Ⅱa式に比定される。石器としては46の紡錘車がある。半裁品であり、推定径5.8cm、最大厚0.35cmを測る。石材は黒色の粘板岩製である。

3. 小結

以上、第12次調査の記録を記してきたが、その成果を簡単にまとめてみたい。調査は相当の搅乱を予測して開始したのであったが、現地表下30cmの遺構検出面は比較的保存状態が良好であることを確認した。検出した遺構は竪穴式住居址1基、掘立柱建物3棟、溝1条、柱穴多数、近世木田遺構などであった。このうち住居址と掘立柱建物は切り合い関係がある。築造時期は竪穴式住居址が弥生時代後期末葉であり、掘立柱建物は古墳時代初頭以降に位置づけられるものである。この他に柱穴から弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の遺物を出土するものがあり、本地区の遺構はこの時期に集中する感がある。この時期は比恵遺跡群の各所に多数の遺構が構築されている。また、柱穴内からは弥生時代中期の遺物が多数出土した。本調査区内ではこの時期に明確に比定できる遺構は検出できなかったものの、周辺にその存在が予測される。さらに、この他の時期として特に注意されるのは弥生時代前期の遺物である。これも柱穴内に混入して出土したために本来の所属遺構は不明であるが、保存状態は悪くなく、周辺に当該期の遺構が予測されるのである。比恵遺跡群において、同時期の遺物、遺構が確認されたのは第4次調査地点、第8次調査地点であり、両地点とは浅い谷部を隔てて別の丘陵に立地している。初期の農耕集落のあり方を検討するうえで今後注意が必要な地点であると言えよう。

第4章 第14次調査地点

1. 調査の概要

第14次調査地点は、浅い谷が南北に数条はいる比恵台地の微高地に位置する。第1次調査によって確認された環濠の存在する微高地と谷を挟んで一つ西側の微高地にあり、その最も高い場所だったと思われる。第14次調査地点と同じ微高地に乗るものとして、先年調査された第11次調査地点が考えられる。

第11次調査地点では、遺構面は東から西へ標高約6.2mから5.1mであり、西半部には大きく三層に分割可能な包含層が厚さ約65cmにわたり分布している。この西へのゆるい落ちは第11次調査地点、第14次調査地点の乗る微高地の西端を示していると思われる。このように仮定すると第14次調査地点の乗る微高地の東西幅は約220mと考えられる。第11次調査地点は土層から、1938年頃おこなわれた区画整理の削平は免れたものと思われる。つまり旧地形での標高は第11次調査地点の遺構面に近いであろう。第11次調査地点でのおもな検出遺構は土塙16基、井戸址6基、掘立柱建物3棟、溝6条である。堅穴式住居址は検出されていない。いずれの遺構も標高5.6m以上の東半部に偏る傾向にある。井戸の時期は、中世の1基を除くと弥生時代後期から古墳時代初頭にわたり、第14次調査地点の井戸の時期にはほぼ一致する。

次に第14次調査地点の旧状について述べる。第14次調査地点は第11次調査地点より本来、標高は高かったと思われる。先述の区画整理により約1m以上の削平がおこなわれた可能性が強い。削平時点での標高は本調査時の遺構検出面となった約6.4mに一致する。削平後、1940年代は大規模な工場の敷地となり、約0.8mにわたって多量の造成土、砂利、ガラ等の堆積があった。一方、同時期には今回の調査区北東端に溜池が堀られ、用水として利用されていたがその後、松屋工業の敷地となつた際にこの溜池は埋没、埋め立てられたものである。表土剥ぎのさい、木杭と板で囲った溜池跡が検出された。この溜池部分での遺構の残存は期待できず、排土置き場として利用することにした。今回の調査でのおもな遺構は、井戸址6基、土塙2基、堅穴式住居址1基である。時期は井戸が弥生時代後期、土塙が弥生時代中期と古墳時代後期、堅穴式住居址が弥生時代後期にあてられる。遺構は散漫

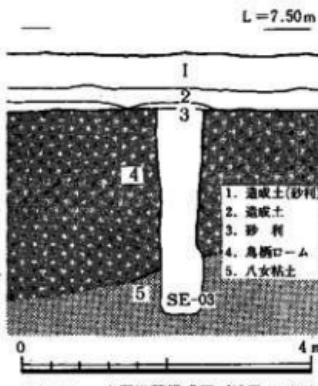
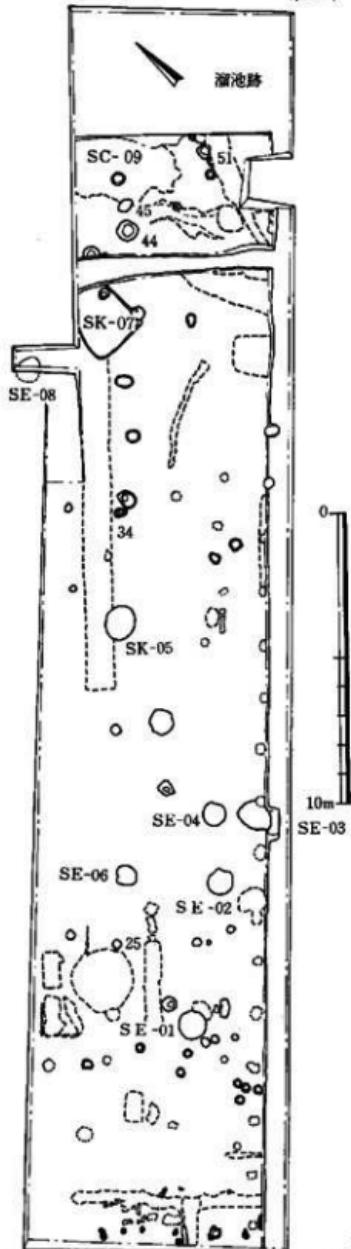


Fig.12 土層堆積模式図 (縮尺1/80)

第4章 第14次調査地点



に分布している。以下、井戸を中心におのおのについて報告する。

2. 調査の記録

1) 井戸址

今回の調査で井戸は6基検出された。当初7基と思われたが、1基は深さ、湧水の関係などから土塚と判断された(SK-05)。

6基の井戸は調査区内に散在し、明確に群として位置づけられるものはなかった。SE-02~04が近接している程度である。

検出した井戸はすべて素掘りである。検出面からの深さはSE-03の2.8mが最も深く、SE-01の1.83mが最も浅い。6基は、まず、規模の小さい井戸が弥生時代後期前秦に出現し、しだいに大型化し、ふたたび時期が下ると平面形は大型のまま深さが浅くなっていく傾向がうかがえる。

次に湧水点との関係をみていく。第1湧水点は、鳥柄ロームと八女粘土の境界にあたる。境界の標高は場所によりかなりの相違があり、約3.9~5.0mのところにある。全体の傾向として、境界は南に向かって傾斜していると思われる。井戸はすべてこの第1湧水点に達している。一方、第1湧水点以下には深いものでも約0.8mしか掘っておらず、湧水が始まると掘削を中止したようである。第6次調査地点での井戸が第2湧水点(八女粘土と青灰色シルトの境界、標高2.5m前後)まで達するものがかなりの数存在するのに比べると、本調査地点の井戸は粗いつくりであると思われる。一方、第9・10次調査地点では、

調査の記録

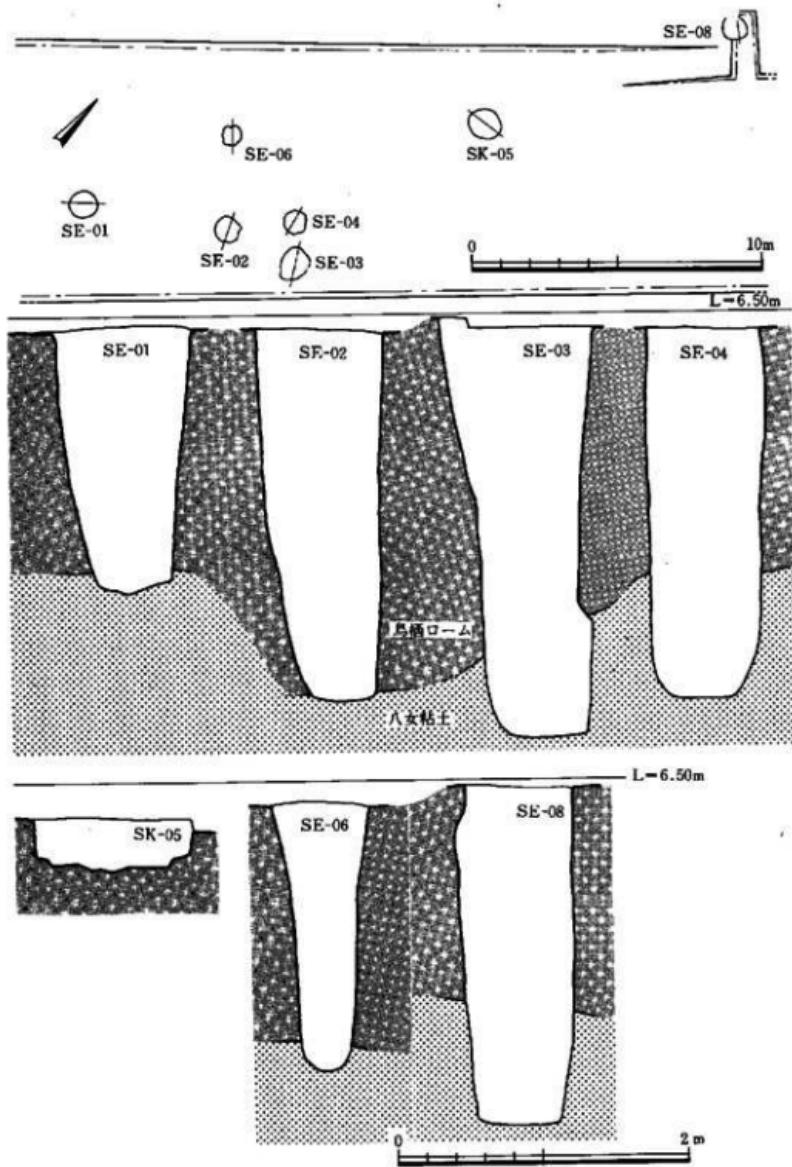


Fig.14 井戸付配置図及び井戸付断面図 (縮尺 1/200・1/40)

第4章 第14次調査地点

第1湧水点に達したものは壁面の崩落が目立つが、本調査地点ではSE-03に少しの抉れが存在するのみである。これは第9・10次調査地点に比べ、湧水が少なかったか、崩落前に放棄、埋め戻した可能性が考えられる。

SE-01

SE-01は調査区西部に位置する。6基検出された井戸の中でも最も西に位置し、SE-02より約5m南西側に位置する。SE-02～04が近接しているのに対し、単独で存在している。本井戸は西側を擾乱により切られている。

本井戸は素掘りである。検出面の標高は約6.4mを測る。規模は上部で径0.95mの略円形であり、深さは1.84mを測る。断面形は検出面上より約1.03mで東側に張り出しが見られる。他はほぼ逆円錐台形をなしている。壁面の崩落は見当たらない。底面は約0.72×0.55mの不整形をなしており、中央部には南北に一段低い深さ約0.06mの溝状の掘り方が走っている。覆土は、検出面でロームを含んだ暗茶褐色粘土であり、検出面下約0.4mから約0.25mにわたりロームブロックや青茶灰色シルトを含む暗茶褐色粘土層が堆積している。以下、覆土はローム粒を多

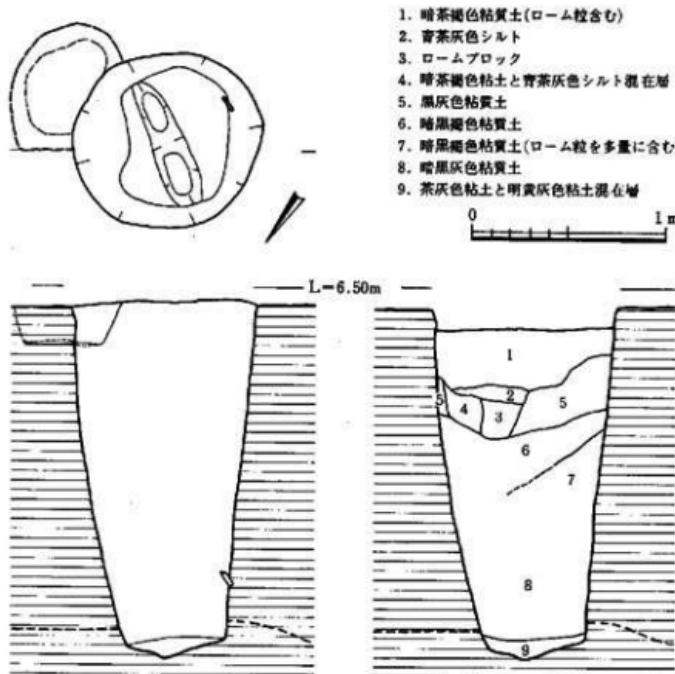


Fig.15 第1号井戸実測図 (縮尺 1/30)

調査の記録

く含む黒灰色粘土となり、底面より約0.1mで井戸使用時の堆積と思われる茶灰色と明黄灰色の粘土を確認した。底面は鳥栖ロームと八女粘土の境界まで達している。境界の標高は約4.75mである。発掘時も底面近くになり、湧水が始まったことからも溜め水用ではなく湧水利用の井戸だと考えられる。

遺物は、覆土中より散漫に出土したのみである。土器はコンテナケースに1/3箱程度で小破片が多かった。石器は石剣片が二個出土した。図示した木片は自然木である。

SE-01出土遺物 (Fig. 16・17)

遺物は、破片でのみ出土した。1・2は複合口縁壺片である。1・2とも口縁上半部は直線的に内傾している。1は頸部付根から口縁に向かいゆるやかに開いている。2は頸部付根から直線的に立ちあがり口縁近くで急に開いている。1・2とも外面は縦方向のハケ目である。内面は口縁下半部まで横方向のハケ目で、口縁上半部はナデを施す。1の胎土は砂粒を少量含み、灰褐色を呈する。2の胎土は砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。口径は1が21.8cm、2が18.2cmを測る。3は壺形土器片である。頸部は直線的に立ちあがり、そのまま口縁となる。横方向の

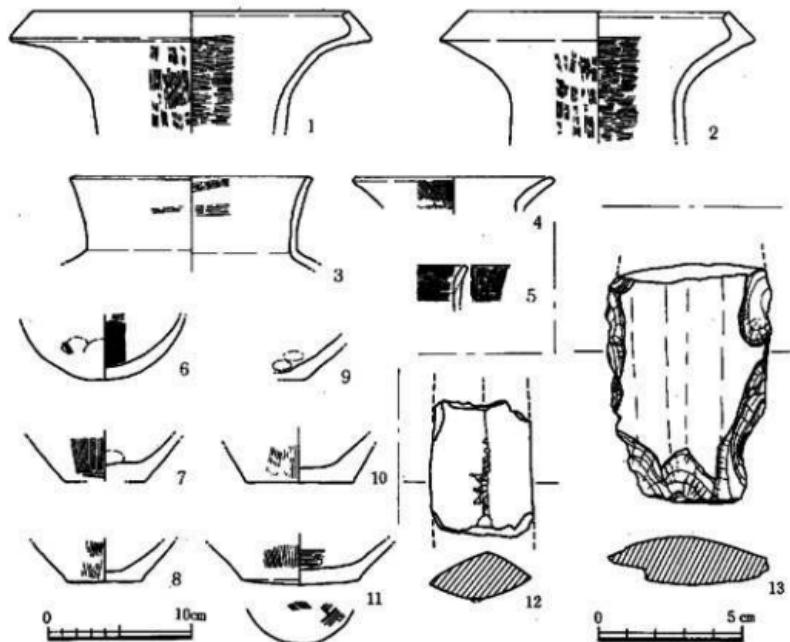


Fig.16 第1号井戸出土遺物(1) (縮尺1/4-1/2)

第4章 第14次調査地点

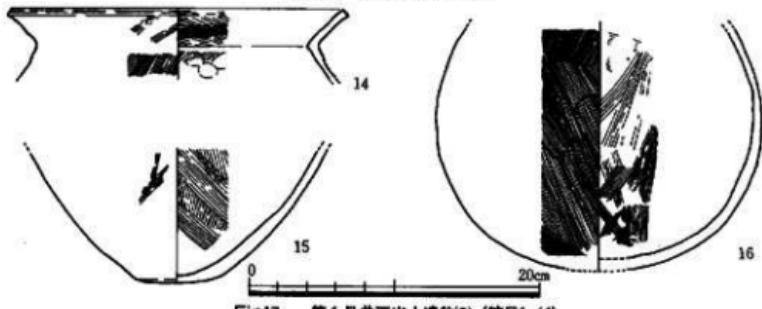


Fig. 17 第1号井戸出土遺物2(縮尺1/4)

ハケ目を施した後ナデを行っている。外面は特に丁寧に行っておりハケ目はほとんど残らない。胎土は石英粒を含み灰黄褐色を呈する。口径は16.1cmを測る。4は壺形土器片である。口縁部が短く外反する。内面は横方向のナデを行う。外面は指押さえ後ナデを行い、さらに縦方向のハケ目を施している。外面には煤が付着している。口径は13.0cmを測る。5は壺形土器片である。胴部から口縁へゆるやかにつながり、内面屈曲部に稜が形成されない。胴部の張りはないと思われる。内面は横方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目が施されている。胎土はやや粗く、灰黄色を呈する。外面には煤が付着している。6は壺形土器片である。ほぼ丸底である。外面底部は使用による磨滅が認められる。調整は内面が横方向のハケ目、外面は指押さえと斜め方向のハケ目である。7~11は壺形土器片である。7・10は平底である。7・9ともに井戸の上層から出土している。石剣とともに流入したものであろう。7は内面ナデ調整、外面縦方向のハケ目である。8・11は7・10に比べてやや丸味を帯びた底を持つ。共に井戸上層覆土中より出土した。調整は8・11ともに外面に縦方向のハケ目を施している。内面は8がかなり丁寧なナデであり、11は横方向のハケ目後、軽いナデを行っている。8・11とも胎土には少量の砂粒を含み、8が乳灰色、11が暗黃灰色を呈する。8・11ともに外面に黒斑を持つ。9は平底である。小破片のため詳細は不明である。内外ともに不整方向のナデを行っている。胎土は砂粒を多く含み黒褐色を呈する。覆土上層の出土である。14・15は壺形土器片である。14は口縁が直線的に外傾する。外面は縦方向ハケ目後、横方向のナデである。内面は斜めハケ目後、ナデを行う。砂粒が多く混じった胎土で灰褐色を呈する。外面には煤の付着が認められる。復元口径は約27.7cmである。15は底部である。丸味を帯びた平底を呈する。内外ともハケ目を行うが、外面は丁寧にナデ消しており、ハケ目の痕跡しか残らない。胎土は砂粒を多く含み、外面灰褐色、内面暗褐色を呈する。16は壺形土器の底部から胴部であろう。底部は丸底である。胴部はほぼ球形で下半部が張っている。外面は斜め方向のハケ目、内面は横方向のハケ目後丁寧にナデ消し、さらに斜めハケ目を施している。内面のハケ目には二種類のハケが使用されている。

調査の記録

胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で赤橙色を呈する。底部付近に黒斑を有する。

石器は石剣片が二個出土している。12は刃部と考えられる。現存長は4.6cm、身幅3.5cm、厚さ1.6cmである。柄は明瞭に立っており、刃は鋭い。13は基部付近と考えられる。現存長は8.2cm、厚さ1.7cmである。柄は明瞭ではない。刃の部分には剥離がある。この剥離は人為的に行われ、再使用した可能性を示唆している。12・13とも石材は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスである。石剣片は本井戸に伴うものではなく流入したものと思われる。

以上の遺物から本井戸の時期は弥生時代後期中葉があたれよう。

SE-02

SE-02は調査区中央部東寄りに位置する。SE-03・04とは近接している。

本井戸は素掘りである。検出面の標高は約6.40mである。規模は検出面で0.90×0.83mの椭円形であり、深さは2.56mを測る。

断面形は底部に向かい、すばまる逆円錐台形をなしている。壁面の崩落は見あたらない。底面は径0.46mの略円形を呈しており、平坦である。

覆土は検出面で少量のロームブロックを含んだ明黄褐色微粒砂を中心である。また、検出面下約1.1mまでは、黒褐色土を中心とした土層が明瞭に区別される状態で、堆積している。これらは一括堆積と考えられ、人為的な埋土であろう。以下、覆土は粘質の強い暗黒茶褐色土、黒色土が主体

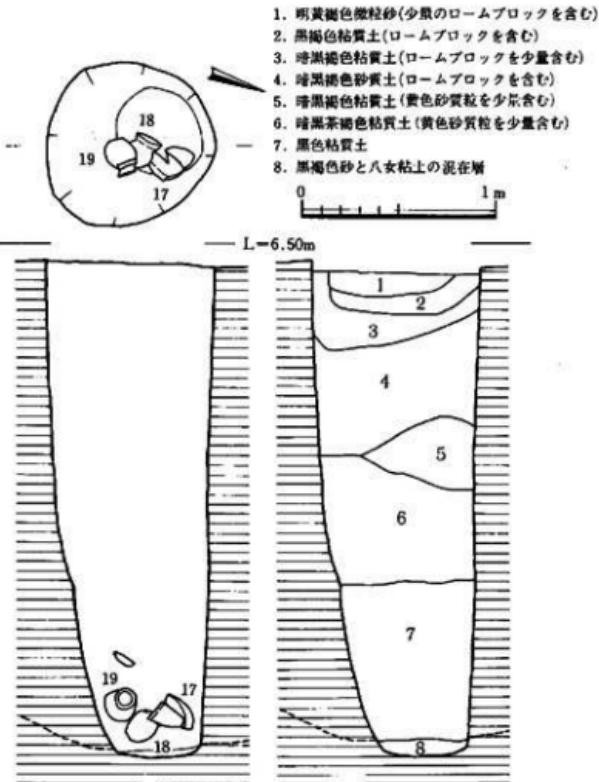


Fig.18 第2号井戸実測図 (縮尺1/30)

第4章 第14次調査地点

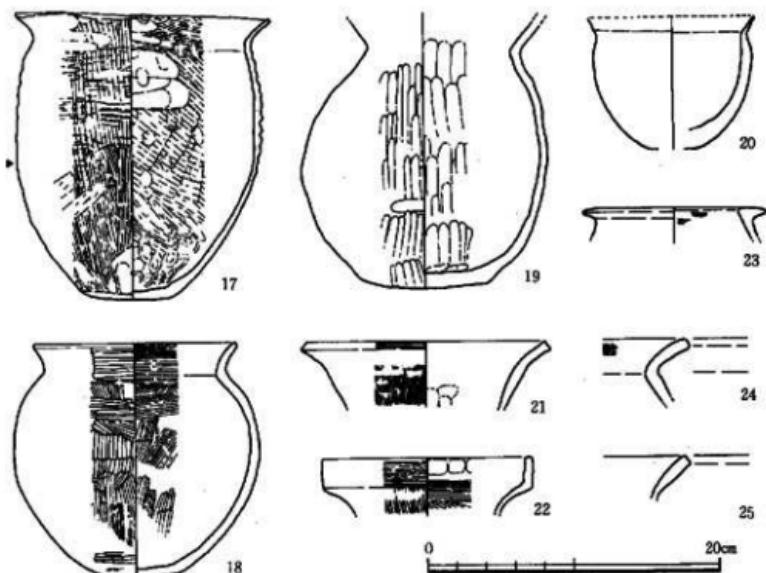


Fig.19 第2号井戸出土遺物 (縮尺1/4)

となる。底面から約0.1mは、黒褐色砂と八女粘土の混在層が堆積している。この混在層は一括投棄されたと思われる土器群直下にあたることからも、井戸埋没前に堆積していたものであろう。

底面は鳥栖ローム層と八女粘土層の境界まで達している。境界の標高は約3.80mであり、本井戸の底面にはほぼ等しい。これは掘削時に、湧水が始まったところで掘り下げを中止したことを行うかがわさせる。

遺物は、覆土中から散漫に出土した他に、図示するように、底面より10cm上で、一括投棄されたような状態を示す三個体分の土器が出土した。また、木製品が下層より出土している。

SE-02出土遺物 (Fig. 19)

遺物は、底面直上の三個体分の土器はほぼ完形に復元できた (17・18・19)。17は、壺である。口縁は「く」の字状に開き、胴部は張らずに底部へとつながる。底部は丸味を帯びた平底であり、不安定で直座しない。口径は17.2cm、器高は最も高いところで19.8cmを測る。外面は口縁部が粗い縦方向のハケ目調整で一部ハケ目後横ナデを施している。肩部から胴部上半は横方向の平行タタキを行った後ナデや縦方向のハケ目がなされている。タタキ痕が残っているため器

調査の記録

壁の凹凸は激しい。胴部下半は下から上へ縦方向のハケ目が行われている。胴部のハケ目はハケ目の切合から下半部が後に行われたと思われる。また、ハケは胴部上半部と胴部下半部では幅の違ったものが使用されている。胴部の最下部から底部はナデ調整が行われている。内面は口縁部で幅の狭い横方向のハケ目、胴部は幅が広く粗い斜め方向のハケ目を施している。一部はその後横方向の強いナデを肩部で、指ナデアゲや指押さえが底部付近で行われている。内面の斜めハケ目は外面胴部上半で行われている縦方向のハケ目に使用されたハケと同一と考えられる。外面胴部中央付近に稜の圧痕が残る(PL. 8)。胎土は粗く石英粒子を多量に含む。白色砂粒も含んでいる。焼成は良好であり赤褐色を呈する。18は壺である。口縁くびれ部で明瞭な稜を形成せず、わずかに外湾気味に開く。胴部はほぼ中位で最大径を測り、ゆるやかに丸味を帯びた平底へと連なる球形を呈する。口径は13.8cm、器高は14.1cmである。外面は不整方向のハケ目調整後、口縁部は横方向のヘラミガキ、胴部以下は縦方向を主体とするヘラミガキを行っている。内面は横方向と斜め方向のハケ目後、胴部上部から約3cm以下でヘラミガキとナデが施されている。胎土は石英粒子を多量に含み、黄褐色を呈する。焼成は良好である。19は壺である。全体に歪みが激しく、口縁端は欠損している。口縁はくびれ部から直線的に開いていく。胴部は部位により張り方が違っているが、最大径は平均すると中位に存在する。底部は広く、丸味を帯びた平底である。口径は約13cm、器高は約19cm以上と推定される。調整は内外面とも粗いケズリが下部から上部へ施されている。胎土は砂粒を多量に含み、灰褐色を呈する。胴部中央付近に黒斑を有する。20は小形の鉢形土器片である。頸部はわずかにくびれており、口縁は立ち気味に直線的に開く。胴部は張りがなく、最大径は頸部くびれの直下である。底部は平底と思われる。口径が11.5cm以上、器高は9.0cm以上である。調整は器壁の風化が激しく観察不能である。胎土は粗く、淡い橙灰色を呈する。21・22は壺形土器の口縁片である。21は頸部からゆるやかに外湾気味に立上がる。口径は16.3cmを測る。調整は外面が縦方向のハケ目と横ナデ、内面が指押さえと横ナデである。胎土は密でくすんだ橙色を呈する。22は頸部から急に外反しつつ立上がり、口縁上端部は直立している。口縁端は水平であり、調整の最後に押え気味にナデしている。調整は外面口縁上部が横方向のハケ目、以下は縦方向のハケ目である。内面は口縁上部が指押さえと横ナデ、口縁接合部以下は横方向のハケ目である。胎土は砂粒を含み白灰褐色を呈する。23は壺形土器の口縁部片である。口縁は逆L字状を呈する。内外とも丁寧なナデを行っている。外面胴部は黒色の色素を塗布した可能性がある。胎土は精良で、暗灰橙色を示す。

木器は残存長18cm、台部10cmを測る鍐形をした袋状鉄斧柄であるが、保存が悪く同化しない。

以上により本井戸は、弥生時代後期末葉と考えられる。

SE-03

SE-03は調査区中央部東寄りに位置する。SE-04の南東約0.5mに位置する。

本井戸は素掘りである。検出面の標高は約6.40mを測る。規模は検出面で1.20×0.90mの不整形である。深さは2.83mで、底面の標高は約3.55mを測る。断面形は南東部で、検出面下約1.20mまで狭まりながら落ちている。以下は垂直に落ち、底面へとつながる。北西部は狭まりながら検出面下約1.90mまで落ち、一度抉れて底面に垂直に落ちている。抉れの幅は約0.1mで、

最大部分
鳥栖ローム
と八女粘土
の境界にあ
たり、検出
面下2.0m、
標高4.20m
付近であ
る。底面は
北に寄って
おり、0.6
×0.55mの
不整形を呈
する。
覆土は、
検出面では
黒褐色粘質
土である。
検出面下約
1.0mまで
は、上層か
ら暗茶褐色
土、明茶褐
色土、黄茶
褐色土と堆
積し、いず

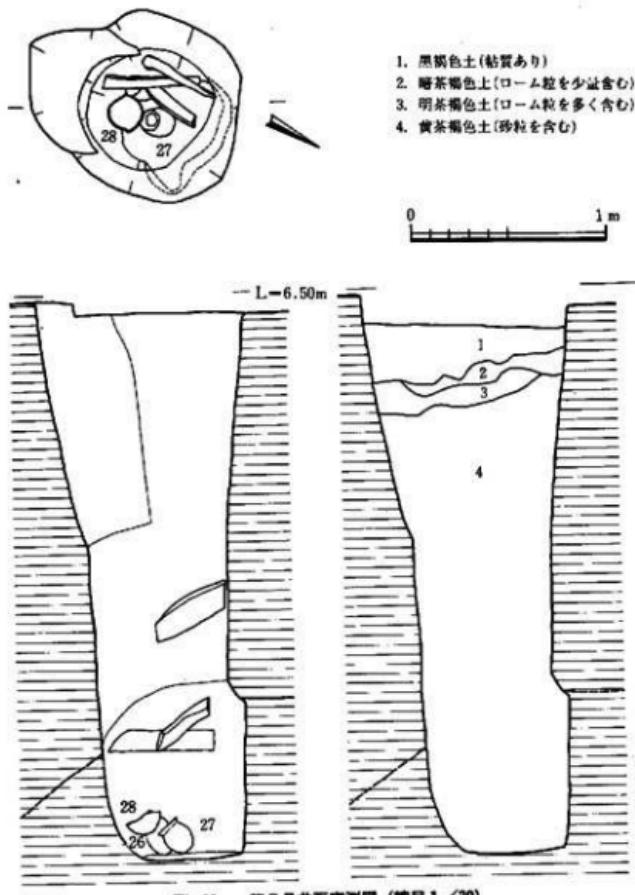


Fig.20 第3号井戸実測図（縮尺1/30）

調査の記録

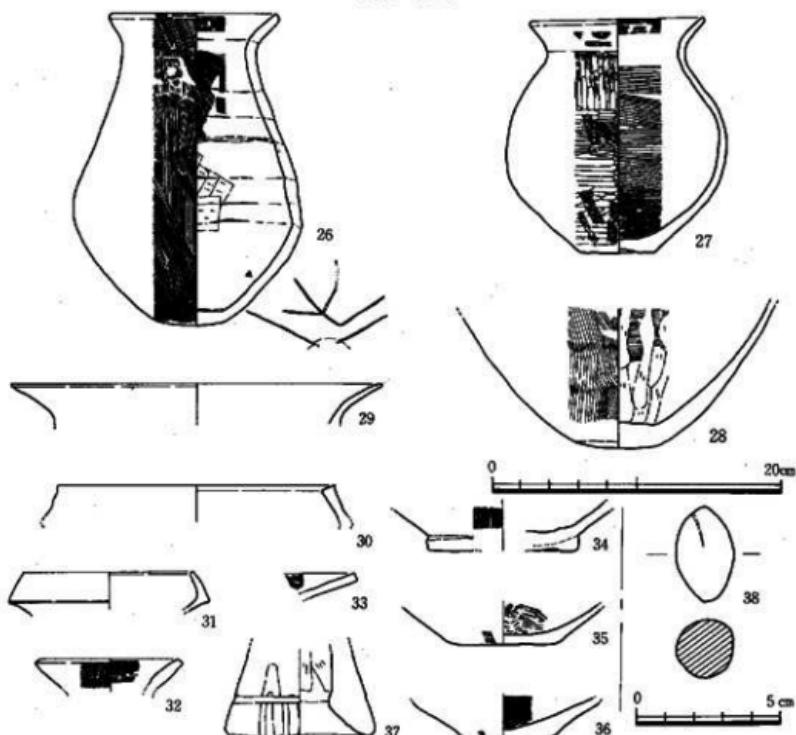


Fig.21 第3号井戸出土遺物 (縮尺1/4-1/2)

れも黄褐色の砂質を含む。以下は黒褐色粘質土が中心となっている。

遺物は覆土中から散漫に出土したほか、底面直上南寄りで、完形に近い土器2点と底部片1点が一括投棄された状態で出土した。完形に近い2点は、底面に正置した状態で出土した。また、中層から下層にかけては長さ約0.5m弱の自然木が検出された。

SE-03出土遺物 (Fig. 21)

底面直上で出土した26・27は完形に近い。28は同一個体の破片が本井戸に見当たらず、投棄段階から底部のみであったと思われる。同様の例はSE-04でもみられる。26は張りの小さい胴部から頸部が内傾し、さらに口縁が外反する。最大径は胴部下部にある。底部は丸味を帯びた平底で、直座しない。口径は11.1cm、器高は21.5cmである。調整は外面が縦方向と斜め方向のハケ目で、頸部に弱いナデが存在する。内面胴部上半から口縁にかけて横方向、斜め方向の

第4章 第14次調査地点

ハケ目とナデを施している。胴部下半は幅約2.5cmのヘラ状工具によりナデている。内面は特に接合面が明瞭に残る。内面底部から最大径の部分にヘラ工具による線刻文がある（図には▼で示す）。胎土は精良である。焼成も良好で、灰褐色から赤灰色を呈する。口縁から胴部上半と底部付近に黒斑を有する。27は胴部が張り、球形に近い壺である。頸部の内面屈曲部には明瞭な稜は認められず、外湾しながら胴部から口縁部につながる。底部は弱い上げ底を呈する。口径は11.8cm、器高は14.3cmを測る。調整は外面が全面にハケ目を行なった後、口縁部は横ナデ、胴部はヘラミガキを施している。内面は横方向のハケ目が主体となっている。頸部のみはナデである。胎土は石英粒を多く含み、赤褐色を呈する。焼成は良好である。28は丸味を帯びた平底の壺形土器片である。調整は外面が縱方向の粗いハケ目、内面は横方向のハケ目後、底部からナデ上げている。胎土は砂粒を含んでおり、明黄橙色を呈する。底部を中心に広い範囲に黒斑を有する。29は高壺の口縁片と思われる。推定口径は25.6cm。調整はナデ、胎土には砂粒を含み、灰褐色を呈する。30・31は複合口縁壺の口縁片である。30が直線的に内傾するのに對し、31は内湾ぎみに内傾している。口縁端は少しつまみ上げ、31が丸くおさめている。推定口径は30が19.0cm、31が11.5cmである。調整はともにナデである。胎土は30が石英粒子を含み灰褐色、31が砂粒を含み黄褐色を呈する。32・33は壺形土器の口縁片である。32が立ちぎみ、33が開きぎみの直線的な口縁である。調整はともにハケ目がおもで、33の外面のみミガキが施してある。胎土は两者とも砂粒を含み、黄褐色を呈する。34～36は底部片である。35・36は二次焼成を受けていることから壺であろう。2点とも開きぎみに立ち上がっている平底である。調整は外面が主としてナデ、内面は36でハケ目、35で細かいヘラ状工具痕がみられる。34は平底の底部を張りつけて成形している。37は器台片で、推定底径9.7cmを測る。38は投弾である。長さ3.3cm、幅2.0cmである。

以上により、本井戸の時期は弥生時代後期中葉から後葉が考えられる。

SE-04

SE-04は調査区中央部東寄りに位置し、SE-03の北西約0.5mに位置する。

本井戸は素掘りである。検出面の標高は約6.40mである。規模は検出面で0.90mの略円形であり、深さは2.55mである。断面形は検出面下2.20mまで円筒形をしており、以下は底面にむけてつばまっている。底面は0.47×0.40mの卵形をなし、平坦である。鳥栖ロームと八女粘土の境界は検出面下1.7m、標高4.70mにあるが、喉の崩落はみられない。

覆土は、上層は砂粒が多く混じっているが検出面下1.1m以下は粘質の強い黒褐色土である。底部付近に一括投棄された状態で出土した土器の位置からみて、投棄時の底面は現底面より0.2～0.3m上にあったと思われる。

遺物は底面より0.2mから0.6mのあいだの南西に寄った位置で一括投棄された状態で土器が

調査の記録

7個体出土した。SE-03と同様、完形に近いもので、底部のみ、また口頸部のみの土器片が存在する。他は覆土中から破片が散漫に出土した。

SE-04出土遺物 (Fig. 23・24)

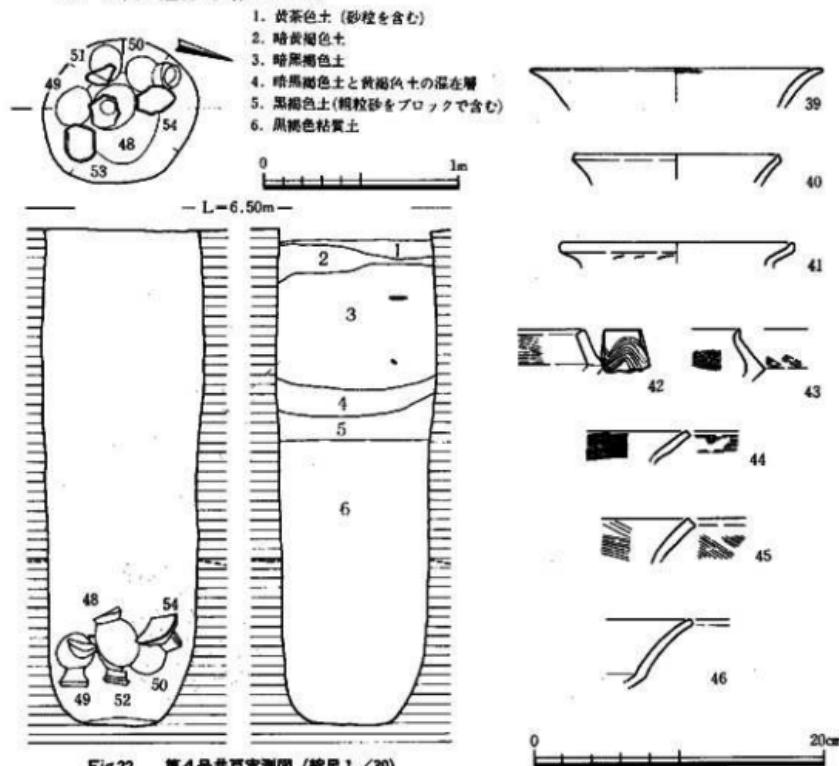


Fig.22 第4号井戸実測図 (縮尺1/30)

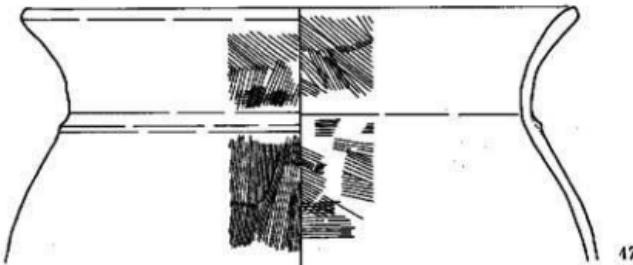


Fig.23 第4号井戸出土遺物(1) (縮尺1/4)

第4章 第14次調査地点

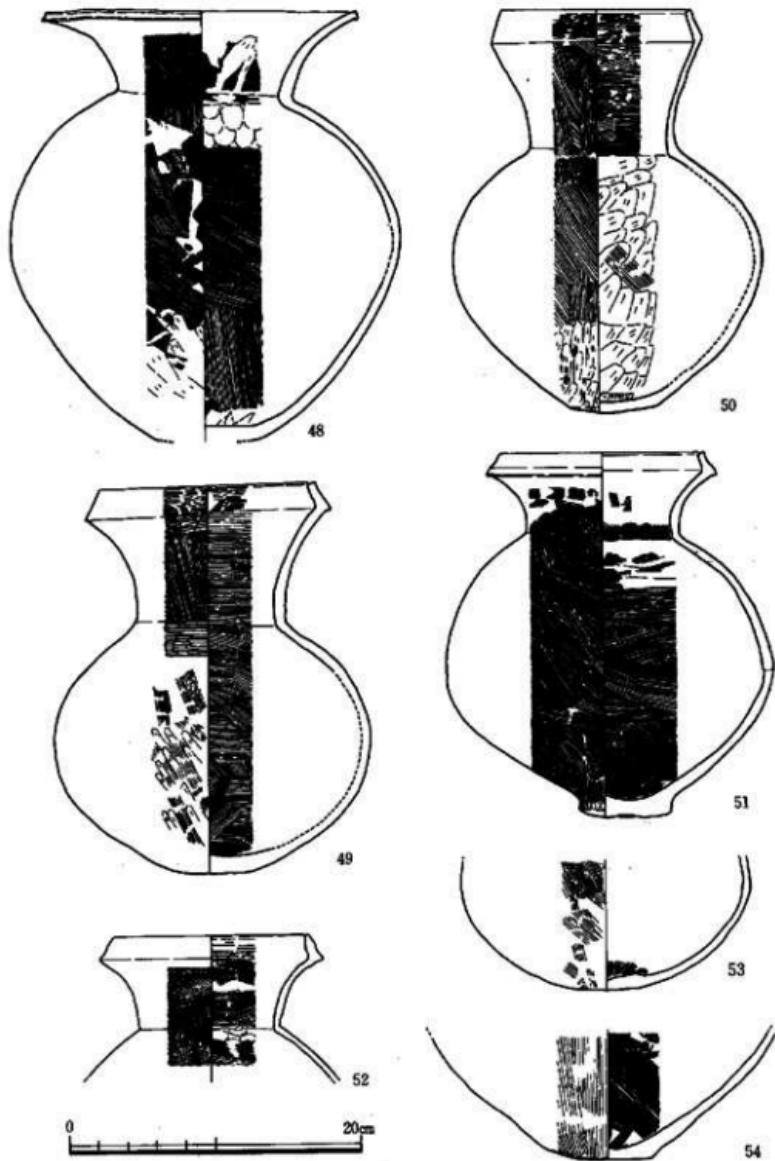


Fig.24 第4号井戸出土遺物2 (縮尺1/4)

調査の記録

底面から20cm程浮いた位置で一括出土した土器は48~54である。48は口縁の一部を欠いた完形の壺である。口縁部は大きく外反し、端部は下に引き出される。胴部は球形に近いが、胴部中央の張りが強い。底部は器壁の剥離で不明であるが、丸味を帯びた平底と考えられる。頭部の内面屈曲部は稜が明瞭である。口径22.1cm、器高約30cm。調整は主として細かいハケ目でおこなっている。外面は斜め方向が中心であり、胴部下半1/3ほどは下から上へのナデによって消されている。内面は底部付近で縱方向、胴部中位から上位付近で横方向のハケ目が施された後、胴部中位に斜め方向のハケ目がはいる。口縁から頸部は横方向のハケ目である。胎土は石英粒を含み部位により灰褐色から白黄色を呈する。焼成は良好であり底部付近に黒斑を有する。49~52は複合口縁壺である。49は頸部から口縁に向かってゆるやかに開いていき反転部で外に突出し、そのまま直線的に口縁端につらなる。口縁端は少し内傾気味である。胴部は扁球状であり、中央付近に最大径をもつ。底部は丸味をもった平底である。口径は14.8cm、器高は27cm。調整は外面口縁反転部が横方向のハケ目、口縁部直下の横方向ヘラミガキに始まり肩部までヘラミガキ、ハケ目が交互におこなわれている。胴部はハケ目とナデとが混在している。内面は横方向のハケ目が中心となっている。胎土は砂粒、石英粒子を含み、黄褐色から灰褐色を呈する。焼成は良好であり黒斑を有する。50は直線的に立ちぎみに内傾する反転部から締まりのない頸部が続く。胴部は上下を押された球形をしており最大径が中央より上位にある。底部は丸味を帯びる平底である。内面頸部屈曲部は明瞭な稜をなす。口径は12.8cm、器高は27.7cmである。外面調整は口縁反転部が横方向のハケ目の他は、縱方向のハケ目がおもとなっている。胴部下位から底部にかけてはケズリ痕が残存する。内面調整は口縁から頸部が横方向のハケ目、胴部以下は板状工具によると思われる強いナデが施されている。胎土はわりあい精良で灰褐色を呈する。焼成は良好で口縁から肩部にかけて黒斑を有する。51は弱く内湾する反転部を持ち、反転部の接合部は意識的に下方へつまみ出している。頸部は短い。胴部は扁球状をしており、最大径は中央より少し下位にある。底部は胴部より1cmほど突出しており径約6cmである。さらに底部中央には径約1.5cmの窪みがある。全体として歪んでいる。内面頸部屈曲部は明瞭な稜をなしている。調整は内外とも細かいハケ目である。外面は縱と斜め方向のハケ目を中心である。内面は横方向のハケ目が中心になっている。胎土は石英粒子を多様に含み黄赤色を呈する。焼成は良好で胴部中央から下半にかけて黒斑を有する。52は反転部の接合部に引き出したような突出があり、口頸部に比べて反転部の器壁が厚い。頸部は短いが締まりがよい。頸部と肩部は明瞭に区別される。肩部はあまり張らず胴部へ続く。口径は13.4cmである。外面調整は細かいハケ目が丁寧に施されている。内面調整は横方向のハケ目である。胎土は精良で白黄色を呈する。焼成も良好である。53・54は壺形土器の底部か。53は丸底に近い。胴部は扁球状をなし、最大径は下半にあると思われる。調整は内外ともハケ目である。胎土は砂粒を含み青灰

第4章 第14次調査地点

褐色を呈する。焼成は普通である。底部付近には黒斑を有する。54は丸味を帯びた平底である。調整はハケ目がおもであり、外面に粗く、内面に細かいハケを使用している。外面底部にもハケ目がおよんんでいる。胎土は大粒の石英粒子を含み灰褐色を呈する。底部から胴部に黒斑を有する。39~47は覆土中から散漫に出土した土器片である。39・40・42・43は壺形土器の口縁であろう。40は口縁端をつまみ上げている。42・43は複合口縁である。42は反転部に波状文を有する。43は反転部が直線的に内傾し、口縁端を外に向けて引き上げている。39が淡橙色、40が灰褐色、42が乳白灰色、43が黄灰色を呈する。41は壺形土器の口縁部であろう。丁寧なつくりで調整はナデである。口縁下部に工具で右上から左下へ文様を刻んでいる。胎土、焼成とも良好で明橙色を呈する。47は壺形土器片である。頭部は締まらず全体にぬったりとしている。肩部には薄い三角突帯が巡っている。口径は38cmである。調整は粗いハケ目。胎土は砂粒を多量に含み乳黄色を呈する。

以上により本井戸は弥生時代後期後葉の時期を与えられよう。

SK-05

SK-05は調査区中央部北寄りに位置する。SE-04の

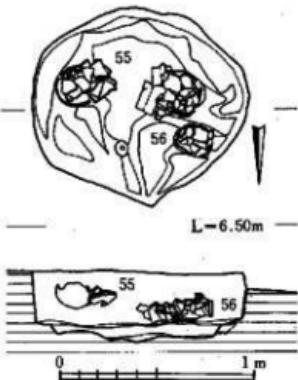


Fig.25 第5号土塙実測図 (縮尺1/30)

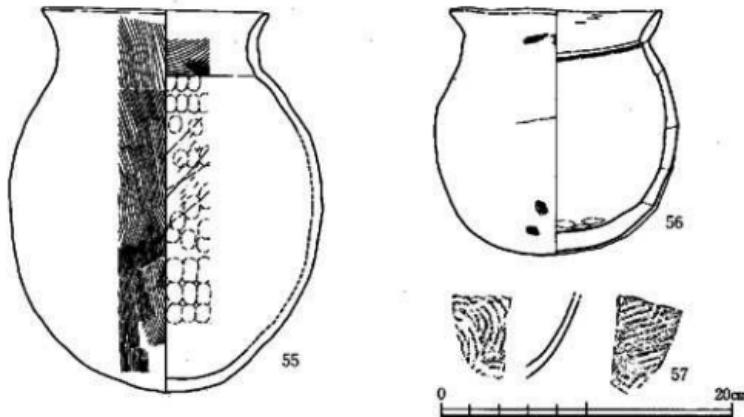


Fig.26 第5号土塙出土遺物 (縮尺1/4)

調査の記録

北約6.5mに位置し単独で存在する。

本遺構は井戸址として調査していたが、第一湧水点に達しておらず、井戸址と考えるのは不適当であろう。可能性として貯蔵用の土塁と考えられる。

本遺構は素掘りと考えられる。検出面の標高は約6.30mを測る。規模は検出面で1.13×0.94mの梢円形を呈する。深さは最深部で0.37mを測る。断面形は検出面よりすばまりながら落ち、検出面下0.26mで一度平坦になる。平坦部は約0.1m程の幅で、断続的に掘り方内周を巡っている。この平坦部は約0.1m落ち最深部へ至る。底面を一段目の平坦面と仮定すると1.08×0.9m程の梢円形となる。最深部で考えると不整形となる。遺物の出土状態から考えると底面は一段目の平坦面の可能性が強い。

覆土は、検出面から約0.17mまでが茶褐色土でロームブロックを混じえている。以下、検出面より約0.3m【平坦面よりやや下位】までが暗茶灰色土で占められている。以下、最深部までが粒子の細かい淡灰褐色土である。

遺物は最深部から約0.1m浮いた状態で2個体、さらに最深部から約0.18m浮いた状態で1個体の土器を検出した。他は覆土中より須恵器の壺、壺形土器の細片が出土したのみである。

SK-05出土遺物 (Fig. 26)

底面より約10~20cm浮いた状態で破碎された土器3個体が出土した(55・56)。一個体は整理の過程で所在不明となり図示できない。55は土師器の壺である。遺構内東端で最深部より18cm浮いた状態で出土した。土圧によって潰れているが本来は完形であったと思われる。覆土の茶褐色土中にあり、暗茶灰色土に乗る状態で出土した。口縁は頸部からゆるく外反し、口縁端で丸くまとまる。頸部の縮まりは悪くながら肩部につながる。胴部の張りは弱く全体として縦形の扁球状をなしている。底部は丸底で直座しない。口径は15.4cmを測る。調整は外面が指押さえの後、縦方向と斜め方向のハケ目をおこなう。ハケは二種を使用する。内面は口縁から頸部にかけてが横方向と斜め方向のハケ目である。胴部以下はヘラケズリの後指押さえとナデが施されている。全体として調整は難であり、器壁の凹凸や粘土屑の付着がみられる。また、粘土の接合部もよく観察できる。胎土、焼成は良好であり白黄灰色を呈する。56は55より約5cm下位で暗茶色土中より出土した。土師器の壺であろう。全体に粗製である。口縁は肩部から直線的に聞く。頸部内面屈曲部は胴部と口縁の接合痕が著しく残る。胴部は球形状であるが歪みが激しい。底部は丸底である。器壁は全体に厚く、粘土接合部が明瞭に確認される。口径は14~14.5cm、器高は15.5~16.9cmを測る。調整は器壁の風化が激しく不明な部位が多い。外面は目の細かいハケ目とナデと思われる。内面は口縁部でヘラケズリ、底部で指押さえが施されている。胎土は粗く大粒の石英粒を多量に含む。色調は暗赤色である。底部附近に底部を中心とした輪状の黒斑を有する。焼成は不良である。57は須恵器壺の胴部片であろう。調整は外面が

第4章 第14次調査地点

粗い平行タタキ、内面は青海波タタキである。タタキ痕は明瞭ではない。胎土は密であるが、生焼けぎみで灰白色を呈する。須恵器坏も出土したが、細片のため図示できない。

以上の遺物などにより本造構には六世紀後半から七世紀にかけての時期があてられよう。

SE-06

SE-06は、調査区中央部西寄りに位置する。SE-02の北西約2.5mに位置し単独で存在する。本井戸は素掘りである。検出面の標高は約6.35mを測る。規模は、検出面で $0.66 \times 0.6m$ の不整形である。深さは1.85mで、標高約4.50mを測る。断面形は検出面から0.55mまで鋭くすぼまり、幅は0.45m程になる。以下、底面まで直線的に落ちすぼまる。壁から底面への変化点は、検出面下1.8mに認められるが、最深部はさらに5cm低い所にある。底面は径約0.25mの略円形を呈する。

最深部での標高は4.5mである。底面は鳥栖ロームを掘り抜き、八女粘土まで達している。横面の崩落は認められない。

覆土は、暗茶灰色粘質土が主体をなしている。確認できた検出面下0.6mまでは覆土の状態から、人為的埋土と考えられる。

遺物は底面近く標高4.70m付近で、木片が二点出土した。他は、覆土上層を中心に土器片が

少量出土している。

1. 暗茶灰色粘土
2. 暗茶灰色粘土にローム粒を含む
3. 暗茶灰色粘土にロームブロックを含む
4. 暗茶灰色粘土

SE-06出土遺物 (Fig. 28)

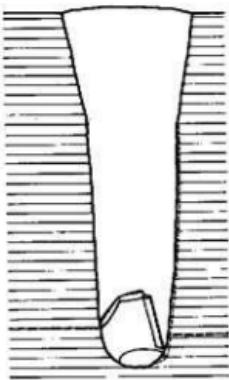
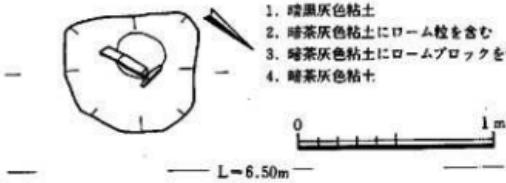


Fig.27 第6号井戸実測図 (縮尺1/30)

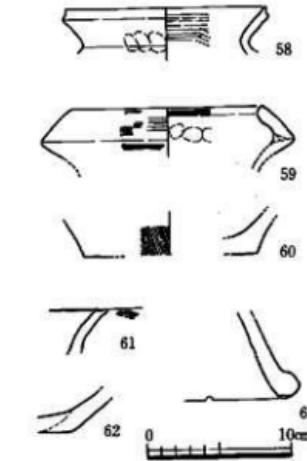
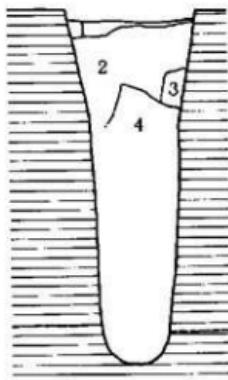
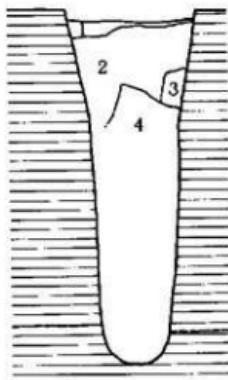


Fig.28 第6号井戸出土遺物 (縮尺1/4)

調査の記録

58は壺形土器の口縁片であろう。頸部できつく外湾し、直線的に開く。口縁端は内面側を強くつまみ上げている。口径は13.7cmである。調整は外面が口縁ハリツケ時の指押さえの他は、横方向のナデを用いる。内面は目の粗いハケ目を行っている。方向は横方向がおもである。胎土は砂粒を多く含み灰白色を呈する。焼成は良好である。59は複合口縁壺の口縁片である。器壁が厚くはってりとしている。口縁の外面折り返し部分では、明瞭な稜線は形成されず内湾しながら内傾する。口縁端は丸味を帯びており、内面と外面の区別が困難である。口径は12.8cmを測る。調整は外面が横方向のハケ目と、横方向のナデで構成されている。内面は口縁端部に横方向のハケ目を施すほかは、口縁反転部のハリツケ痕と横方向のナデが行なわれている。口縁折り返し部の接合は反転部を接合し、さらに内面より粘土を詰めて補強している。胎土は砂粒を多く含み、白黄灰色を呈する。60・62は壺形土器の底部片であろう。60は平底で若干外反気味に立ちあがる。底部径は12cmと推定される。調整は外面ハケ目、内面は風化が激しく不明である。胎土は砂粒を含み暗黄灰色を呈する。62は丸味を帯びた平底と考えられる。胴部に向かいゆるく立ちあがる。61は壺形土器の口縁片であろう。ゆるく外湾しつつ外傾する。口縁端は外につまみ出している。調整はハケ目とナデが使用される。胎土は砂粒を少量含み灰象牙色を呈する。焼成は甘い。63は器台の底部片である。調整は外面ハケ目、内面ヨコナデである。底部の凹みは、焼成前についた縄の圧痕と思われる。胎土は砂粒を含み明橙色を呈する。

以上により、本井戸は弥生時代後期の時期があてられよう。

SE-08

SE-08は調査期間終了間際、業者が土質検査を行うため、調査区の北側を掘削した際に偶然検出された。SK-05の北约10mに位置する。

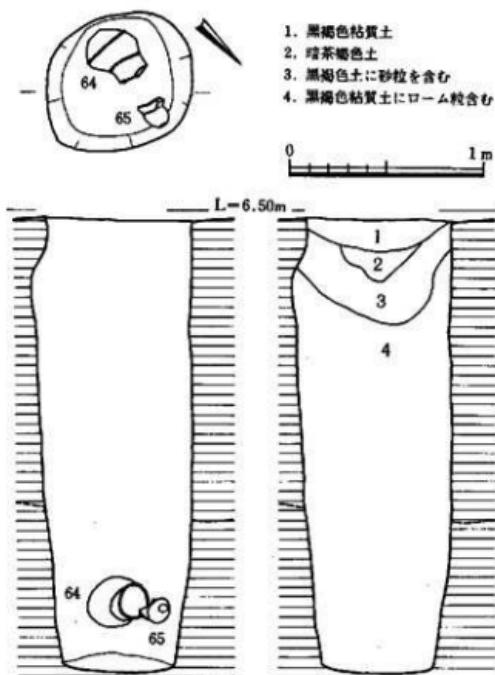


Fig.29 第8号井戸実測図 (縮尺1/30)

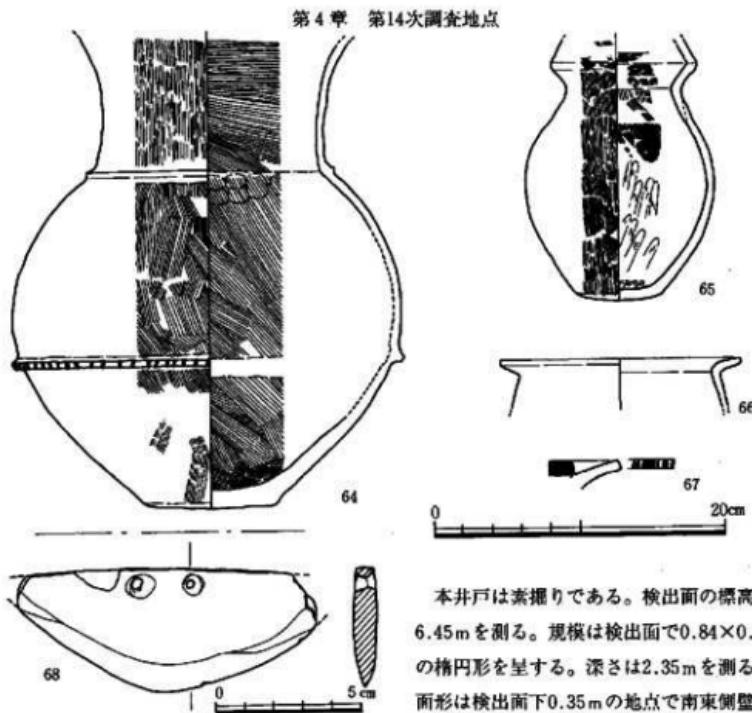


Fig.30 第8号井戸出土遺物 (縮尺1/4・1/2)

では垂直に落ちている。以下はゆるやかにすぼまりながら底面につながっている。底面は 0.67×0.58 mの不整形をなし平坦である。鳥栖ロームと八女粘土の境界は検出面下1.55m、標高約5.00mであり、掘り方がすぼまり始める深さである。

覆土は、検出面下0.55mまでは明瞭に区分できる黒褐色土と暗茶褐色土からなっている。検出面下少なくとも0.55mまでは人為的な埋土と考えられる。以下は粘性の強い黒褐色土で占められているが、検出面下約1.25mから1.35mの間に茶褐色土が混入している。さらに下層は暗黒褐色土で埋まっている。

遺物は、底面より約0.25m浮いた状態で壺が2点、一括投棄された状態で出土した。いずれも横置状態での出土である。遺構内南北で互いに口を向け合っている。ほかは覆土中より石庵丁と少量の土器片が出土している。

SE-08出土遺物 (Fig. 30)

64・65が一括投棄状態で出土した土器である。ともに壺である。64は口縁部を欠くが、複合

調査の記録

口縁壺の可能性が強い。井戸内において口縁部の破片が見つけ得なかったことから、投棄前に打ち欠いたと思われる。頸部から口縁はゆるく外反しながら立上がっている。胴部は球形を呈する。最大径は胴部中央付近に位置する。底部は丸味を帯びているが平底である。頸部の付け根に断面三角形、また、胴部中央より少し下位に断面台形で刻み目を持つ突帯が巡っている。胴部の突帯は内面調整後にハリツケられたらしく、内面のハケ目が指押さえによって突帯部分だけ消えている。口径は18cm以上、器高も32cm以上であろう。調整は外面頸部から口縁にかけて縦方向のハケ目、胴部は斜め方向のハケ目である。胎土は砂粒を混じえ白灰褐色から白灰褐色を呈する。胴部突帯付近には黒斑が見える。65も64と同様、口縁端を打ち欠かれている複合口縁壺である。口縁は折り返し部から直線的に内傾する。折り返し部は明瞭な後は形成されず丸味を帯びて反転する。頸部は短く締まりが弱い。胴部の張りは弱く、縦形の扁球状をなす。最大径は胴部中央付近にある。底部は丸味を帯びた平底である。調整は、外面は口縁部が横方向、頸胴部は縦方向のハケ目である。内面は胴部上半までがハケ目、以下がヘラケズリである。胎土は砂粒を多量に含み灰褐色を呈する。底部から胴部下半に黒斑を有する。66は変形土器片である。口縁は強く外反し横向きに聞く。口径は16.6cmである。調整はナデ。胎土は砂粒を少量含み黄赤色を呈する。67は口縁片である。口縁端に刻み目が入る。外面調整はナデである。胎土は精良で黄褐色を呈する。68は石庖丁である。標高4.51mで出土した。刃部は外済し両面から研ぎ出される。研ぎ出しの稜線はあまり目だたない。現存長10.2cm、最大幅4.2cmを測る。材質は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスである。

以上により本井戸は弥生時代後期中葉の時期があてられよう。

2) その他の遺構

SK-07

本遺構は調査区北側西寄りに位置する。検出面の標高は約6.45mである。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺を北から9°東へ振っている。規模は長辺が搅乱と調査区外に延びるため1.9m以上、短辺は約1.9mである。深さは約0.25~0.3mを測る。床面は凹凸があるもののほぼ平坦である。本遺構の性格は不明であるが、同様の土壙は、比恵第9次調査の18・22号土壙がある。

覆土は上層がおもに暗茶褐色土、中層がロームブロックを含む黒褐色土、下層が茶黃褐色土で構成さ

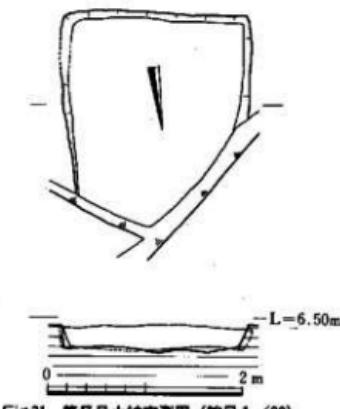


Fig.31 第7号土壙実測図 (縮尺1/60)

第4章 第14次調査地点

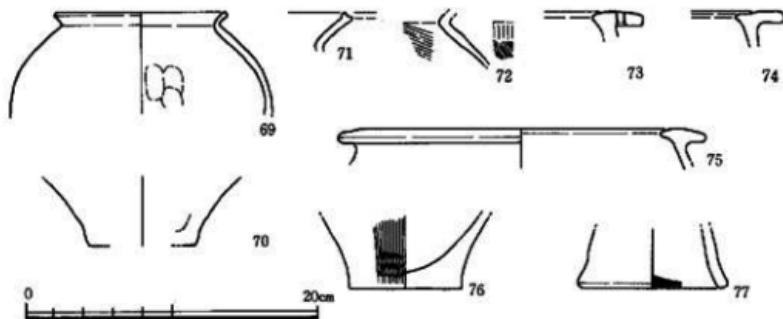


Fig.32 第7号土塁出土遺物 (縮尺1/4)

れており、人為的な埋土と考えられる。遺物は覆土中から多くの土器片が出土した。

SK-07出土遺物 (Fig. 32)

土器片の総量はコンテナケース1/3箱ほどである。69は壺形土器片である。口縁は短く外反し、胴が張る。口径11.5cmである。胎土は砂粒を含み、淡橙色を呈する。焼成は甘い。71の口縁片は口縁端内側を上につみ上げている。73~75は逆L字状口縁片である。75の口径は推定で約19cmである。74・75の胎土は石英粒子を含み、黄褐色を呈する。73は口縁かえり部に紐通し穴らしい二穴の径0.5cmの焼成前穿孔がある。胎土は微砂粒を含む。内外ともに赤色顔料を塗布している。70・76は底部片である。平底でやや外湾しながら立ち上がる。

以上の遺物から、本遺構は弥生時代中期後葉のものと考えられる。

SC-09

SC-09竪穴式住居址は調査区の北東隅に位置する。搅乱や柱穴により平面プランはかなり変形している。さらに遺構の一部は調査区外に延びているため、遺構南部のみの調査であった。

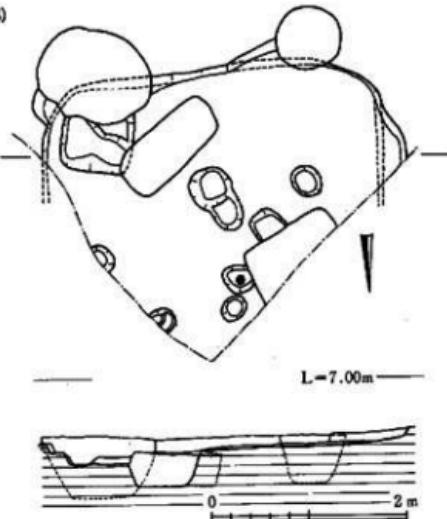


Fig.33 第9号竪穴式住居址実測図 (縮尺1/60)

調査の記録

規模は南辺で約3.5m、南北で3m以上を測る隅丸方形と考えられる。壁高は残りの良い部分で13cmを測る。床面積は8.3m²以上と推定される。床面には柱穴がいくつか存在するが、主柱穴と特定できるものは確認できなかった。ベット状施設や壁溝は検出できなかった。遺物はごく少量の土器片が覆土中から出土したほか、床面近くで水色のガラス小玉を出土した。このガラス小玉は整理過程で所在不明となり、図示できない。

遺物が少ないため、時期の限定は困難であるが、平面形が方形らしいこと、ガラス小玉を出土していたことなどから弥生時代後期以降と考えられよう。

ピット内遺物 (Fig. 34)

本調査では約60個のピットを確認した。地山の削平を考えると深いピットだけが残ったと思われる。このため掘立柱建物等の検出はできなかった。ここでは図示できる遺物を持つピットの説明にとどめたい。

78・79はピット34から出土した。このピットは径約30cmの略円形で検出面からの深さは30cm程である。中央に径14cmの柱痕跡を残す。覆土は柱痕跡が黒褐色土、掘り方が赤褐色土である。78・79はともに柱痕跡埋土からの出土である。78は壺形土器、79は壺形土器の口縁片であろう。78は口径13.6cmで胎土は砂粒を多く含みおもに淡橙色を呈する。80~84はピット44で出土した。ピット44はSC-09に切られている。径約65cmの略円形を呈し、深さは約50cmを測る。覆土は暗褐色土にロームブロックを混じている。80は壺形土器の口縁である。外湾ぎみに開き端部は外傾する。口径は12.4cmを測る。調整は粗いハケ目である。外面は継、内面は横方向である。外面口縁端直下には爪跡と思われる痕跡が残る。胎土は砂粒を含み明橙色である。81は壺形土

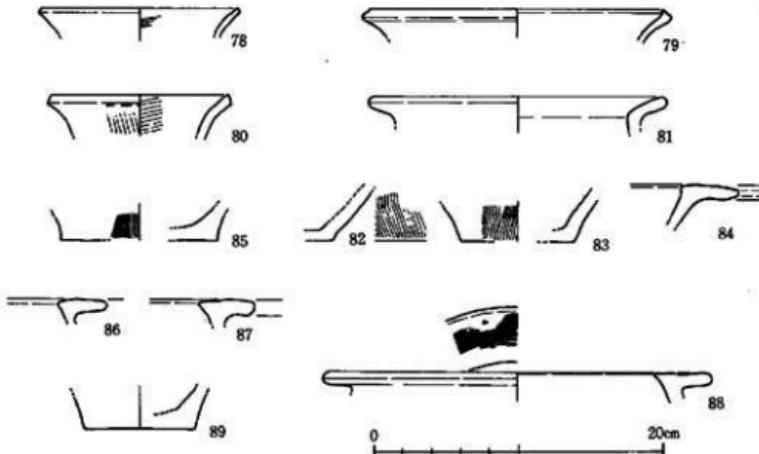


Fig.34 ピット内出土遺物 (縮尺1/4)

第4章 第14次調査地点

器口縁片と思われ、口縁部は大きく外反する。端部は丸くおさめる。推定口径20cmである。調整はナデと推定される。胎土は粗く黄橙色を呈する。84は高壺の口縁部であろう。口縁端は水平より下がりぎみに外に伸びる。調整は不明であるが、全面に赤色顔料を塗布した跡が散見される。82・83は底部片である。ともに平底である。82は開きぎみに、83は立ち気味に胴部へつながる。調整はともに縦方向の粗いハケ目である。胎土は82が精良で淡黄色を呈し、83は砂粒を含みおもに明橙色を呈する。85・86はピット45から出土した。ピット45はSC-09により削られており55×40cmの略円形を呈し深さは40cm程度である。覆土は黒褐色土である。85は底部片である。半底で立ちぎみに胴部へつながる。底径10.9cmであり、大形と考えられる。調整は外面縦方向のハケ目を施している。胎土は砂粒を多量に含み白黄橙色を呈する。86は逆L字状の口縁片である。調整はナデ、胎土は砂粒が多く含み外面が白褐色、内面が黒褐色を呈する。87はピット25より出土した。ピット25は径約25cmの略円形で深さ15cm程度である。柱痕跡を残す。覆土は柱痕跡が黒色土で、掘り方は赤褐色土である。87は掘り方から出土した。厚い口縁部は平坦であり、内面に突出している。胎土は砂粒を含み灰黄白色を呈する。調整は不明である。88・89はピット51より出土した。ピット51は擾乱により切られているが、径35cm程度の略円形と推定される。深さは15cm程度である。覆土は暗茶褐色土にローム粒が混入している。88は87と同様口縁は平坦に伸び内側にも突出している。推定口径は18.8cmである。調整は口縁平坦部に細かいハケ目を入れる。他はナデと思われる。胎土は精良であり赤灰褐色を呈する。89は底部片である。平底で胴部に直線的に立ちあがる。胎土は砂粒が多く外面黄白橙色、内面白灰色を呈する。

ピットの遺物は全体に井戸の遺物よりも古く、弥生時代中期から後期前半に収まる。

3. 小結

本調査地点ではじめに現われるのはピット群である。弥生時代中期から後期前半までの遺物がはいる。さらに中期後葉にはSK-07が出現し、ピットと土壙が一時期共存したと考えられる。これらのピット群は主として住居にかかわるものであろう。後期にはいるとピット群は姿を消し、かわりに井戸が散在するようになる。後期前葉にSE-06が現れたのをはじめ、微妙な時期差をもって継続的に後期末葉(SE-02)まで存在する。この後しばらく空白となり、古墳時代後半になり土壙(SK-05)が見られるのみである。竪穴式住居址(SC-09)については弥生時代後期以降古墳時代の可能性が考えられる。以上により、本地点は弥生時代中期に居住地域として人々が生活する場となり、後期にはいると水汲み場的存在となっていく。SK-08の検出状況から井戸は調査区外にも散在していると推測できる。

第5章 第16次調査地点

1. 調査の概要

比恵遺跡群の第16次調査地点は比恵丘陵のほぼ中央部に位置する。1952年に森貞次郎氏らによって調査された第2次調査地点、1982年に福岡市教育委員会により調査された第6次調査地点の西側に隣接する地点である。該地は近藤忠商事株式会社の駐車場であったところである。本社建物は1969年に建設された、周辺でも比較的古い建物である。近年、会社建物の増築工事が計画されたために、遺構の有無の確認を目的とする試掘調査を実施した。その結果、遺構の残存が確認されたために発掘調査を実施することになった。工事の計画と調査範囲の設定について既存の建造物や埋設物に影響を与えることのないように現地で協議を行なった。その結果、建物側やブロック塀側で最低3mのひきを取り、また埋設されている水管、高圧電線、下水道の部分は極力触れぬよう発掘調査を進めることとなった。また、排土の処理の関係から最初に東側を調査し、排土を反転して西側を調査した。

調査に先立って周辺のこれまでの調査結果から次の点が注意された。まず、第2・6次調査地点で判明している弥生時代の壺棺墓群の墓域が本調査区内に拡がっていることが予測されることである。それは、特に第2次調査の概要報告において本調査範囲の壺棺の出土が記録されていることである。1952年当時に比べると周辺地形は著しく異なっており、特に削平が進んでいることから、当時調査された壺棺墓の位置を正確に復元することは困難と思われるが、壺棺の抜き跡などの痕跡が検出できれば、この地点の壺棺群の分布状態を3回の調査成果の複合として再現することが可能になるからである。こうした点から埋葬遺構については搅乱されているものについても、細心の調査を行なうことになった。また、壺棺墓群以外についても、第6次調査地点で検出された古墳周溝と推定された溝状遺構の延長の確認、そして西側の第5次調査地点における弥生時代後期から古墳時代初頭の住居址群の範囲推定についても本調査地点での追求課題であった。

本地点では20~40cmの造成土の直下が鳥栖ローム中位となる。約1mの削平が推定された。

調査の結果、調査区東側には弥生時代中期後半~後期前葉と判断される壺棺墓、土塙墓の群集が検出され、西側には古墳時代初頭と推定される竪穴式住居址と古墳時代中期の古墳周溝が検出された。また、これらの周辺からは掘立柱建物の柱穴と推定されるビットが多数検出された。残念ながら柱によって構成される建物の規模や性格は調査区の範囲等の限界から明らかにことができなかつたが、柱穴内から弥生時代終末の遺物を一括出土する例があり、建物の時期を検討する上で参考となつた。

第5章 第16次調査地点

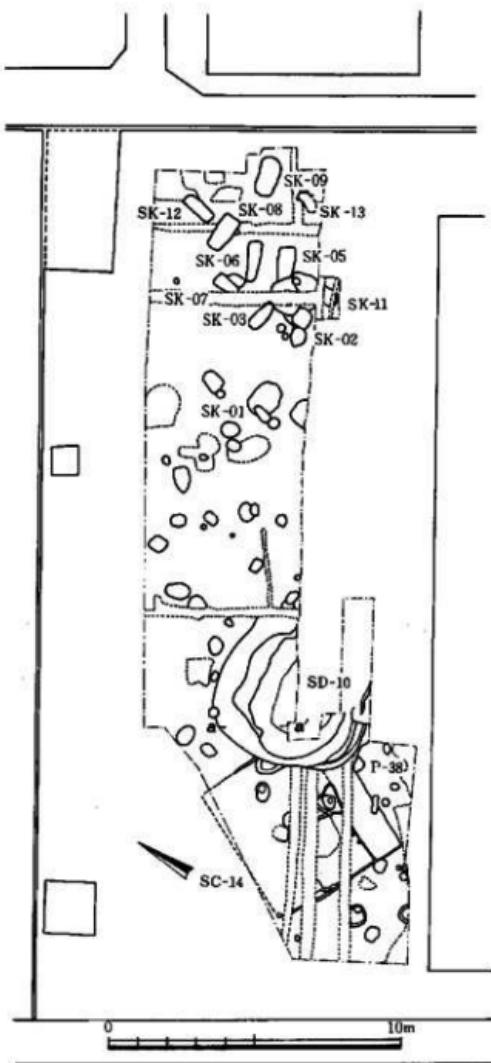


Fig.35 第16次調査地点造構分布図 (縮尺 1 / 200)

2. 調査の記録

1) 墓棺墓

調査区内では東側に偏って壺棺墓と土塚墓が検出された。その両者は分布域をやや異にし、そのうち壺棺墓群は南側に偏って検出された。内訳は2基が成人棺、2基が小児棺の計4基である。これらは4基とも上部が破壊されて検出された。特に小児棺は基底部を残すだけである。SK-01 調査区中央東よりから出土した接合式壺棺である。豎穴部は不整梢円形であり、壺棺墓主軸方向に1.2m、直行方向に1.1mを測る。床面はほぼ平坦であり、中央部に約0.1mの段が付く。横穴部は先ずほりに掘削され、検出面から約1.1mの深さを測る。壺棺墓主軸はN-70°-Wであり、約35°の傾斜で棺体を埋置してある。上蓋は底部が削平時に陥没し、棺内に転落していた。豎穴部の埋土は黒褐色土と黄褐色土の互層状をなしており、堅くしまっていた。豎穴部埋土と棺内への流入土に混じって弥生時代土器片が出土した。(10-12)

棺は下棺に大型壺、上棺に中型壺を使用している。1は上壺である。胴部最大径が上位にあり、しまった頸部から直線状に「く」字状に折れる口縁をもつ。頸部に三角突帯がつく。外面は継位のハケ調整である。器高70.5cm、口径45.0cm、底部径40.0cm、胴部最大径54.3cmを測る。

2は下棺でありやや長胴の大型壺である。胴部中位に「コ」字形突帯2条をめぐらす。口縁は肥厚し、端部が外方によく発達し、やや内傾する。口縁部と突帯部は横ナデ、その他はナデである。器高99.7cm、口径68.0cm、底部径11.5cm、胴部最大径70.8cmを測る。

SK-02 調査区東側で検出したが、胴部の1/3程度を残すだけで、上位は後世の削半で失っていた。壺棺墓主軸はN-90°-Wであり、傾斜は18°を測る。3は下壺である。胴部はやや張り、しまった頸部から直線状に「く」字状に折れる口縁をもつ。頸部に三角突帯がつく。底部はわずかに上げ底となる。外面はハケ、内面はナデ調整を施している。胴部中位を欠損するために器高は不明であり、現存器高49.0cm、口径38.6cm、底部径10.9cm、胴部最大径43.0cmを測る。

SK-03 SK-02の北側約1mの位置にある接合式壺棺である。削半によって両棺とともに破壊されている。豎穴部は不整梢円形を呈し主軸方向に約0.8m、直行方向に0.7mを測る。床面はほぼ平坦である。横穴部は削平と搅乱のために不明である。壺棺墓主軸はN-73°-Wであり、傾斜は35°を測る。上壺は小型壺、下壺は大型壺である。4は胴部下半を欠損する。胴部はやや張り、胴部最大径は中位にくる。「く」字状口縁をもつ。頸部の直下に三角突帯がつく。外面は継位のハケ、内面はナデ調整である。現存器高39.6cm、口径44.7cm、胴部最大径48.3cmを測る。5は胴部中央に「コ」字形突帯が2条付く。突帯の下位に最大径があり、肩部をもつ瓢形を呈する。頸部はよくしまり、内傾した「L」字状の口縁がつく。頸部の直下に三角突帯がつく。器高は69.7cm、口径40.2cm、底部径10.6cm、胴部最大径49.2cmを測る。

第5章 第16次調査地点

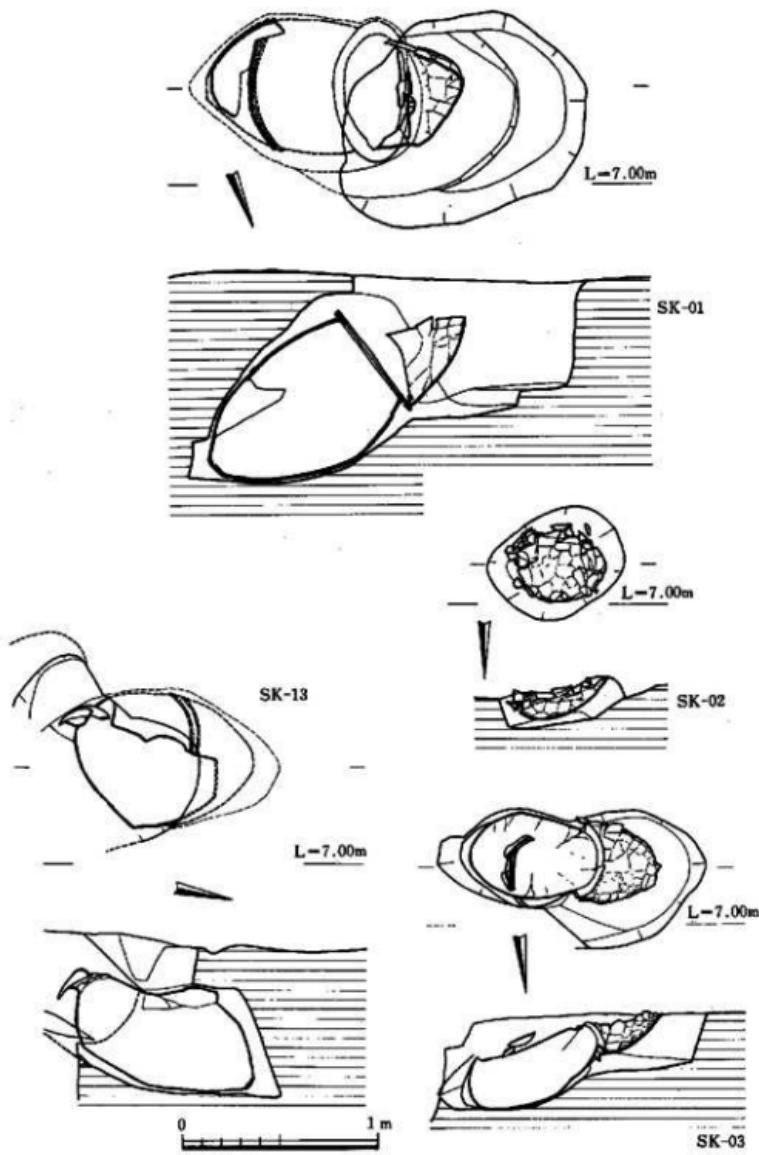


Fig.36 墓棺墓出土状況実測図 (縮尺 1 / 30)

調査の記録

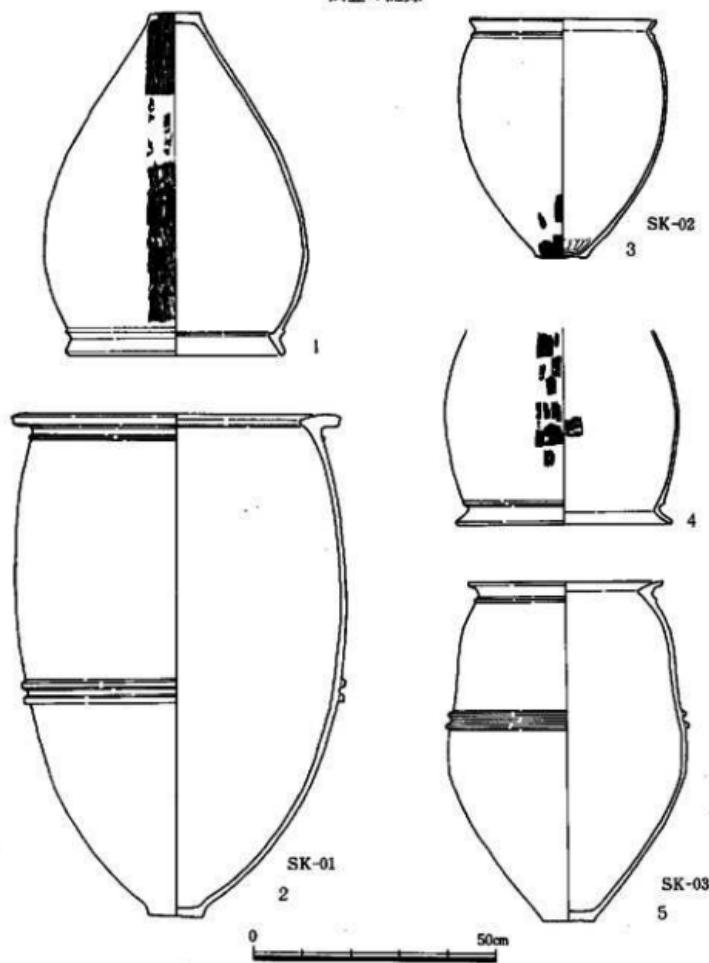


Fig.37 墓棺実測図1) (縮尺1/12)

SK-13 調査区の南東隅に検出した。浄化槽、水道管などの埋設により破壊を受け、下壺のみが残る。本来は接合式墓棺であったと推定される。豎穴部と上壺は残存しない。横穴部は先ずはまりに掘削され、検出面から約0.6mに床面がある。横穴部の床面はほぼ平坦になる。墓棺墓主軸はN-2°30'-Eであり、傾斜は約36°を測る。6は下壺である。胴部は張り、最大径

第5章 第16次調査地点

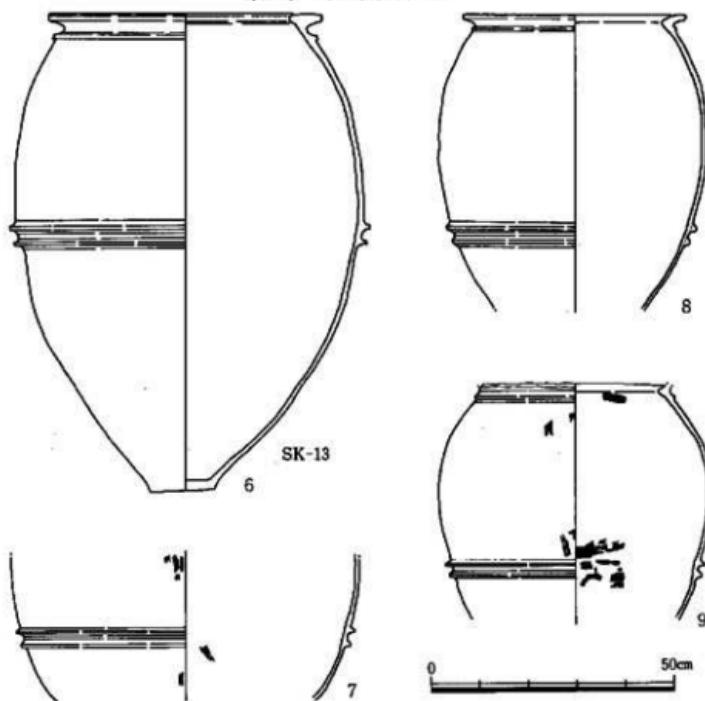


Fig.38 壺棺実測図2) (縮尺1/12)

ほぼ中位にくる。肥厚した口縁は平坦で内外方に突き出す。頸部の直下に1条と胴部中位に2条の「コ」字状突帯がつく。口縁および突帯部は横ナデ、他はナデ調整である。器高98.0cm、口縁径56.0cm、底部径13.3cm、胴部最大径71.4cmを測る。

2) 土塚墓

土塚墓は調査区東側に分布し、壺棺群とは分布域を異にするように北側に偏在する。土塚墓は互いに切り合うことなく分布しており、特にSK-05とSK-06は約0.6mの距離で並列しており、何らかの関係をうかがわせた。また検出した土塚墓は形態、規模共に類似していた。

SK-05 調査区の北東側で検出した。西側を現代擾乱によって破壊されている。隅丸方形を呈する土塚墓であり、深さ0.3~0.4mを測る。主軸はN-59°-Eである。現存長1.33m、幅0.62mを測り、壁は75°~85°の傾斜である。土塚内埋土は二分され下部は茶褐色土、上部は砂疊混じり黒褐色土である。なお、棺内北側上部の埋土中から多量の土器片が一括出土した。調

調査の記録

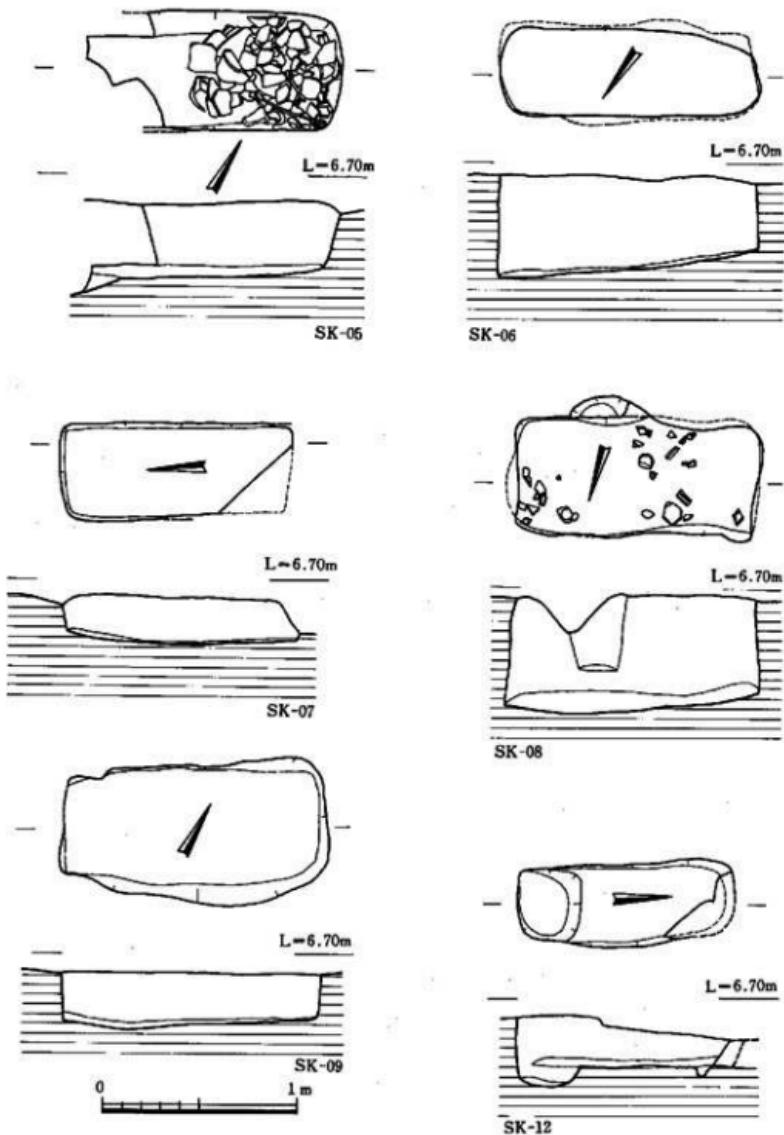


Fig.39 土壌基実測図1) (縮尺1/30)

第5章 第16次調査地点

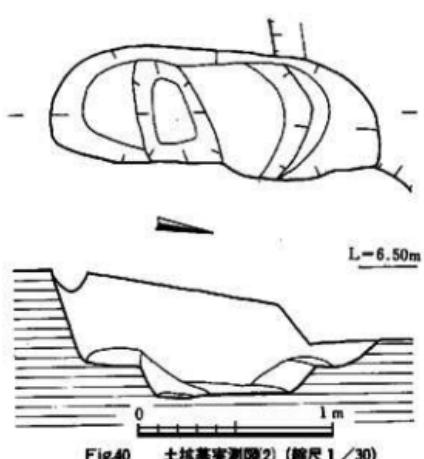


Fig. 40 土壙基底測定図2 (縮尺1/30)

当当初は土器蓋土塚墓の可能性を考えたが、埋土が近現代の擾乱で汚濁されており、風化の激しい土器片が規則性なく流入していることから、本来本遺構に伴うものか疑問視された。おそらくある時点で途中まで掘削されて、そこへ土器片を投棄した状態と推定される。出土した土器片は大型壺1、中型壺2を主体とし、少量の壺、器台片も含まれている。7は大型壺である。胴部破片であり中位に断面台形の突帯が2条つく。突帯部は横ナデ、その他には縦ハケが認められる。現存高29.5cm、胴部最大径71.5cmを測る。8は中型壺

であり、底部を欠損する。胴部は強く張り、口縁は肥厚し、内傾する。頸部の直下に三角突帯が、胴部下半に断面台形の突帯が2条つく。現存器高60.0cm、口縁径46.0cm、胴部最大径55.0cmを測る。9は中型壺である。口唇部と底部を欠損するが、口唇部は意図的に破碎している。合わせて壺棺として使用されたと推定される。胴部は強く張り、胴部下半に断面台形の突帯が2条つく。頸部は強くしまり、その直下に断面三角形の突帯が1条つく。口縁および突帯は横ナデ、その他の外面は縦ハケ、内面は横ハケである。現存器高48.0cm、胴部最大径約56cmを測る。このうち、8と9は形態と大きさからセットであった可能性がある。その他の出土遺物は壺16・17と器台18がある。いずれも弥生時代中期後葉に位置づけられよう。

SK-06 調査区北東側に位置する。SK-05と並列している。平面形は隅丸長方形を呈する土塚墓であり、主軸はN-54°-Eである。長さは1.35m、幅は両端で差があり北東側で0.44m、南西側で0.39mを測り、壁は90°-95°とほぼ垂直である。床面は傾斜があり、両端で15cmの差がある。ちなみに検出面からの深さは北東側で0.52m、南西側で0.35mを測る。土塚内埋土は二分され下部は暗褐色土、上部は黒褐色土である。埋土中からは土器片を少量検出した。土器片には壺口縁19・20、壺底部22・23がある。また器台21は小形である。これらは弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられるものである。

SK-07 調査区北東側にあり、SK-06の西側0.4mに位置する。南側上部を擾乱により破壊される。平面形は隅丸長方形を呈する土塚墓であり、主軸はN-3°30'-Eである。長さは1.20m、幅は両端で差があり北側で0.5m、南側で0.45mを測り、壁は80°である。床面は傾斜があ

調査の記録

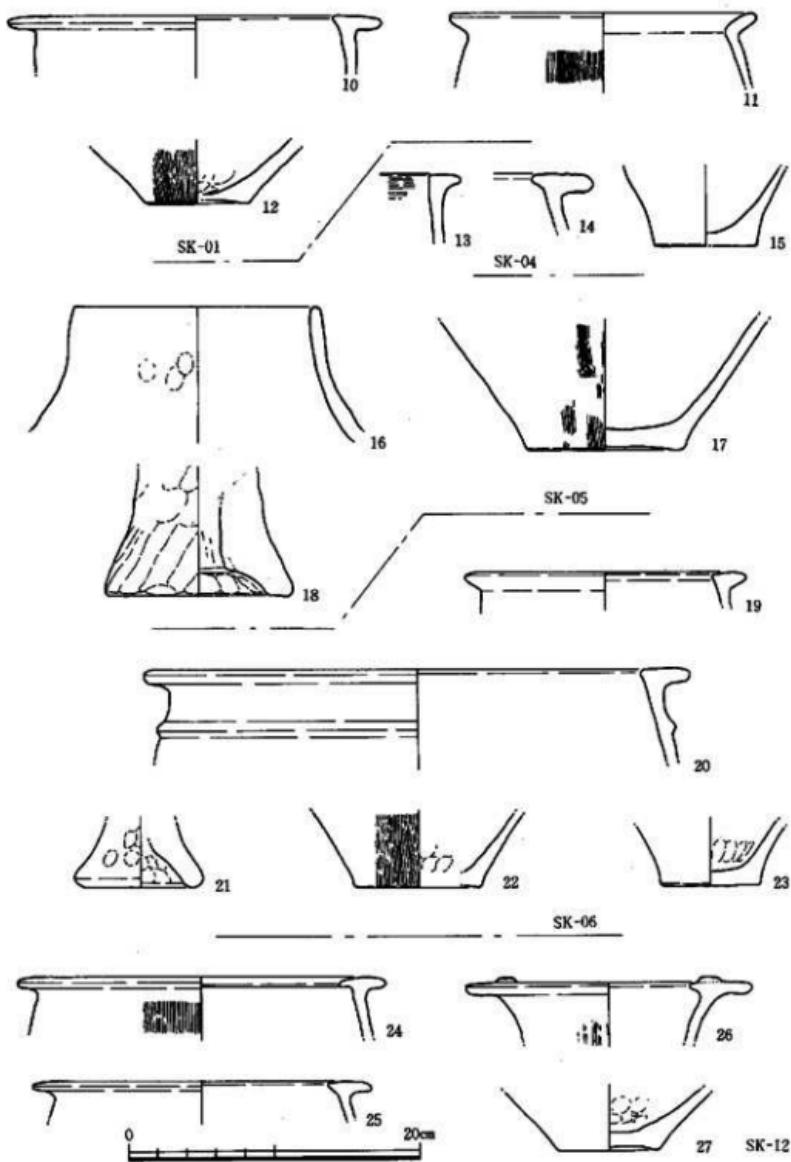


Fig.41 土壌基内出土遺物(1) (縮尺1/4)

第5章 第16次調査地点

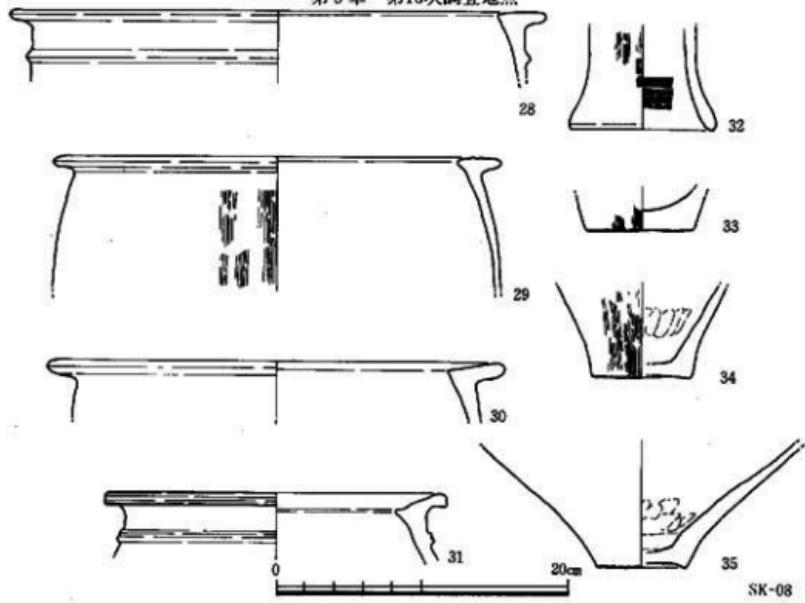


Fig.42 土塚墓内出土遺物2 (縮尺1/4)

り、両端で5cmの差がある。ちなみに検出面からの深さは北側で0.17m、南側で0.22mを測る。土塚内埋土は二分され下部はローム混じりの茶褐色土、上部は暗褐色土である。埋土中からは土器片を少量検出した。

SK-08 調査区北東側にあり、SK-06の北側0.5mに位置している。両側壁は柱痕や搅乱により一部欠失する。平面形は隅丸長方形を呈する土塚墓であり、隅部がややえぐれており、棺材があった可能性がある。主軸はN-73°-Eである。長さは1.30m、幅は両端で差があり東側で0.60m、西側で0.58mを測り、壁は92°-95°とやや内傾気味である。床面は傾斜があり、両端で13cmの差がある。ちなみに検出面からの深さは東側で0.60m、西側で0.47mを測る。土塚内埋土は二分され下部は黄褐色土、上部は黒褐色土である。埋土中からは土器片を多く検出した。出土土器には甕口縁28-31、甕底部33・34、壺底部35、器台基部32などがある。31は赤色顔料が塗布されている。弥生時代中期後葉に位置づけられるものである。

SK-09 調査区北東端にあり、SK-06の東側1.6mに位置する。半分が調査区外に伸びたために拡張して調査した。平面形は隅丸長方形を呈する土塚墓であり、主軸はN-57°30'-Eである。長さは1.37m、幅は両端で差があり北東側で0.72m、南西側で0.51mを測り、壁は約80°-90°である。床面は傾斜があり、両端で8cmの差がある。ちなみに検出面からの深さは北

調査の記録

東側で0.26m、南西側で0.22mを測る。土塙内埋土は三分され上部は黒褐色土、中部は黄褐色土、下部は暗褐色土である。埋土中からは土器片を少量検出した。

SK-11 調査区北東側にあり、擾乱中で検出した。全体に擾乱によって痛んでいるが部分的に残存する埋土があり、土塙墓と判断した。平面形は不明確ながら隅丸長方形を呈する土塙墓と推定される。主軸はN-10°30'-Eである。長さは上端で1.70m、幅は0.6~0.7m程度と推定される。壁は約70°である。床面は中央部が凹んでいるが、一部擾乱もあり、不明確であった。深さは中央部で約0.6mを測る。土塙内埋土は茶褐色土~暗褐色土である。埋土中からは少量の土器片が出土した。

SK-12 調査区北東側にあり、SK-08の北側0.3mに位置する。北側上部を擾乱により破壊される。平面形は隅丸長方形を呈する土塙墓であり、主軸はN-2°30'-Eである。長さは1.12m、幅は0.38~0.43mを測り、壁は約80°~90°である。床面はほぼ平坦であり、検出面からの深さは北側で0.16m、南側で0.26mを測る。なお、土塙内南側に落ち込みが認められたが、埋土の観察から柱痕跡の可能性がある。土塙内埋土は二分され南側は黒褐色土、北側は暗褐色土である。南側から土器片が多く出土した。土器片には甕口縁21・25、甕口縁26、甕底部27がある。

26には赤色顔料が塗布されている。いずれも弥生時代中期中葉に位置づ

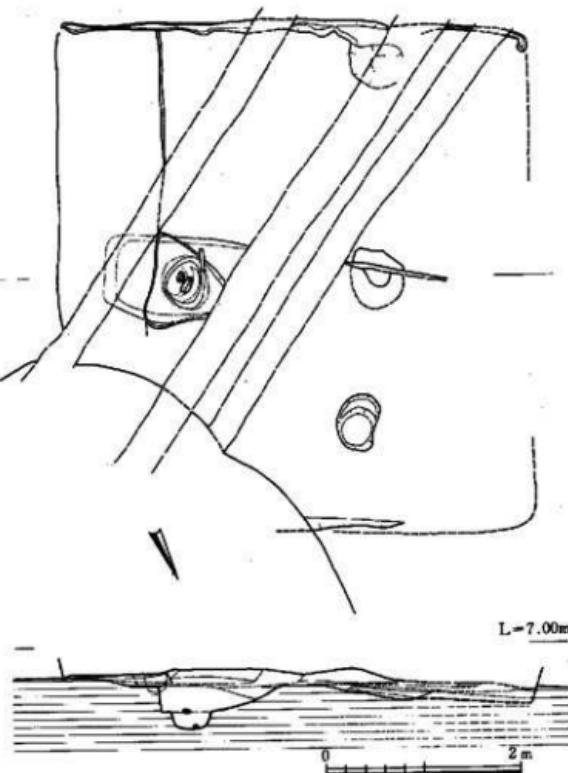


Fig.43 第14号竪穴式住居址実測図 (縮尺1/60)

けられよう。

3) 穫穴式住居址 (SC-14)

調査区の南西側で検出した。隅丸方形の平面形を呈する竪穴式住居址である。住居址のほぼ中央に水道管と下水道管が埋設され、また造成時に上部を削平したために保存状態は極めて悪い。さらに北東側隅部は古墳周溝と推定される溝SD-10に切られている。壁高は最も保存の良い南側壁で約10cmを測り、西側壁は残存しない。住居址はN-26°-Eであり、規模は東西5.3m、南北4.9mを測る。南側壁に沿って深さ約10cmの壁溝が検出された。壁溝は西端で直角に折れ、住居址の西壁を示している。東側には壁と平行に幅1.0~1.1mのベット状遺構が残る。床面は約5cmの段差がある。このベットは地山類似土の盛土によって構築されている。そのベットと床面との接する中央付近に方形の掘り方が認められた。掘り方はベットの下部まで拡がるが、ベット部分は盛土によって覆われていた。掘り方内には深さ約0.5mの柱穴があり、数個の礫と炭化材が出土した。この柱穴は主柱穴と推定されるが、対になるべき柱穴は攪乱などのためか確認できなかった。また、住居中央西よりに0.4×0.5mの範囲に焼土と炭化物の集中する部分（トーン部分）が認められた。北壁中央付近にはSD-10に切られているが、幅0.6mの楕円形の土庇が検出された。その土庇中からは赤色顔料の小塊が出土したがその性格は不明である。

本住居址は検出面で床面が露出している部分もあるほど削平が進んでいる。また攪乱が激しいために、遺物の出土はほとんどない。先の掘り方内から少量の土器片を出土した。36・38は壺、37は器台、39・40は高杯である。39は器壁が薄く、胎土は精良である。41・42は甕である。42には赤色顔料が塗布されている。これらの時期は38・41・42が弥生時代中期後葉、36・37・40が弥生時代後期前葉、39が古墳時代初頭に位置付けられる。また本遺構に切られる柱穴（P-38）が南壁東端にある。その出土遺物には甕4個体がある。105・106は内外面ハケ調整であり、丸みの強い平底である。104は小形の甕であり、内外面をヘラ削りする。107は甕の底部であり、外面にタタキ痕がある。この柱穴の時期は弥生時代後期末葉を示している。以上の点か

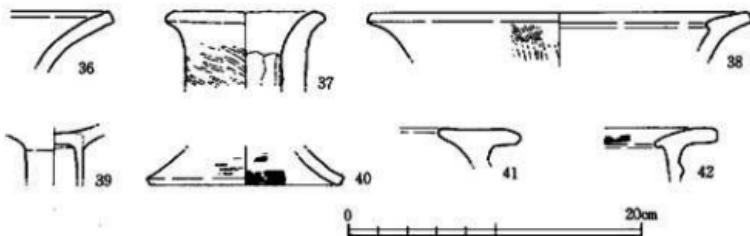


Fig.44 第14号竪穴式住居址出土遺物 (縮尺1/4)

調査の記録

ら本住居址の時期は古墳時代初頭頃と推定される。

4) 古墳周溝 (SD-10)

本造構は調査区中央西よりで検出した溝状造構の一部である。造構は調査区の西側に端を発し、東側にゆるいカーブを描きながら、その延長は南側の建物の下部に伸びている。幅は約5.5mを測り、深さは検出面から約1.0mであり、溝底の幅は約2.5mを測る。なお、溝の底は鳥柄ローム中位に達している。溝の壁面は北側で傾斜がゆるく $25^{\circ} \sim 32^{\circ}$ を測り、南側で 45° 前後と急角度である。また溝の端部となる西側壁は $70^{\circ} \sim 80^{\circ}$ と垂直に近い立ち上がりになっている。溝内の埋土は3層群に分かれる。上部は茶褐色土であり固く締まる。中位は黒褐色土であり固く締まる。上下層に漸移変化し、風化土層と考えられる。下位は茶褐色～黄褐色土であり、最下部でやや砂質を含む。埋土中からは多くの遺物が出土した。特に中位の黒褐色土中から径10～20cm程度の花崗岩円礫や玄武岩板石を多く出土した。これらの石は溝内でも南側に偏在して出土した。出土した玄武岩板石の中に小口面に赤色顔料を塗布したものが認められた。また、埋土中全体から弥生時代～古墳時代の遺物が多量に出土したが、最下部で須恵器环身(93)が破片でまとまって出土した。上部で古代に比定される高台付椀の破片(94)が出土したが、これは未検出の柱痕のなどによる混入の可能性がある。出土状態を重視するなら、先の須恵器が本造構の築造時期の上限を示すものといえよう。

以上の造構の形態と築造時期、埋土中から検出された石材などから古墳の周溝と推定した。同様の例が隣接する第6次調査地点でも検出され、第1号古墳と命名されている。この両者間の距離は直線で約20mを測る。本古墳(SD-10)を比恵遺跡第2号墳(比恵2号墳)とする。

比恵2号墳周溝内からは弥生時代土器、土師器を主とする多量の遺物が出土した。しかし、本造構に伴なうと推定される遺物は先に示した須恵器と考えられる。したがって、その他の遺

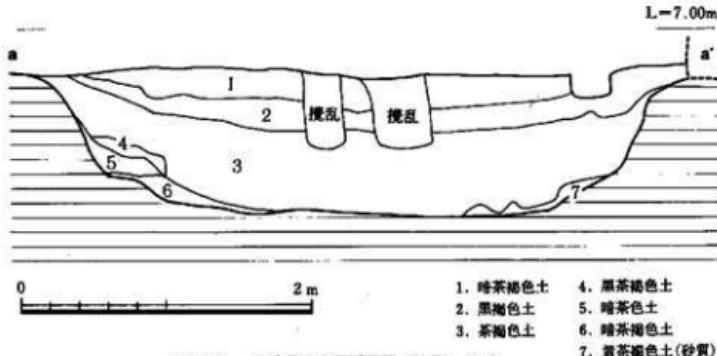


Fig.45 古墳周溝土層断面図 (縮尺1/40)

第5章 第16次調査地点

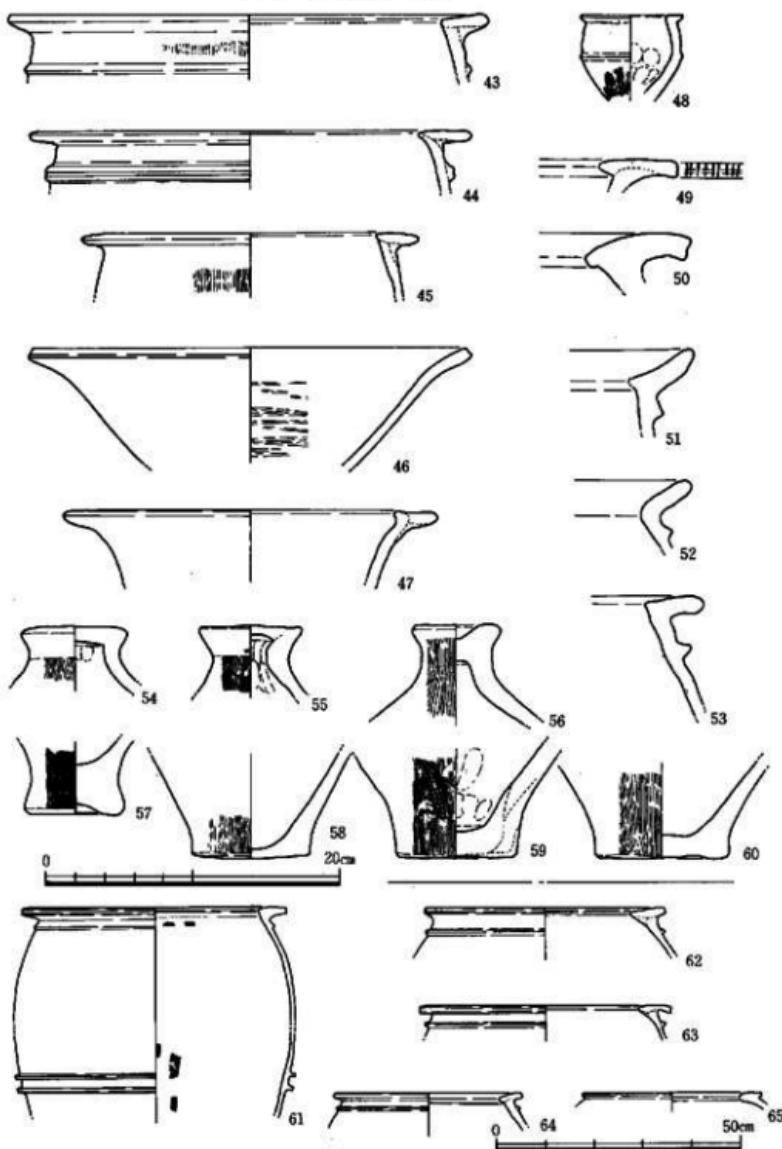


Fig.46 古墳周溝内出土遺物(1) (縮尺1/4・1/12)

調査の記録

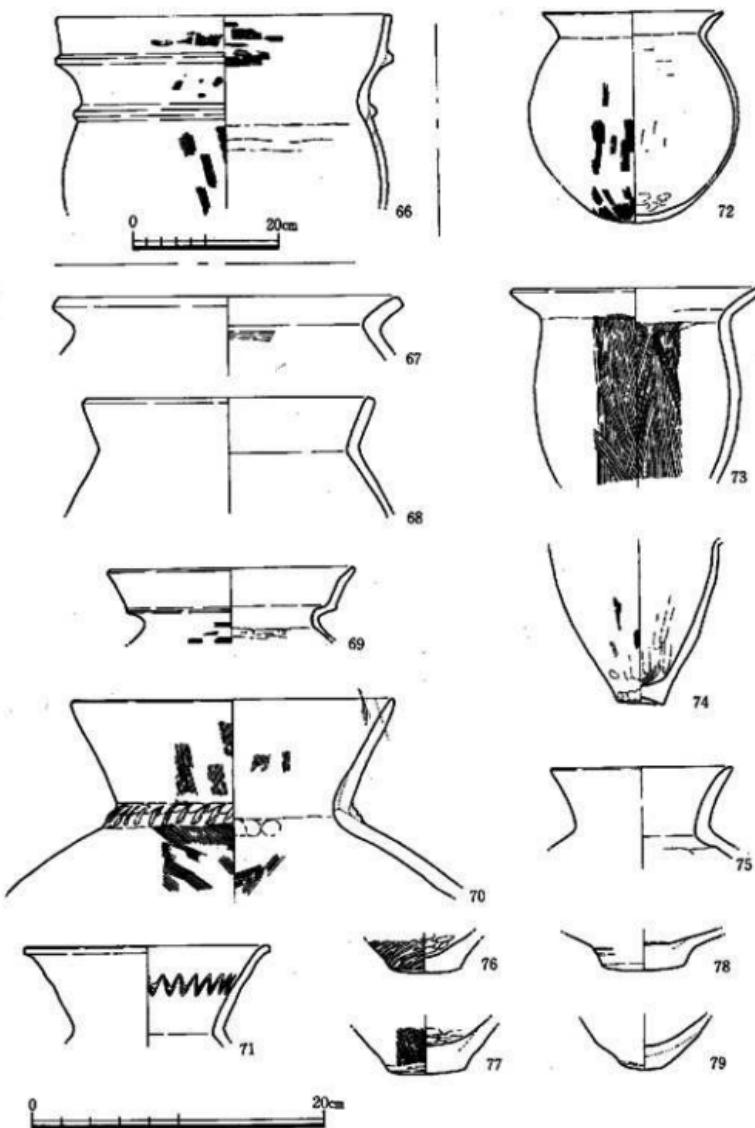


Fig.47 古墳周溝内出土遺物2 (縮尺1/8・1/4)

第5章 第16次調査地点

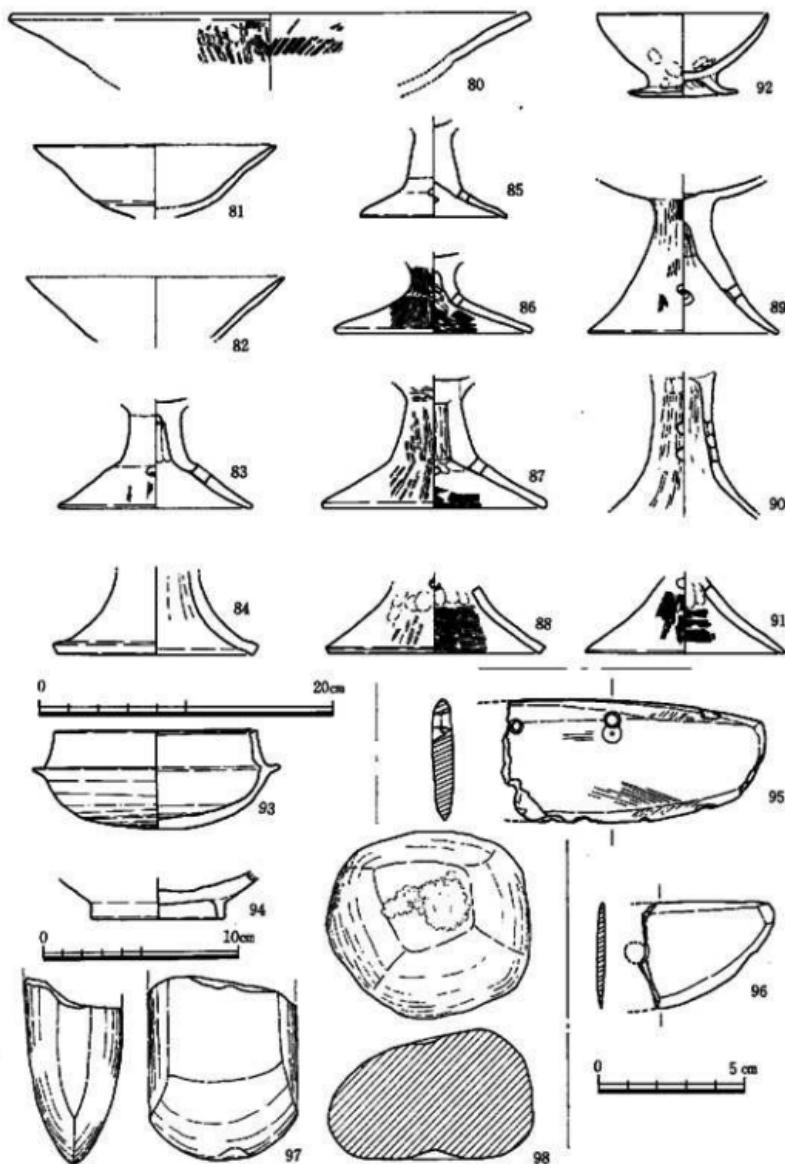


Fig.48 古墳周溝内出土遺物3) (縮尺1/4・1/3・1/2)

調査の記録

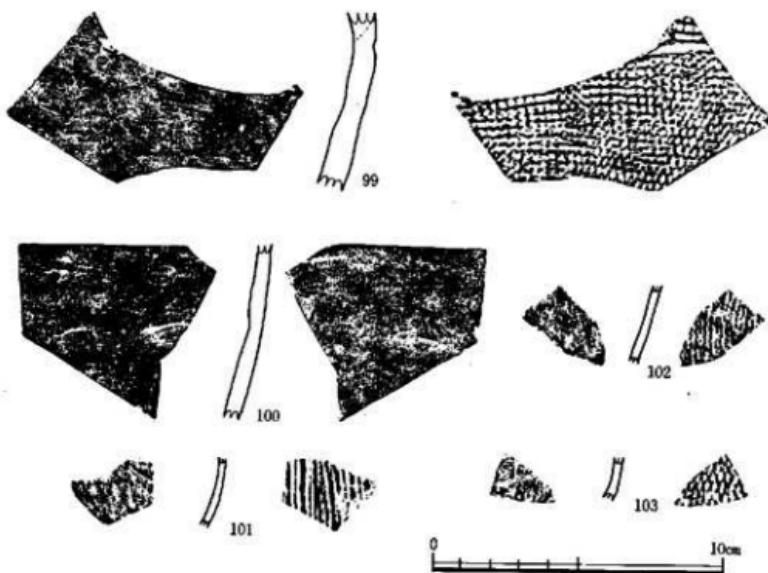


Fig.49 古墳周溝内出土遺物(4) (縮尺1/2)

物は全て混入品と判断される。以下図化が可能なものについて簡単に報告する。

43~65は弥生時代中期中葉から中期末葉に位置付けられる。43~45・50~53・57~60は壺、46は高杯、47・49は臺、54~56は蓋である。44・46は外面に赤色顔料を塗布してある。48はミニチュアの壺である。口縁径は約7cmであり、現存器高は5.8cmを測る。胴部中央に突帯1条がつく。調整は全体に丁寧であり、外面は下半を縦ハケ、上半を横ナデであり、内面は指押さえとナデで仕上げている。やや古い壺の形態の特徴を持っている。61~65は大型壺である。61は口縁から胴部まで復元できた。現存器高約43cm、口縁径54cm、胴部最大径57.5cmを測る。胴部はやや張り、口縁は肥厚し逆L字状に外反する。口縁直下と胴部に2条の高い突帯がつく。62は口縁径約49cmを測り、頸部の下方に断面台形の突帯がつく。63は口縁径約51cmを測る。口縁は水平に張り出し、頸部の直下に断面台形の突帯がつく。64は口縁径39cm、65は口縁径37cmと推定され、同様に肥厚する口縁はやや内傾している。64の口縁直下には三角突帯がつく。以上の61~65は壺棺墓に使用されたものと推定される。67・68・73・74・77・80は弥生時代後期中葉に位置付けられる。80は高杯、その他は壺である。66・69~72・75・76・78・81~92・99・101~103は古墳時代前葉に位置付ける。69・72・76・79は壺、70・71・75・78は臺、81~91

第5章 第16次調査地点

は高坏、92は台付椀である。99・101~103は陶質土器片であるが小片のため器種は不明である。

66は二重口縁の大型壺である。胴部下半を欠損し、現存器高26.5cm、口縁径45.6cm、胴部最大径44.5cmを測る。口縁直下と頸部に断面台形の突帯がつく。外面は突帯部が横ナデ、その他がハケ、内面は口縁付近が横ハケ、胴部は粗いナデである。壺棺墓に使用された可能性がある。69は口縁部が約1/2残存し、口縁径が17cmを測る。いわゆる「山陰系」の壺である。口縁部は横ナデ、肩部外面は横ハケ、内面は横ヘラ削りである。

99は陶質土器片であり、外面は格子タタキの上に一部斜格子タタキ、さらに円線が一条入る。内面はナデである。焼成は良好で外面灰白色、内面青灰色を呈する。胎土には少量の白色砂粒を含む。101・102は陶質土器片と推定される。外面には繩彫文タタキ、内面はナデているが、101には当て具の痕跡がある。两者とも胎土は精良であるが、焼成はあまり、磨滅している。101は外面黒褐色、内面赤褐色を呈する。102は内外面ともに白色を呈する。103は須恵器片か陶質土器片か判断はつけ難い。外面は斜格子が粗い繩彫文であり、内面は削りが見られる。焼成は良好で、外面青灰色、内面灰紫色を呈する。胎土は精良である。

93は須恵器壺身である。口縁径10.2cm、受部径12.6cm、器高5.1cmを測る。立ち上りは高く、僅かに内傾する。口唇部には四線が入り段をなす。受部は長く上面は水平である。底部の回転ヘラ削りは丁寧である。焼成は良好で、外面暗灰色、内面淡青灰色を呈する。胎土には石英粒を多く含む。100は壺片と推定される。内外面ともに丁寧なナデ調整であり、内面に青海波の痕跡が僅かに認められる。焼成は良好であり、外面黒灰色、内面青灰色を呈する。胎土には白色砂粒、石英粒を僅かに含む。

94は土師質高台付椀の高台部付近である。底部の2/3の破片であり、高台径6.8cmを測る。底部をヘラ切り離し後、高台を貼り付けている。

97は太形蛤刃石斧である。今山産出玄武岩製であり、基部を欠損している。98は凹石である。両面に凹部があり、対面する側面に敲打部分がある。

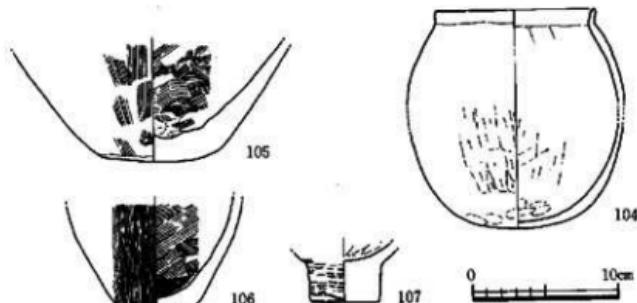


Fig.50 ピット内出土遺物 (縮尺1/4)

第6章 1986・1987年度調査地点概要

1. 第13次調査地点

本調査地点は、前述しているように第7次調査地点北側隣接地にあたり、比恵台地北半部の中央部に位置している。本地点は第7次調査地点に接していることから、弥生時代から古墳時代の集落の存在が予想された。

調査は、排土搬出の場所がなく、現在の区画にしたがって南東部・北西部に2等分し、約50cmの盛土を、除去することから始めた。その結果、掘立柱建物・横列という重要な遺構を検出したため、建物・横列の全体像を把握する必要から、調査対象地の南部の一角も同時に調査した。調査対象地の北西中央部には貯水槽があったため、調査を断念した。さらに北東部の調査終了後、重要な遺構群に関連するものが北西部にも分布する可能性があったので、同遺構群ができるだけ残す形で排土を移動し、北西部の調査を行なった。

調査の結果、弥生時代後期の井戸2基、弥生時代から古墳時代の掘立柱建物3棟+α、横列2条、溝状遺構1条、近世の横列1条が検出された (Fig. 51)。

本地点検出のSB-01は、第7次調査地点検出のSB-02の西側延長部にある。今後、第7・13次調査地点検出のこれをSB-01とする。さらにSB-01の西側の横列をSA-02、同じく東側の横列をSA-03とする (Fig. 52)。SB-01は、全長26.6mの9×2間の東西棟建物である。この建物の柱筋はほぼ通るもの、桁行柱間のスパンに著しいばらつきがある。梁行は西端3.1m、東端が3.4mと差がある。柱振り方は1~1.3mの円形で、柱痕跡の径は30cm前後である。SA-02は、SB-01の西端にとりついて北 (N-2.3°-E) へ延びている。3m前後の布振りの振り方に3本1組の柱を据え、南北方向に通している。3本の柱列は1.2m等間で、全体的に柱筋が通っている。しかし、南北方向の柱間のスパンは一定性がなく、3.1mから2.5mとばらつきがある。柱痕跡は径20cm前後である。SA-03は、SB-01の東端にとりついてSA-02と同様のあり方を示している。

SB-01、SA-02・03は「コ」の字に配列されており、このなかは空間となっている。遺構の規模・配置から官衙の中心的施設の一部と考えられる。この遺構群は出土土器から7世紀に属すると考えられる。このような遺構群は第8次調査地点でも検出されており、日本書紀宣化元年(536)五月条の「修造官家那津口」;いわゆる「那津官家」に関連する遺構群と考えられる。詳細については、報告書を発行する予定である。

参考文献

柳沢一男1987「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」「日本歴史」465号

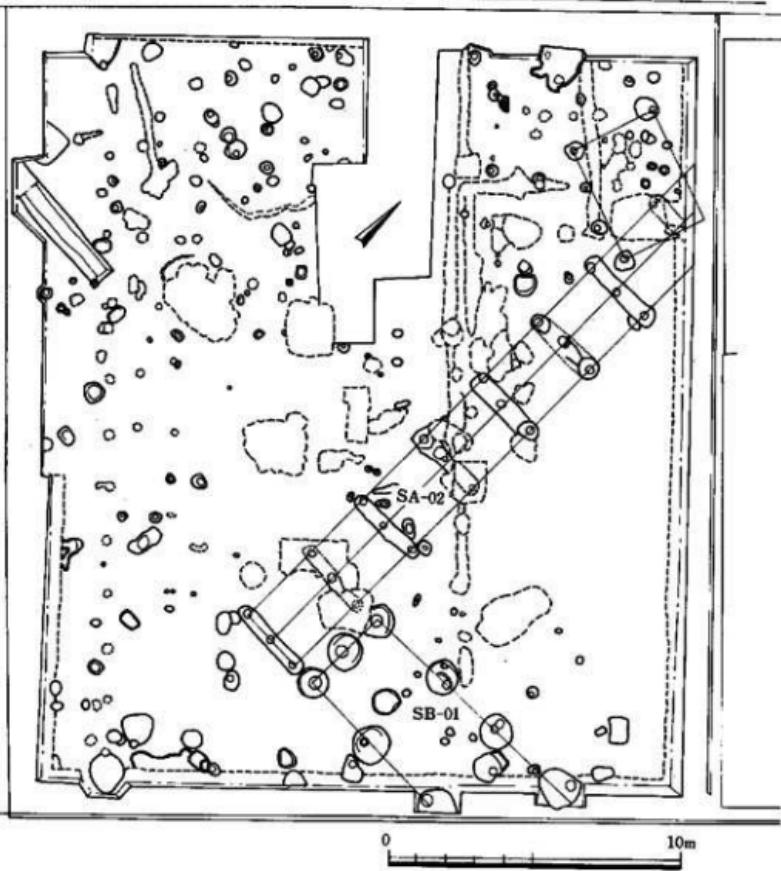


Fig.51 第13次調査地点遺構分布図（縮尺1/200）

第15次調査地点

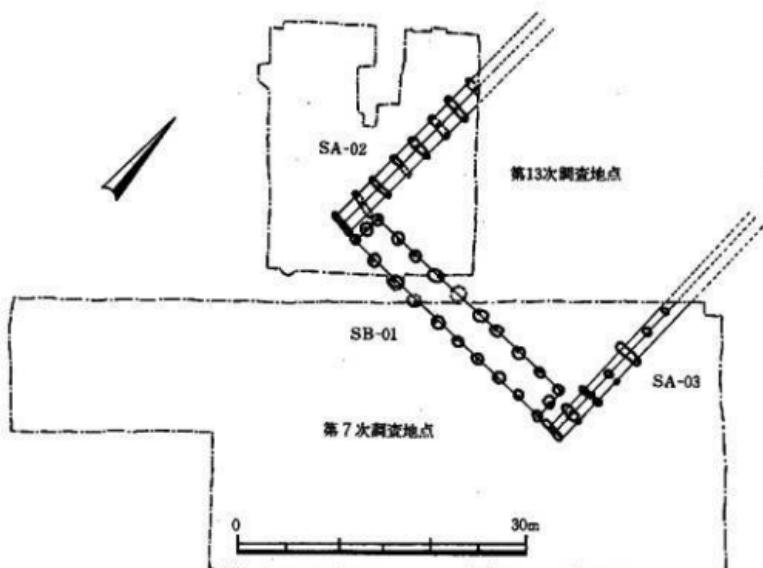


Fig.52 第7・13次調査地点主要遺構分布図 (縮尺1/600)

2. 第15次調査地点

本地点は前述したように、第9次調査地点に接している。弥生時代中期から古墳時代にかけての集落であると予想される。調査は50cm強の盛土を除去することから始まり、隣接地（第9次調査地点）の地権者である福岡放送株式会社のご好意により、堆土を隣接地に置かせもらった。そのため遺構検出面が深いにもかかわらず、ほぼ対象地全域の調査を実施することができた。

検出遺構としては、弥生時代後期前半の溝1条、古墳時代初期の井戸2基、古墳時代後期の溝1条および弥生時代後期から古墳時代の掘立柱建物5棟+α、溝状遺構4条、建物柱穴多数がある。なお、本地点は北西部に浅い谷がある。

第5号溝状遺構（SD-05）は幅2m前後、深さ1.2m前後で、断面U字形をなし、南北に走る溝である。この溝からは丹塗りの祭祀土器が約300点、つぶれた状態で出土した。この溝は出土土器から、弥生時代後期初頭のものであり、本地点北側および南側の調査によっては環濠

第6章 1986·1987年度調査地点概要

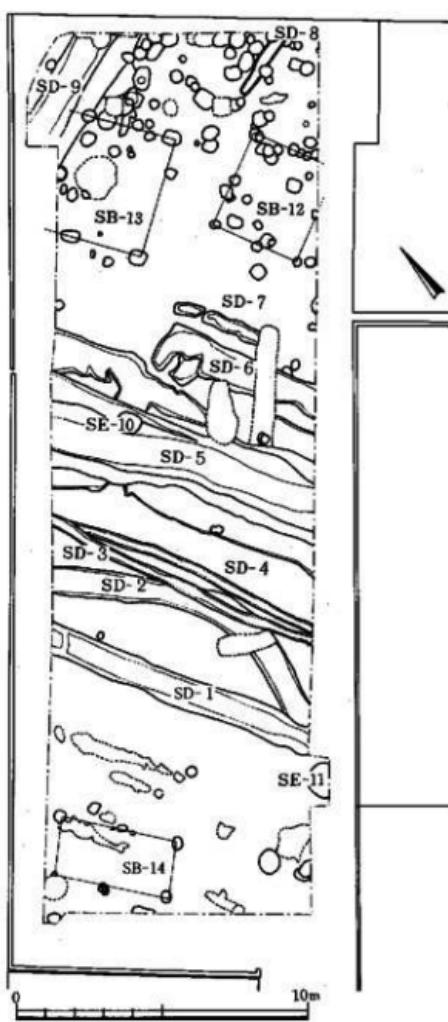


Fig.53 第15次調査地点分布図 (縮尺 1/200)

第15次調査地点

となる可能性がある。

第10・11号井戸（SE-10・11）は円形の井戸で、前者は八女粘土層、後者はその下の硬砂層まで掘り込んでいる。SE-10は鳥栖ロームと八女粘土層間の湧水を用いたと考えられる。SE-10は出土土器から古墳時代初頭のものと考えられ、SE-11は古墳時代前期のものといえる。

掘立柱建物は、方形と円形の柱穴掘り方をもつものがある。いずれも 1×2 間、 2×3 間程度の小規模なもので、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと考えられる。

第9号溝（SD-09）は、第9次調査地点から西に延びてきたものであり、東西方向の方位をとり、出土土器から6世紀後半と考えられるなど、今後の延長部の調査によっては第7・8・13次調査地点検出の官衙的遺構と関連をもつ可能性がある。

本調査地点については、現在整理中であり、詳細については報告書で報告する。

3. 第17次調査地点

本調査地点は、前述したように第6次調査地点に接し、第16次調査地点北側にあたる。調査は10~30cmの盛土を除去することから始めた。なお、排土は地権者に搬出してもらった。表土を除去すると、鳥柄ロームを基盤とする遺構が検出された。本地点はL字形になっており、東南部は現代の搅乱が激しいため排土置場として使用した。

検出遺構としては、弥生時代中期後半から同後期前半の井戸5基・竪穴式住居址4基・掘立柱建物1棟+α・土塁1基および第6次調査地点の古墳（恵享1号墳）の続き部分がある。

竪穴式住居址（SC-08-11・13）は、遺存状態が悪く、柱穴および中央炉穴を残すのみである。これらの竪穴式住居址は中央炉穴および柱穴出土の土器から、弥生時代中期後半のものといえる。また、SC-09-11は、柱穴の切り合い関係から2・3回の建て替えが行なわれたと考えられる。円形プランで、8本前後の主柱穴と中央炉穴からなる竪穴式住居址である。

第1・4号井戸（SE-01・04）は、径1m前後の円形プランをもち、鳥柄ローム層を掘り込んでいるが、含水層まで達していない、涌き水を利用する井戸と考えられる。この2基の井戸は出土土器から弥生時代後期前半に属するといえる。なお、SE-01からは銅鏡が出土している。第2・3・5号井戸（SE-02・03・05）は、径1m強の円形プランをもち、鳥柄ローム層・八女粘土層・硬砂層まで掘り込んでいる。SE-03は崩壊のため完掘できなかったが、遺存状態は3m前後である。それぞれの井戸からは弥生時代中期後半に属する壺形土器・鉢形土器・羹形土器の完形品が3~5個かたまって出土した。なお、SE-02・05からは、三叉鏡などの木製農具も出土した。

以上の検出遺構および出土遺物から、本地点は弥生時代中期後半から後期前半に居住空間と

第6章 1986・1987年度調査地点概要

して利用されていたことがわかった。このことは第6・16次調査地点に同時代の墓域があり、比恵遺跡群における空間利用の一つのパターンを示しているといえよう。

本調査地点については、現在整理中であり、詳細については報告書で報告する。

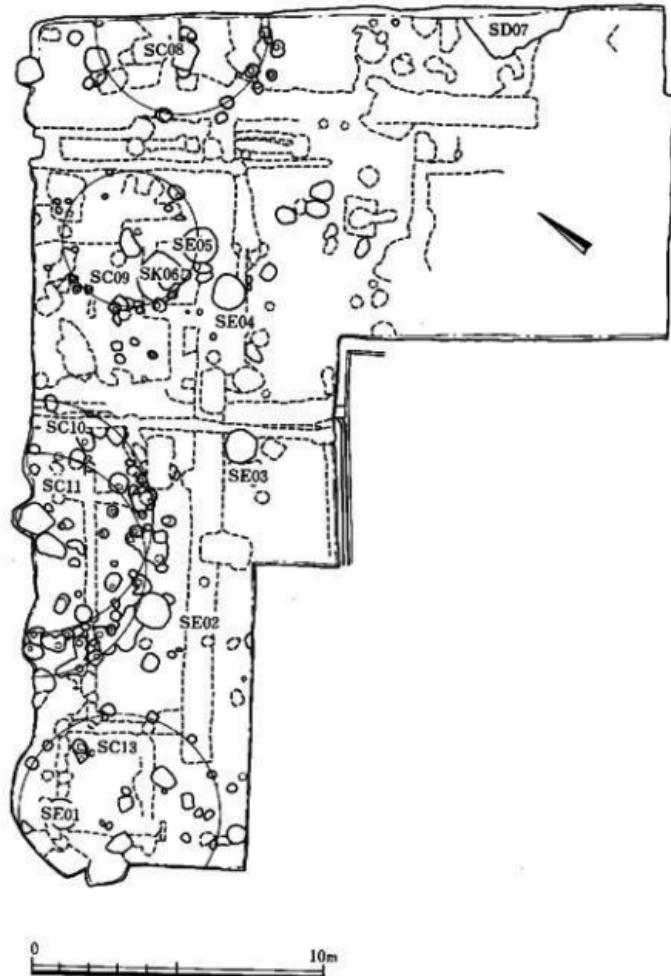


Fig.54 第17次調査地点分布図 (縮尺 1/200)

第7章 結語

1986・1987年度に実施した比恵遺跡群の発掘調査の報告並びに概要を示した。ここではそれらの調査成果を概観し、これまでの17次におよぶ比恵遺跡群の調査を通じて、その成果と問題点を提出してみたい。なお、これまでの調査総面積は約15,000m²に達するが、これは比恵遺跡群全体の2%程度である。調査はようやく緒初についたという段階である。

第12次調査地点では、弥生時代後期末葉の竪穴式住居址1と古墳時代初頭頃の掘立柱建物3棟を検出した。この時期の集落は比恵遺跡群のはば全域で検出されており、その拡がりを知る上で貴重であった。また遺構こそ未確認であったが、弥生時代前期と同中期後葉～後期中葉の遺物も多数検出された。今後別段の調査では注意が必要である。中でも弥生時代前期の遺物は比恵遺跡群では第3・8、4次調査地点に次いで3地点目の発見である。これらの地点はいずれも比恵丘陵の先端部にあたり、博多との間の後背湿地に隣接する地点になる。水田遺構の検出も含めて、集落形態の追跡は今後の課題としたい。

第14次調査地点では、弥生時代中期後葉～後期末葉の井戸6基、土塙1基、柱穴があり、竪穴式住居址1は不確定であるが、同後期から古墳時代前葉の間に位置付けられる。この期間は付近が継続して集落であったことを示している。調査地点は台地中央部にあたり、こうした内陸部への集落の進出は、第9・10次、第15次、第6次、第16次、第17次調査地点の成果でも、同様に弥生中期後葉に比定される。当該期の集落形態の検討は今後の課題としたい。なお本調査地点では古墳時代後期の土塙1が検出されている。同時期の遺構は第6～9次、第13次、第15次調査地点で検出されている。その中には今回概要を示した第7・13次調査地点や第8次調査地点に官衙的色彩の強い遺構群が検出され、いわゆる「那津官家」との関係も検討されている。これらの検討のためにも各調査地点の当該期遺構の集成を進めていきたい。

第16次調査地点では、弥生時代中期後葉～後期初頭に位置付けられる甕棺墓・土塙墓群を検出した。これらは第2・6次調査地点で検出されていた甕棺墓群の西側にあたり、分布状態から墓域の西端を示している。これまでにこの墓域から甕棺約60基、土塙墓約10基が検出されている。墓域は平面的に限定された範囲に群集しており、南側は不明であるが、およそ東西約22m、南北約30mの区画におさまると見てよい。第6次調査地点では、その区画の中央部に大形の墓址を持ち銅劍を副葬する甕棺SK-28が検出され、中心的主体部をなしている。甕棺の検出レベルも中央に高く、周辺に低いなど、この区画が本来墳丘を有していたことを示している。甕棺の時期幅は大きく、弥生時代中期前葉から同後期初頭まで経営された墳丘墓と推定される。この墳丘墓の構造や性格については別稿を予定している。

第16次調査地点では他に古墳時代初頭の竪穴式住居址が検出されている。同時期の住居址群

第7章 結語

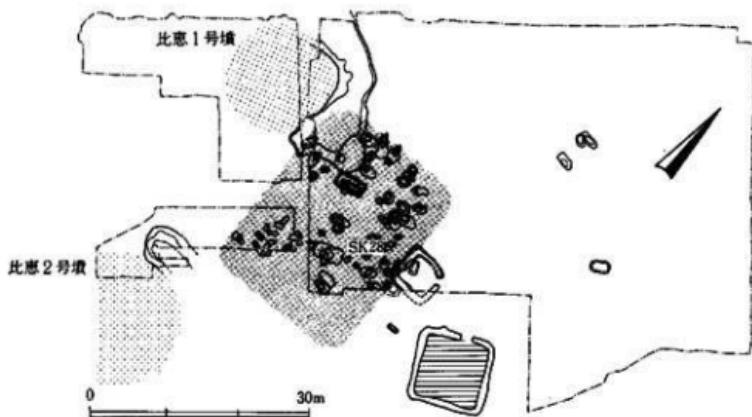


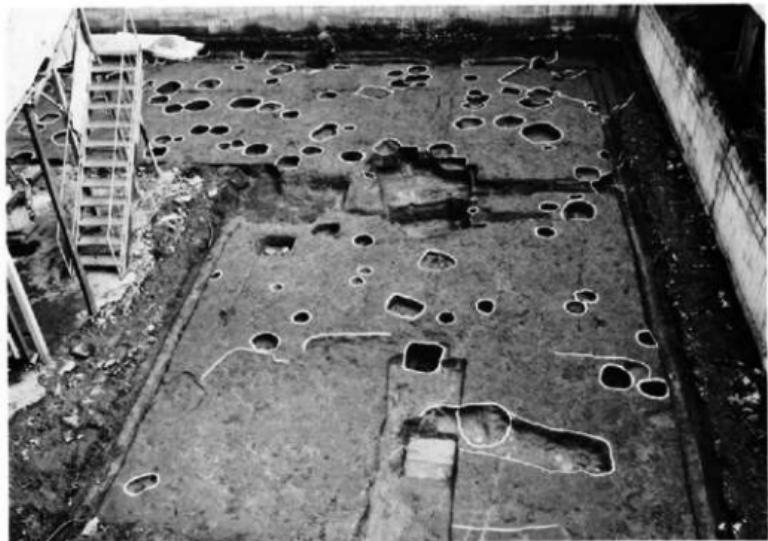
Fig.55 第2・6・16・17次調査地点における墳墓とその分布 (縮尺1/800)

は、西側の第5次調査地点で数10基が検出されており、その住居址群の西端を示すものと言えよう。

また、第16次調査地点では、古墳周溝も検出した。比恵2号墳は部分的な検出であり全体像は不明である。規模はわずかにみられる溝底の曲線から径15~20m程度の墳丘と推定される。周溝は完周せず、陸橋部を持つものであり、埋土中からは須恵器と石室材を含む石が出土した。須恵器は古式のものであり、小田編年でIb期、陶邑ではTK-23~TK-47に併行する時期であり、5世紀末~6世紀初頭に位置付けたい。隣接する第6次・第17次調査地点で検出された比恵1号墳は、約20m北側に位置している。第17次調査地点の状況から、やはり周溝は完周しないことが判明した。周溝内からは石材と共に古式の須恵器が検出され、小田編年でIa期、陶邑ではTK-208に位置付けられる。比恵2号墳に先行し、5世紀後葉に位置付けられよう。比恵遺跡群ではこれまで古墳群の存在は知られていなかったが、今後はその分布と構成を追求していきたい。なお、比恵2号墳周溝内からは混入品であるが、弥生時代中期~後期、古墳時代前期の遺物が多く出土した。特に後者には古式土師器と共に陶質土器片が認められた。これまでに第4・6・7次調査地点でも検出されており、その所属時期の限定と器種、形態を明らかにし、その出現の背景を検討していきたい。

図 版

PLATES



(1)比恵12次調査区南半(北より)



(2)比恵12次調査区北半(南より)

PL. 2



(1)第1号竪穴式住居址(SC-01)(南より)



(2)第5号掘立柱建物(SB-05)(東より)



(3)第6号掘立柱建物(SB-06)(北東より)



(4)第7号掘立柱建物(SB-07)(北より)



(5)第8号溝(SD-08)(南より)

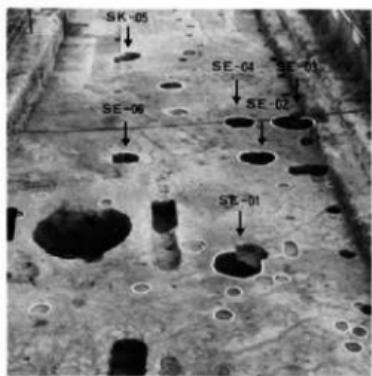


(1)比恵14次調査区全景(南西より)

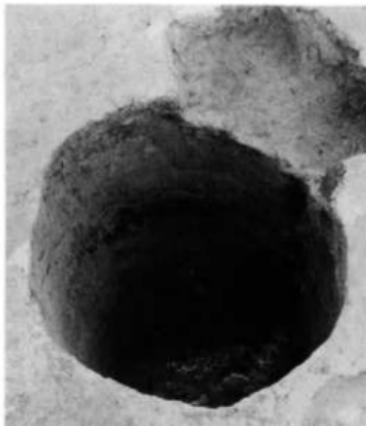


(2)比恵14次調査区北東部全景(南西より)

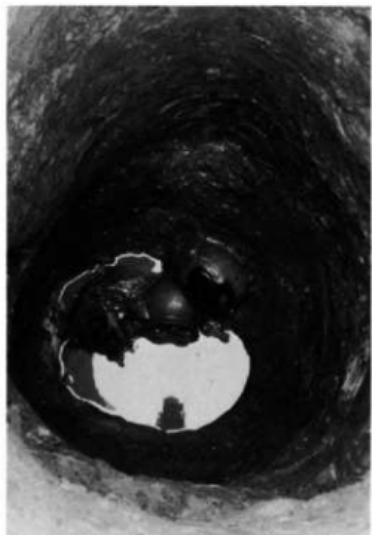
PL. 4



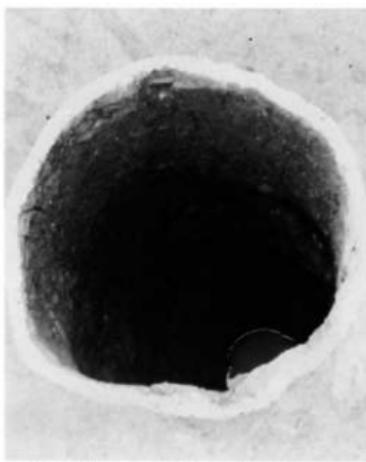
(1)調査区内井戸分布状況(南西より)



(2)第1号井戸(SE-01)完掘状況(西より)



(3)第2号井戸(SE-02)遺物出土状況(西より)



(4)第2号井戸(SE-02)完掘状況(北東より)



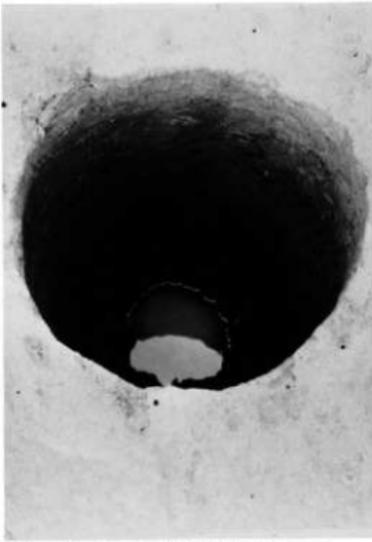
(1)第3号井戸(SE-03)遺物出土状況(北より)



(2)第3号井戸(SE-03)完掘状況(北西より)

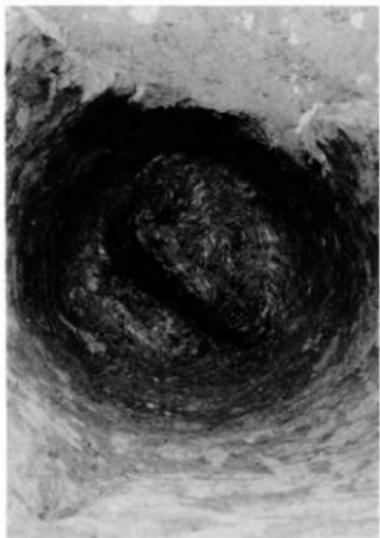


(3)第4号井戸(SE-04)遺物出土状況(南より)



(4)第4号井戸(SE-04)完掘状況(南西より)

PL. 6



(1)第6号井戸(SE-06)遺物出土状況(南西より)



(2)第6号井戸(SE-06)完掘状況(北東より)



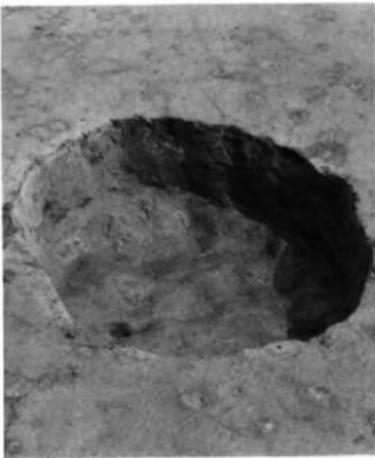
(3)第8号井戸(SE-08)遺物出土状況(北より)



(4)第8号井戸(SE-08)完掘状況(北東より)



(1) 第5号土塚(SK-05) 遺物出土状況(北東より)



(2) 第5号土塚(SK-05) 完掘状況(北西より)



(3) 第7号土塚(SK-07) 完掘状況(南より)



(4) 第9号竪穴式住居址(SC-09) 完掘状況(北より)



19



18



17

第2号井戸(SE-02)出土土器



輪状痕拡大

(1)第3号井戸(SE-03)出土土器



27



26



28



52



48

(2)第4号井戸(SE-04)出土土器1

PL.10



50



51



49

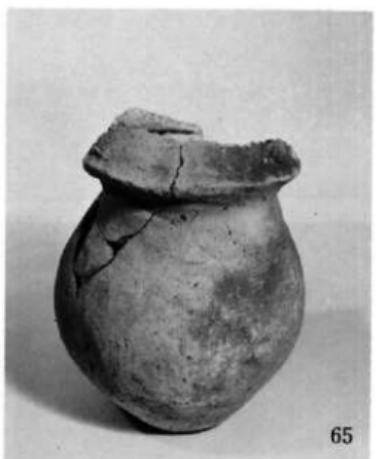


54



53

第4号井戸(SE-04)出土土器2



(1)第8号井戸(SE-08)出土土器

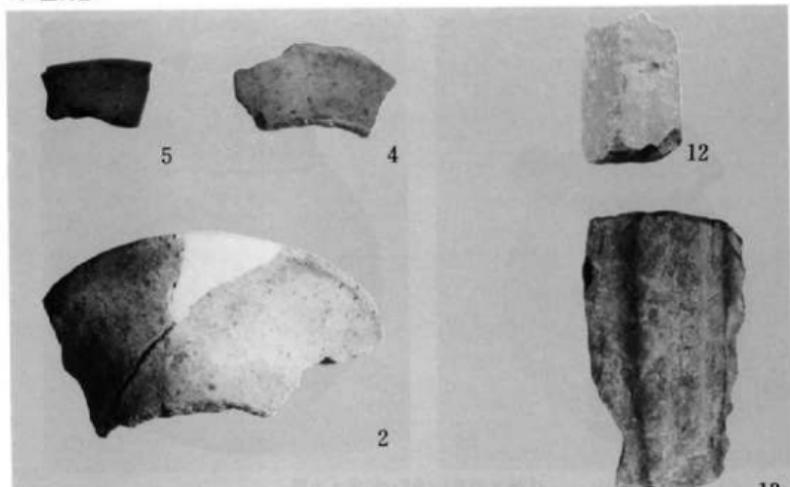


(2)第5号土塁(SK-05)出土土器



(3)第7号土塁(SK-07)出土土器

PL.12



(1)第1号井戸(SE-01)出土遺物



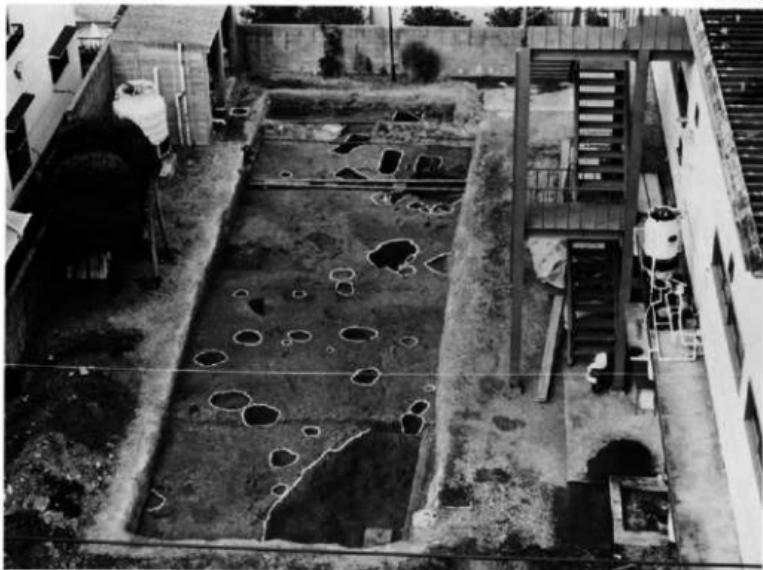
(2)第2号井戸(SE-02)出土遺物



(3)第3号井戸(SE-03)出土遺物



(4)第8号井戸(SE-08)出土遺物



(1)比恵16次調査区北東部(南西より)



(2)比恵16次調査区北東部(北より)



(1)第1号斐棺墓(SK-01)(北より)



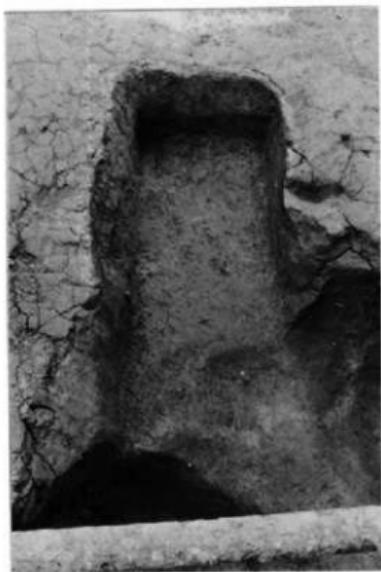
(2)第2号斐棺墓(SK-02)(東より)



(3)第3号斐棺墓(SK-03)(西より)



(4)第13号斐棺墓(SK-13)(東より)



(1) 第5号土塚墓(SK-05)完掘状況(南西より)



(2) 第6号土塚墓(SK-06)完掘状況(南西より)



(3) 第7号土塚墓(SK-07)完掘状況(北より)



(4) 第8号土塚墓(SK-08)完掘状況(西より)



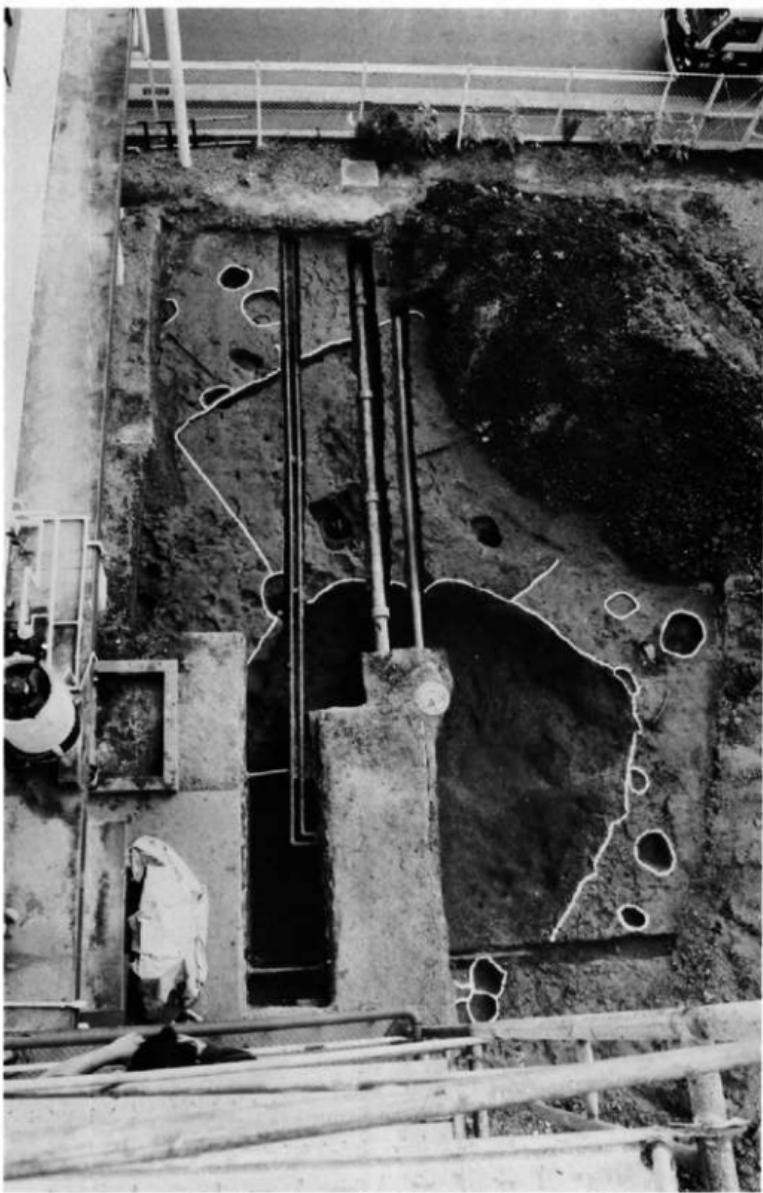
(1)第11号土塙墓(SK-11)完掘状況(北より)



(2)第12号土塙墓(SK-12)完掘状況(北より)



(3)古墳周溝(SD-10)完掘状況(南より)



調査区西側・古墳周溝(SD-10)及び第14号竪穴式住居址(SC-14)(南東より)



1

(1)第1号斐棺墓(SK-01)出土斐棺(上斐)



4

(3)第3号斐棺墓(SK-03)出土斐棺(上斐)



2

(2)第1号斐棺墓(SK-01)出土斐棺(下斐)

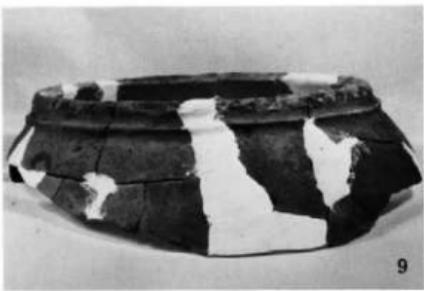


5

(4)第3号斐棺墓(SK-03)出土斐棺(下斐)



(1)第2号斐棺墓(SK-02)出土斐棺



(3)第5号土塚墓(SK-05)出土斐棺



(4)第5号土塚墓(SK-05)出土斐棺



(2)第13号斐棺墓(SK-13)出土斐棺(下斐)



(5)古墳周溝(SD-10)出土須恵器



(1)此恵13次調査区全景(東半部) (南西より)



(2)此恵13次調査区全景(東部隅を除く) (南西より)



(1)比恵15次調査区全景(北東より)



(2)比恵15次調査区及び周辺景観(北東より)



(1)比恵17次調査区・調査途中全景(北東より)



(2)比恵17次調査区・完掘後全景(北東より)

比恵遺跡群(8)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第174集

1988年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10-29
印刷 博巧印刷株式会社



比叡造跡群の旧地形復元および調査地点分布図(トーン部分は低地部)(縮尺1/4,000)